



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集

上里町

中堀遺跡

御陣場川堤調節池関係
埋蔵文化財調査報告
〈第4分冊〉

1997

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

口	絵		(12) 馬骨・人骨	975
序			(13) 畝状遺構・風倒木痕	977
例	言		(14) 小穴	981
目	次		(15) 遺物包含層中の遺物	995
		(第1分冊)	a 9世紀の遺物出土状況	995
I	調査の概要	1	b 10世紀の遺物出土状況	1001
	1 調査に至る経過	1	c 灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・	
	2 発掘調査・報告書作成の経過	2	黒色土器	1004
	3 発掘調査・整理・報告書作成の組織	4	d 長頸壺	1017
II	立地と環境	7	e 大甕	1018
III	遺跡の概要	15	f 土錘	1023
IV	遺構と遺物	21	g 平瓦・丸瓦	1031
	1 縄文時代	21	h フイゴ羽口	1037
	2 古墳時代	33	i 金属製品	1042
	(1) 竪穴式住居跡	33	J 円板状土製品	1045
	(2) 溝跡	41	k 切石	1045
	3 古代	43	l 置きカマド	1045
	(1) 竪穴式住居跡	44	m 砥石	1045
	(第140号住居跡まで)	326	n 棹秤の権	1046
		(第2分冊)	4 中世	1047
	(第141号住居跡から)	327	(1) 竪穴状遺構	1049
	(2) 掘立柱建物跡	579	(2) 掘立柱建物跡	1055
		(第3分冊)	(3) 溝	1055
	(3) 建物地業跡	707	(4) 集石	1056
	(4) 区画溝・溝・集石列	749	(5) 火葬墓	1061
	(5) 柵列・道路跡・橋状遺構	807	(6) 中世の遺物	1061
	(6) 土壇	821		(第4分冊)
	(7) 井戸跡	927	V 結語	1065
	(8) 竪穴状遺構	935	附編	1392
	(9) 鍛冶炉跡	949		(第5分冊)
	(10) 大甕埋設遺構	955	写真図版	
	(11) 土器埋設遺構	967		

(第4分冊) 目次

V 結語

1	中堀遺跡出土の遺物について	1065
(1)	古墳時代前期の土器	福田 聖 1065
(2)	平安時代の土器の変遷	田中広明・末木啓介 1072
(3)	供膳具	田中広明 1090
(4)	煮炊具	末木啓介 1110
(5)	船載陶磁器	田中広明 1145
(6)	金付着灰釉陶器	田中広明 1148
(7)	灰釉陶器	田中広明 1151
(8)	鉄鉢形土器	兵ゆり子 1197
(9)	墨書土器	田中広明 1208
(10)	円板状土製品	岩瀬 譲 1213
(11)	土錘	兵ゆり子 1217
(12)	石製の権	福田 聖 1226
(13)	紡錘車	兵ゆり子 1229
(14)	金属製品	瀧瀬芳之 1237
(15)	鍛冶関連遺物	田中正夫 1272
(16)	瓦	木戸春夫 1282
(17)	漆紙文書	弘前大学 鐘江宏之 1287
2	中堀遺跡の遺構と遺跡について	1289
(1)	遺構の変遷	末木啓介 1289
(2)	住居跡とカマド	末木啓介 1305
(3)	大甕埋設遺構	田中広明 1325
(4)	土器埋設遺構	末木啓介 1327
(5)	区画施設と集落	田中広明 1332
3	中堀遺跡の特色と歴史的 성격	田中広明 1339
(1)	中堀遺跡の歴史的 성격 (仮説)	1339
(2)	北武蔵の集落の動態と史的動向	1342
(3)	史的動向と中堀遺跡	1351
(4)	勅旨田開発と中堀遺跡	1358
(5)	出土遺物からみた中堀遺跡	1362
	参考文献	1368

附編

1 古環境・動植物について

	パリノサーベイ株式会社	1392
(1)	標準堆積層の調査	1392
(2)	遺跡周辺の高植生	1394
(3)	住居跡から出土した炭化物について	1396
(4)	埋甕の内容物推定	1397
(5)	池および区画溝の水域環境	1398
(6)	カマド燃料材に関する検討	1399
(7)	植物利用について	1400

2 金属について 川崎テクノリサーチ株式会社 1405

(1)	金付着灰釉陶器・銅滓の分析	1405
(2)	鉄製品・鉄滓・粘土製品の分析	1406

3 出土土器と瓦の胎土分析 第四紀研究所 1410

V 結語

1 中堀遺跡出土の遺物について

(1) 古墳時代前期の土器

中堀遺跡からは、6軒の竪穴住居跡と溝跡1条が検出されている。各々の遺構は古代の遺構や攪乱のため破壊されており、良好な遺存状況とは言い難い。出土遺物も断片的で良好な資料とは言い難い。本項では、同時期と考えられる周辺遺跡出土資料を参考に、本遺跡出土資料の位置づけを試みることにしたい。

本遺跡出土資料の内、編年的な検討に耐える程度に全形を知れるものは、2号住居跡の1・5・6、4号住居跡13、5号住居跡13のみで、他は部分的な器形を知れるのみである。そこで、各住居跡に共通する壺とS字状口縁台付甕を比較すると、端部の技法等で細分できるものの壺の頸部の収縮具合、S字状口縁台付甕の口縁部の作り方から、あえて時期を細分する必要はないものと思われる。また、特徴的な器種として脚部が柱状を呈する高坏（以下では柱状高坏と仮称する）をあげることができる（第832図）。

埼玉県北部、特に本庄市、児玉町、美里町は後張遺跡や夏目遺跡といった古墳時代前期、中期で著名な遺跡が多い。

本遺跡出土資料と同様の土器群あるいは近接する時

期と考えられる土器群を出土した遺跡には、児玉町後張遺跡（立石1982・1983）、川越田遺跡（富田・赤熊1985、恋河内1993）、雷電下遺跡（駒宮ほか1979、恋河内1990）、地神遺跡[※]、塚畠遺跡（鈴木ほか1991）、浅見境北遺跡（恋河内1997）、本庄市下田遺跡、諏訪遺跡（小久保・柿沼1979）、社具路遺跡（長谷川1987）、美里町村後遺跡（細田1984）等がある。

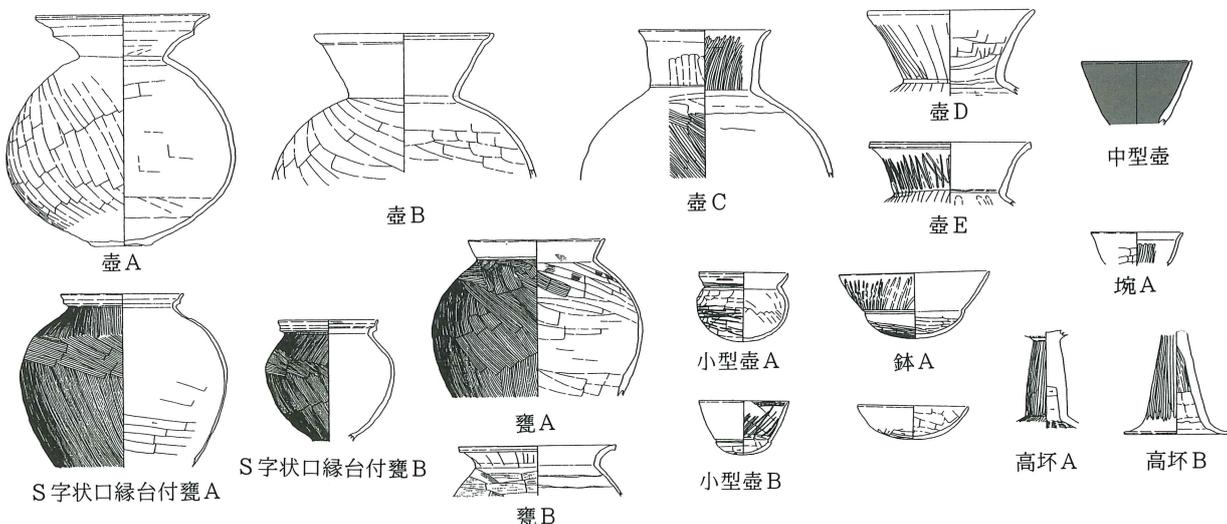
また、本地域と近接する妻沼低地では深谷市根絡遺跡（木戸1995）、熊谷市北島遺跡（大谷1991）から同様の時期と考えられる良好な土器群が出土している。

特に中堀遺跡同様の柱状高坏を含む住居跡出土の良好な資料は、児玉地域では雷電下遺跡25号住居跡、諏訪遺跡25号住居跡、下田遺跡5号住居跡、後張遺跡166・177号住居跡等から出土している。

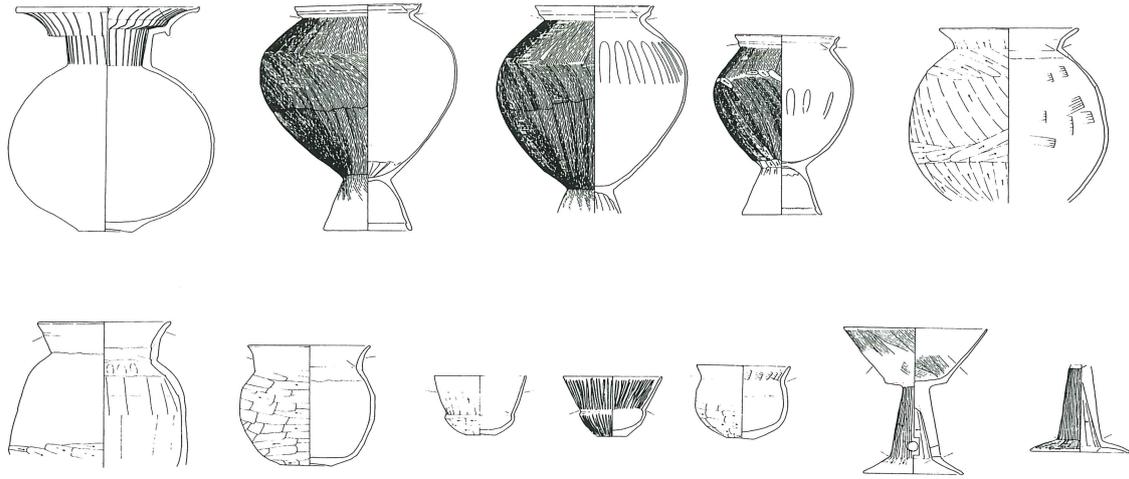
これらの土器群は、壺・甕の球形→長胴傾向、刷毛・磨き多用→ケズリ多用、小型壺Bの体部の矮小化という点に着目すると、おおよそ2時期に分けられる可能性が高い。

本項では詳述する余裕はないが、仮に古段階、新段階と仮称して、その様相を略述することにしたい。

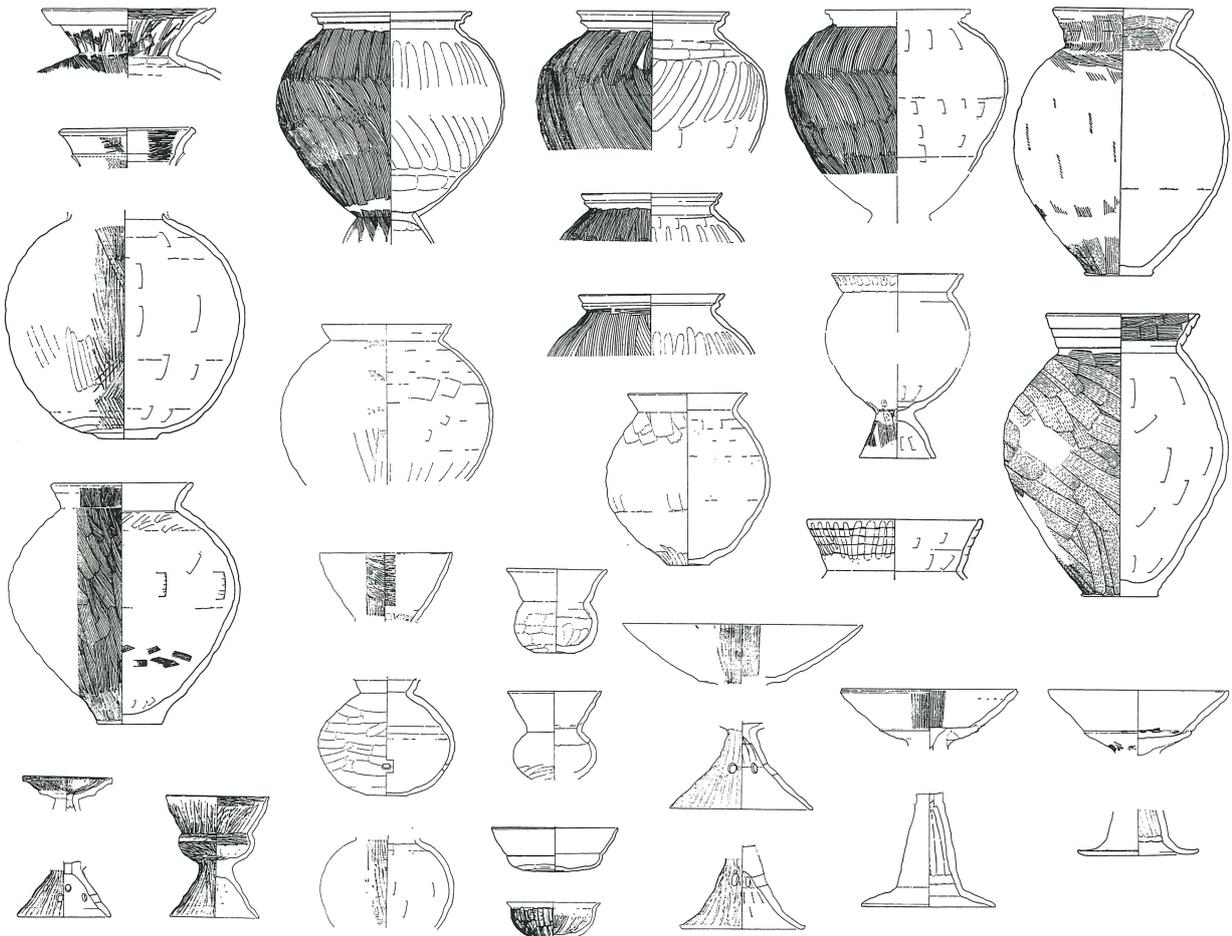
第832図 中堀遺跡出土土器の器種



第833図 児玉地域の古段階の土器

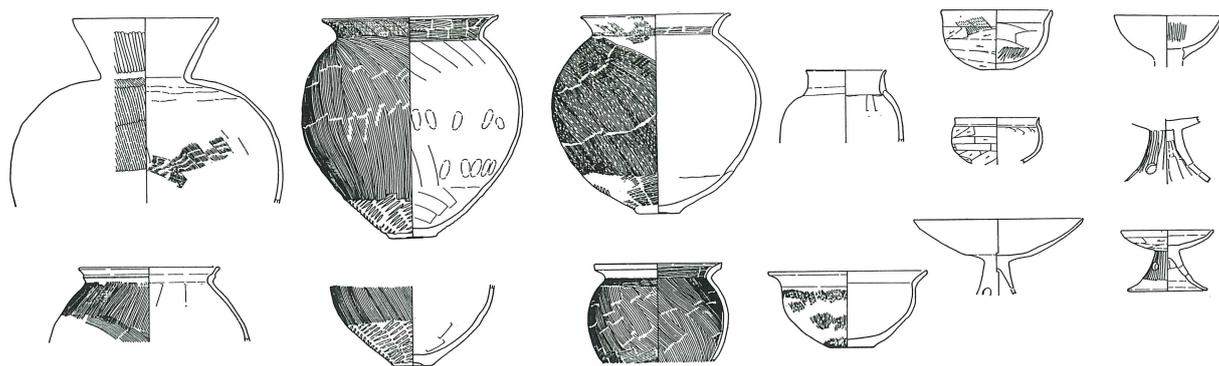


後張遺跡 166号住居跡

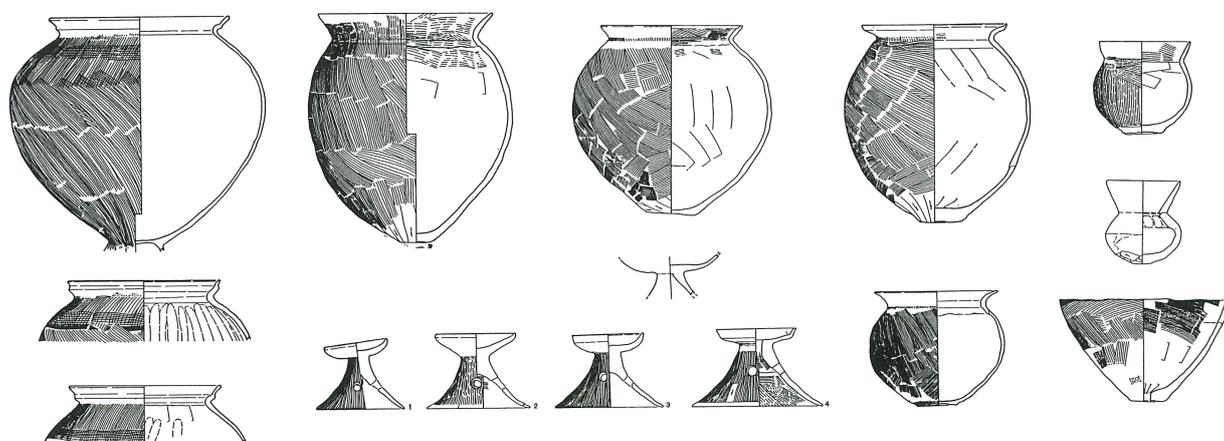


雷電下遺跡 25号住居跡

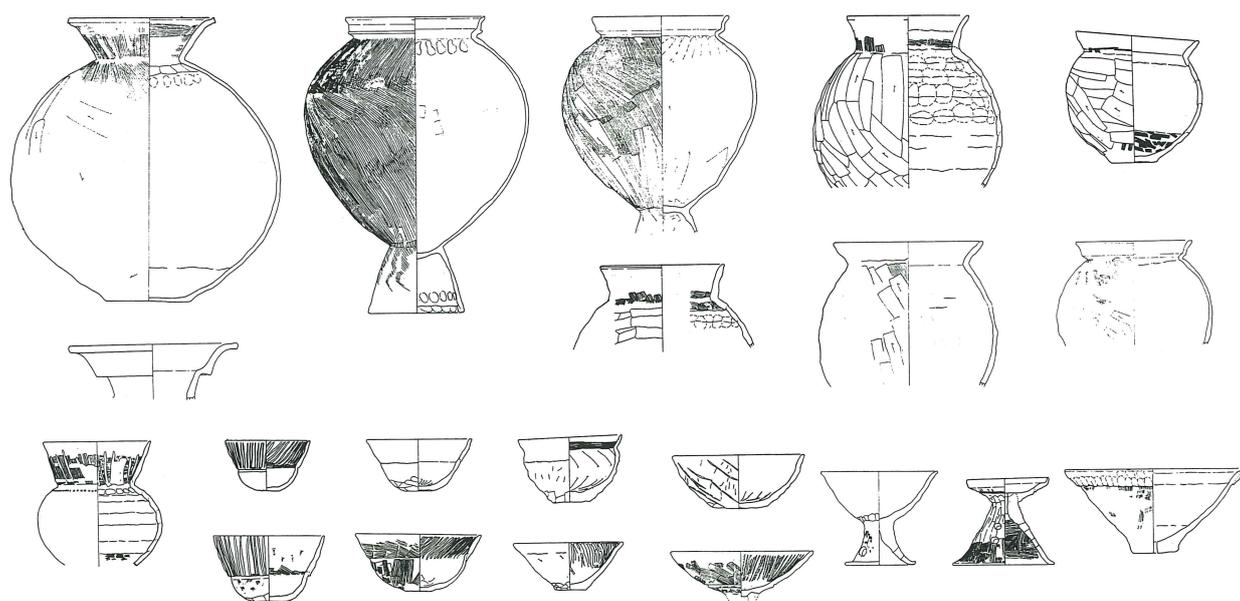
第834図 児玉地域の古・新段階の土器



川越田遺跡 24号住居跡

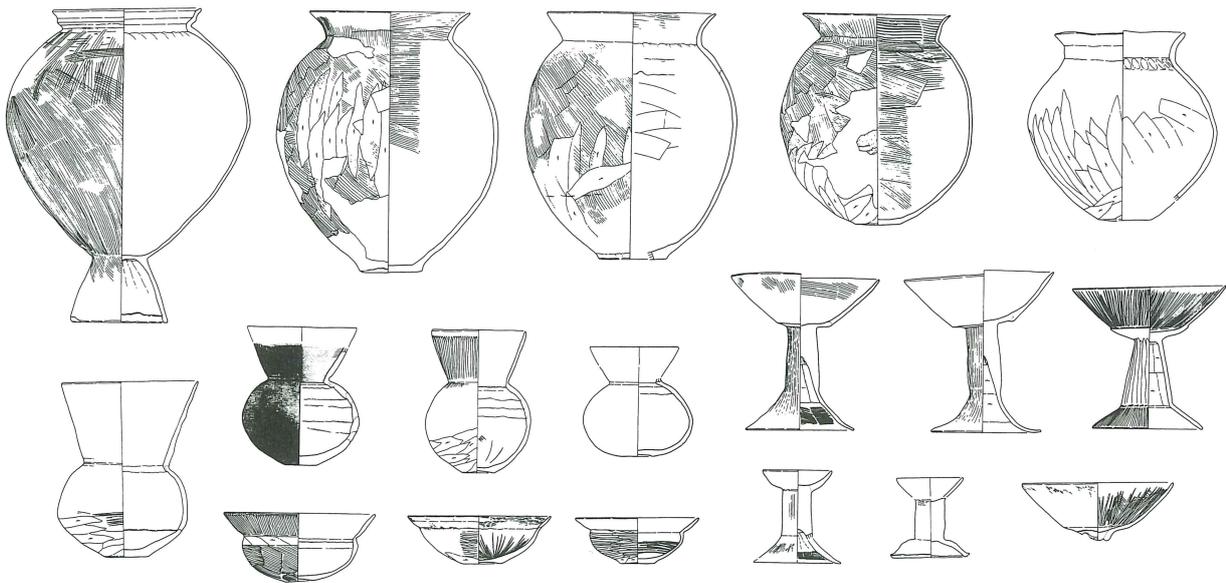


川越田遺跡 25号住居跡

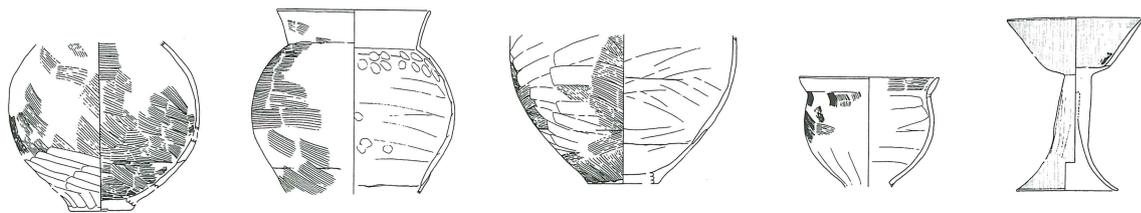


下田遺跡 5号住居跡

第835図 妻沼低地の新段階の土器



北島遺跡第12地点2号住居跡



根柵遺跡12号住居跡

なお、以下で使用する各器種の呼称は、832図に準ずるものである。

古段階には雷電下遺跡25号住居跡、諏訪遺跡25号住居跡、後張遺跡166号住居跡が該当する。また川越田遺跡25号住居跡、地神遺跡8号住居跡もこの段階と考えられる。

古段階の土器の様相について略述する。甕全体では胴部が球形から長胴への指向が見え始める。直口縁の甕（甕A）は頸部の収縮度の強いものがある一方、弱いものが混在する。刷毛調整のもの他に工具によるナデ調整のものがある。S字状口縁台付甕A・Bでは口縁部の横ナデの度合に強弱があり、口縁部の形態に様々なバリエーションが認められる。特に雷電下遺跡と後張・川越田遺跡では対照的である。肩部の横位の刷毛目は一部に認められるもののほとんどの個体に施されない。また無台の甕では長胴化傾向が認められるも

のがある一方、やや小さな球形のものが組成の確実な一部として存在する。

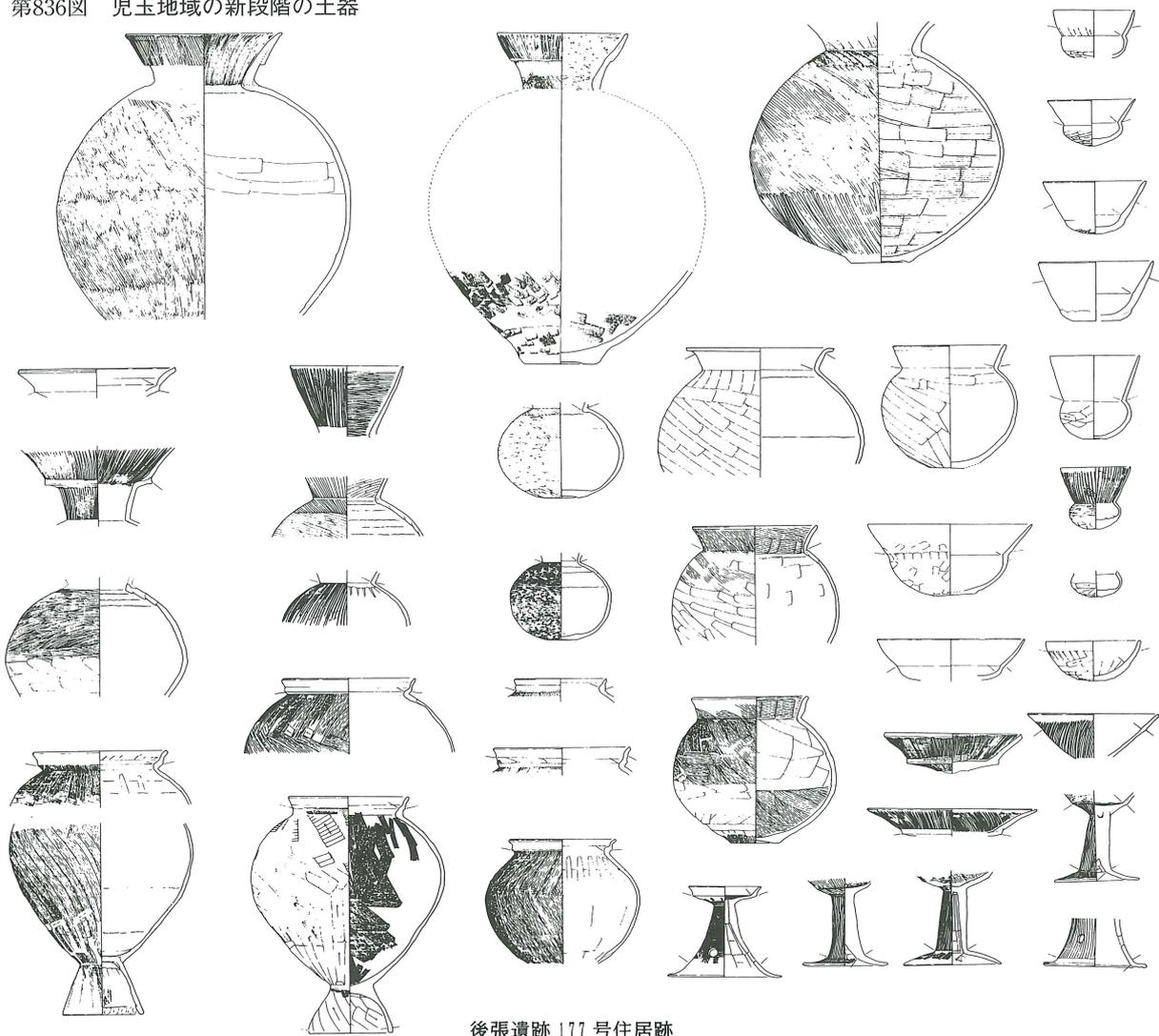
この他に雷電下遺跡25号住居跡では、樽式の影響を受けたと考えられるものが混在する。

壺は大型で複合口縁、有段口縁、直口縁の球形胴のもの、直線的で長く開く口縁部をもつ中型のものが見られる。前段階に比して胴部の径に対する口縁、頸部の径が大きい。前者の口縁部は開きが大きい。中型のものは前段階に比して口縁部の器高が高くなり、口縁全体が大きくなっている。

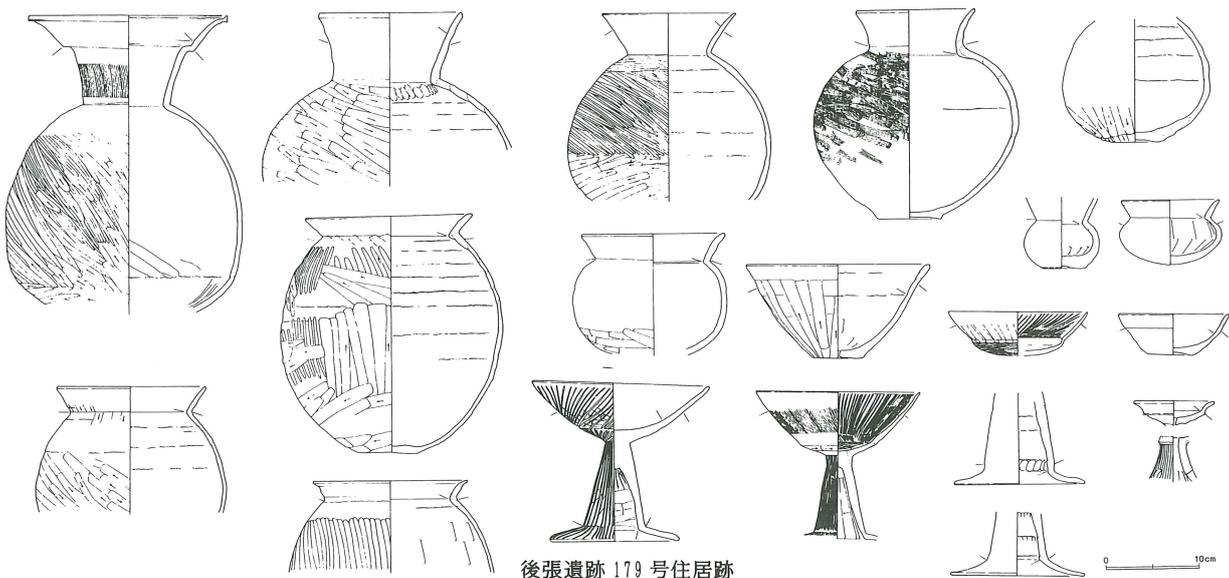
小型壺は前段階から継続するA・Bが見られる一方で、和泉式以後に主体的な器種となる口縁部と胴部の器高がほぼ等しいもの（小型壺Cと仮称する）がある。また脚部の付くものがある。

鉢は口縁部が大きく開き体部の小さい鉢Aと、口縁部が短く体部の大きい鉢Bがある。

第836図 見玉地域の新段階の土器



後張遺跡 177号住居跡



後張遺跡 179号住居跡

椀もAが本時期から認められる。

高坏は前段階から続く大型の坏部に裾広がり脚部をもつもの（高坏Cと仮称する）と、小さな坏部に柱状の脚部をもつ高坏Bの両者がある。

器台は出土量自体が少なくなるが、川越田遺跡25号住居跡、地神遺跡545号土坑で多く出土しており、器高の低いX字状のものと考えられる。

甗は直線的で単孔のものがある。

新段階は、甗・壺類の長胴化の進行、小型壺Bの体部の矮小化、器種全体に渡る頸部の収縮の弱さ、口縁部の相対的な大型化、ヘラ削り・工具ナデ仕上げの盛行によって古段階と分けられる。

新段階には下田遺跡5号住居跡、後張遺跡177号住居跡、179号住居跡出土資料が該当する。また妻沼低地の根絡遺跡12号住居跡、北島遺跡12地点2号住居跡出土資料もほぼ同様の時期と考えられる。

新段階の土器の様相について略述する。甗全体では胴部の長胴化が進む。甗Aは頸部の収縮度が概して弱く、立ちぎみとなる。外面調整はヘラ削りや工具によるナデが多く、刷毛調整のものでも下半は工具によるナデ調整やヘラ削りのものが大部分である。多くは脚台が付かない。S字状口縁台付甗は口縁部の横ナデが弱く、頸部の収縮が弱くなり立ちぎみである。外面調整も直口縁の甗同様に羽状の刷毛目ではなくヘラ削りや工具によるナデによって仕上げられるものがある。肩部の横位の刷毛目は施されず、形骸化した刷毛目を中堀遺跡5号住居跡で見ることができる。また無台の甗では長胴化が進行する一方で、やや小さな球形のものが前段階に続いて認められる。概して頸部の収縮が弱く、口縁が立ち気味である。

壺は古段階で見られた大型、中型のものが継続する。頸部の収縮は弱くなる傾向がある。口唇部に面取りするEが見られる。

小型壺はA～Cが継続する。Bは体部の極端に小さいものが認められる。体部の小さいものの調整はヘラ削りである。

鉢はA・Bが継続し、体部が小さくなる。

椀はAが継続し、単口縁でヘラ削りで仕上げられるBがある。

高坏はCがなくなり、Bと柱実のAのみとなる。

器台は出土量自体が明らかに少なくなるが、器高が高く裾端部が外側に広がるものとなるようである。

甗は古段階とほぼ同様で、複合口縁と単純口縁がある。

以上、大変雑駁ではあるが、古新の両段階について略述してみた。

ここで中堀遺跡出土資料に立ち返るならば、新段階に位置づけることが可能であろう。

この時期の中心的な集落と考えられる後張遺跡の編年とは異なる部分もあるが、ほぼⅠ・Ⅱ期に相当する。

次の作業として、児玉地域以外の資料と比較検討してみたいが、ここでは雑駁に流れるため、別に譲り、大宮台地周辺の同様の柱状高坏を含む資料について検討を加えた書上元博氏（書上1994）の見解と対照するに留めたい。

書上氏は古墳時代前期を3段階に分け、各々について標準資料を挙げている。段階区分あるいは各々の資料の位置づけそのものの評価については別に譲り、本項で検討した柱状高坏を含む段階として設定されている第3段階の土器群について見ることにする。

第3段階は更に2分されている。古段階の標識資料とされる大宮市下加南4・7号住居跡（笹森1986）、浦和市北宿遺跡9・10号住居跡（小倉1983）、大宮市南中丸下高井遺跡H1・2号住居跡（山形・山口1988）、上尾市雲雀遺跡6号住居跡（小宮山1992）出土資料の内、特に甗に着目すると長胴化傾向、頸部の収縮の弱さ、胴部下半のヘラ削りあるいは工具仕上げが見られる。また、高坏では高坏BとCが共伴する。小型壺はBの体部が比較的しっかりしている。また下加遺跡4号住居跡では、小型壺Cの可能性のあるものが認められる。椀Aと考えられるものも北宿遺跡10号住居跡で認められる。以上の諸点から、書上氏の第3段階—古は児玉地域の古段階に相当するものと思われる。

新段階の標識資料としてあげられている伊奈町大山

遺跡A区18号住居跡には、極端に長胴化した有段口縁の壺と、ヘラ削りの台付甕、球形胴の甕と、赤彩の中型の壺がある。この中で、中型の壺は北島遺跡第12地点2号住居跡と同様のものである。また、球形胴の甕は端部の形態こそ異なるが、後張遺跡177号住居跡出土のものと同様である。従って第3段階-新は児玉地域の新段階に相当するものと思われる。

中堀遺跡出土資料を端緒に、児玉地域の柱状高坏を含む土器群について検討を試みたわけだが、これはまだ試行の段階に過ぎないものであることはいうまでもない。

本項では児玉地域の古・新段階と大宮台地の資料の併行関係を探るため、相互の類似性のみに着目したことにより、横並べに土器群を並べることはできた。しかし一方で、例えば後張遺跡177・179号住居跡、北島遺跡12地点2号住居跡、大山遺跡A区18号住居跡は、ある器種の相似をもって同時期と認識できるものの、壺や甕、特に大山遺跡の特徴的な壺と台付甕を後張遺跡177号住居跡、あるいは北島遺跡の資料と比較してどのように感じるであろうか。後張遺跡の内部においても177号住居跡と179号住居跡を比較してはどうだろうか。この全ての壺・甕を異なる系列と考えられるだろうか。その是非は相互の土器群の周辺地域の土器群との関係を整理した上で、相互の土器の差異を全体の中で位置づけることにより明らかになると考えられる。その作業については未だ着手していない。

書上氏は、新屋敷遺跡出土資料を検討するにあたり、

改めて第3段階の土器群、特に柱状高坏を含む土器群について再度検討を加えている。(書上1996) その中で、新旧の様相の混在が土器変化の複雑さを予想させることから、古・新の時期差として縦に並べてしまうことの危険性を説いている。

本項では児玉地域の土器を古・新に分けたわけだが、前述したような資料の様相から、かなり俊巡したことは隠せない。混在した様相を理解するためには、前述のように児玉地域に近接する埼玉県全体、群馬、栃木、あるいは東日本全体を視野に入れながら再度位置づけを試みる必要があるだろう。

その上で混在の様相をどのように整合的に説明できるかが問題と考えられる。

また、横川好富氏による五領Ⅲ・Ⅳ式(横川1982)や、立石盛詞氏の五領式終末に関する論考(立石1987)、後藤信祐氏の花の木町遺跡出土土器の検討(後藤1992)、坂野和信氏の和泉式土器に関する論考(坂野1991)等の多くの研究との関係、五領式と和泉式の関係についても触れられなかった。

多くの課題を残す結果となってしまう、検討の準備に終始してしまった。別の機会にこの責は果たすことにしたい。

※ 地神遺跡出土資料については、現在整理中である。担当者の岩瀬譲氏のご厚意により、細かく観察でき、詳しい御教示を得た。

(2) 平安時代の土器の変遷

中堀遺跡から出土した土器の概要及び器種については、堅穴式住居跡の概要の項で述べたので、ここでは、出土した土器を9期に分類し、その変遷について述べることにしたい。

第Ⅰ期

中堀遺跡の出現期であり、第137号住居跡出土の土器群が該当する。器種構成は、須恵器の大小の椀と土師器の坏C・皿・甕が確認できる。

須恵器の椀は、口径に対して底径の大きな椀で、口縁部は緩く立ち上がっていく。土師器の坏Cは、胴部から口縁部にかけて緩く屈曲する形態で、底部は丸味をもって作られる。底部には、ヘラケズリが一定の方向に向かって施され、口縁部はヨコナデがみられる。皿は、比較的大形で、口縁部の作りは、坏Cと同様である。底部は扁平に作られている。

中堀遺跡では、第Ⅰ期は1軒のみなので、他の器種が不明瞭であるが、古井戸・将監塚遺跡や皂樹原・檜下遺跡などの例をみると、このほかに須恵器高台付椀・かえりのある蓋、土師器の鉢などが存在していたと考えられる。

Ⅰ期の煮炊具には、球形の胴部となる土師器甕AⅠ型が、2点出土している。第137号住居跡1は、非常に大形で本時期だけにみられる。

第137号住居跡11は、胴部が細く、最大径が口縁部にある土師器甕AⅣ型で肩部の張りは弱い。

3点とも、口縁部の整形は、丁寧で長く外反するa型である。

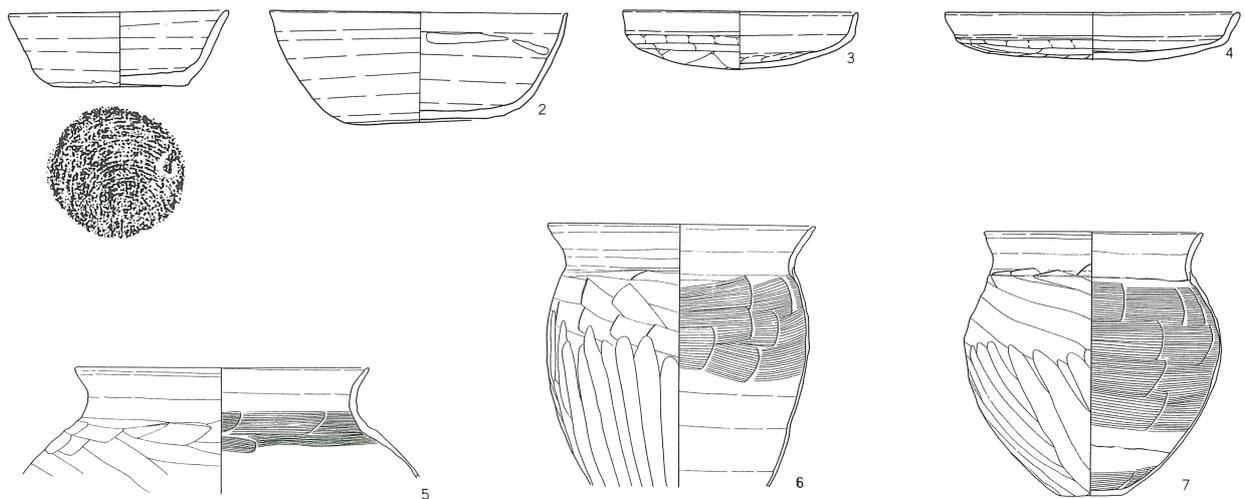
第Ⅱ期

第Ⅰ期の後、しばらく(一段階)おいてから、第Ⅱ期となったと理解している。中堀遺跡の集落の開始期と位置づけられる。器種構成は、須恵器の椀・蓋・高台付椀、土師器の坏C・皿・鉢・甕が確認できる。第203・205号堅穴式住居跡の土器群が該当する。

須恵器の椀は、第Ⅰ期に比較すると、口径に対する底径比が、やや小さくなっている。しかし器高は、未だ深めである。口縁部は、底部から緩く内湾気味に立ち上がっている。蓋は、口唇部に小さな受けをもつ形態で、返りを伴う例は、きわめて少ない。高台付椀は、底径の大きな器形で、内湾しつつ立ち上がる。高台は外方へ伸び、強く踏ん張る形態である。

土師器の坏Cは、第Ⅰ期よりも扁平化し、底部がよ

第837図 中堀第Ⅰ期の土器



1 第137号住居跡-5 (椀)
2 第137号住居跡-6 (椀)

3 第137号住居跡-1 (坏A)
4 第137号住居跡-3 (皿)

5 第137号住居跡-7 (甕AⅠa)
6 第137号住居跡-11 (甕AⅣa)

7 第137号住居跡-12 (甕AⅠa)

り平底化する。口縁部は外傾し、口唇部は丸く仕上げられる。第205号住居跡の5は、底部と口縁部の間に腰があり、この部分に横方向のヘラケズリ部分を巡らす器形である。皿は第I期と比較すると口縁部がさらに外傾し、扁平化が進む。鉢は、扁平な平底で、口縁部近くまでヘラケズリが及ぶ。

この段階には、猿投産の浄瓶や長頸壺などが、器種組成に加わっていることから、寺院の構築もこの段階から進められたと推定したい。

甕は、土師器甕Aである。第203号住居跡17は土師器甕AⅢ型で、肩部は弱く張る。

第203号住居跡16は、土師器甕AⅣでI期と比較すると肩部の張りが強くなっている。

I期の土師器甕とは連続性がみられず、かなりのヒアタスが認められる。

第Ⅲ期

第Ⅱ期に連続して、第Ⅲ期の土器群へ移行したと考えた。第2・3・47・100・186・140号竪穴式住居跡の土器群が、該当する。器種構成は、須恵器の椀・蓋・

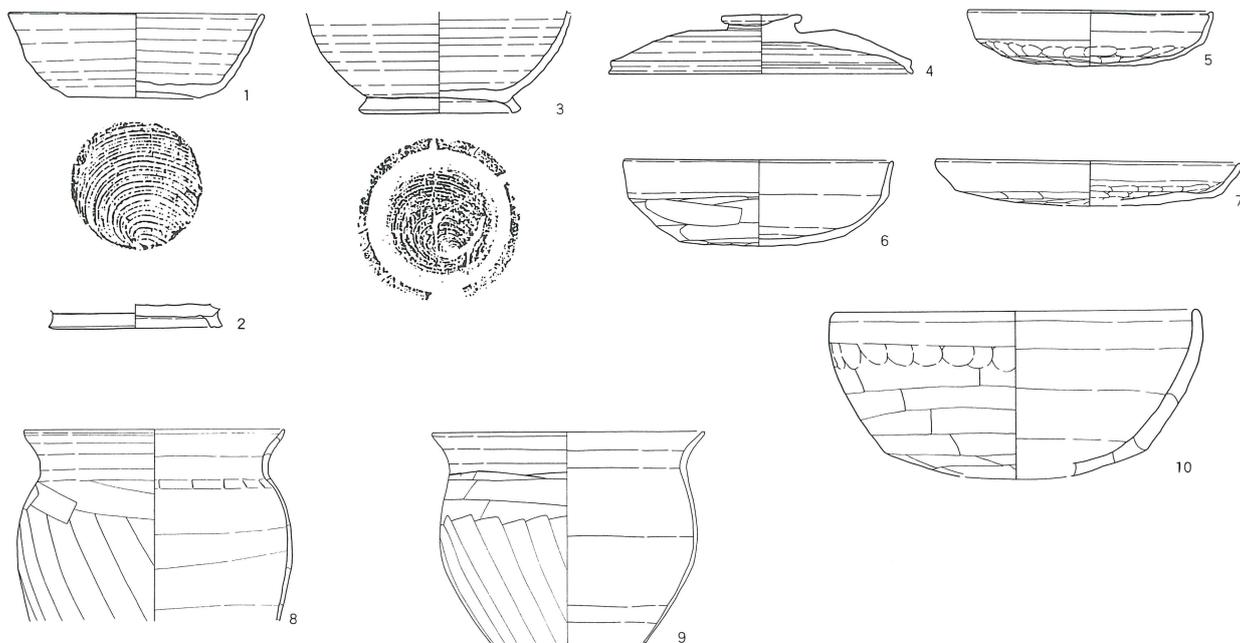
高台付椀・高台付皿、土師器の坏A・皿・鉢が確認できる。

須恵器の椀は、第Ⅱ期と比べるとさらに底径が小形化し、器高も低くなる。受け口のある蓋は、わずかに残存する程度であるが、その後もごく少量残るようである。第Ⅲ期からそれまでみられなかった高台付皿が出現する。高台は、小さく角高台に近い。椀や高台付椀・高台付皿の口縁部は、緩い内湾気味のカーブを描き、口唇部で外反する。

内面に放射状暗文を施した土師器の坏がみられる。この暗文土器は、群馬県の北毛を除く各地、とくに中毛を中心に分布する土器である。土師器の坏Cは、ほとんどみられなくなり、変わって土師器の坏Aがみられるようになる。

当初から坏AⅠ・AⅡ・AⅢ・AⅣ・AⅤ・AⅥは、確認することができる。ただし口縁部の立ち上がりは球形に近く、坏A独特の緩いS字状のカーブにはなっていない。けれども口縁部下位のユビオサエは、明瞭で坏Aの萌芽的な段階といえよう。

第838図 中堀第Ⅱ期の土器



- | | | | |
|----------------------|-------------------|----------------------|--------------------|
| 1 第203号住居跡-9 (椀) | 4 第203号住居跡-12 (蓋) | 7 第203号住居跡-6 (皿) | 10 第203号住居跡-15 (鉢) |
| 2 第203号住居跡-10 (高台付椀) | 5 第203号住居跡-4 (坏A) | 8 第203号住居跡-17 (甕AⅢa) | |
| 3 第205号住居跡-8 (高台付椀) | 6 第205号住居跡-5 (坏) | 9 第203号住居跡-16 (甕AⅣa) | |

第2・3号住居跡の4は、第205号住居跡の5から続く形態で、底部が平底化している。皿は、口縁部の外反がすすみ、やや小形化する。鉢は、ほとんど変化していない。

灰釉陶器は、ほとんど供伴しない。しかし第Ⅳ期の土器群と供伴する灰釉陶器が、黒笹90窯式の中段階であることから、第Ⅲ期は、黒笹14窯式から黒笹90窯式 of 古段階に併行すると考えた。

甕は、口縁部が「コ」の字状となる土師器甕Bが、出現する段階である。

土師器甕Bの頸部から口縁部にかけては、ユビオサエの痕跡が明瞭に残っていて、土師器甕Aの丁寧な仕上げとは対象的である。

土師器甕Aのように、口縁部に丁寧なヨコナデを施すのは、古墳時代以来の土師器甕の伝統で、土師器甕Bのような口縁部の出現は、やや唐突に思える。

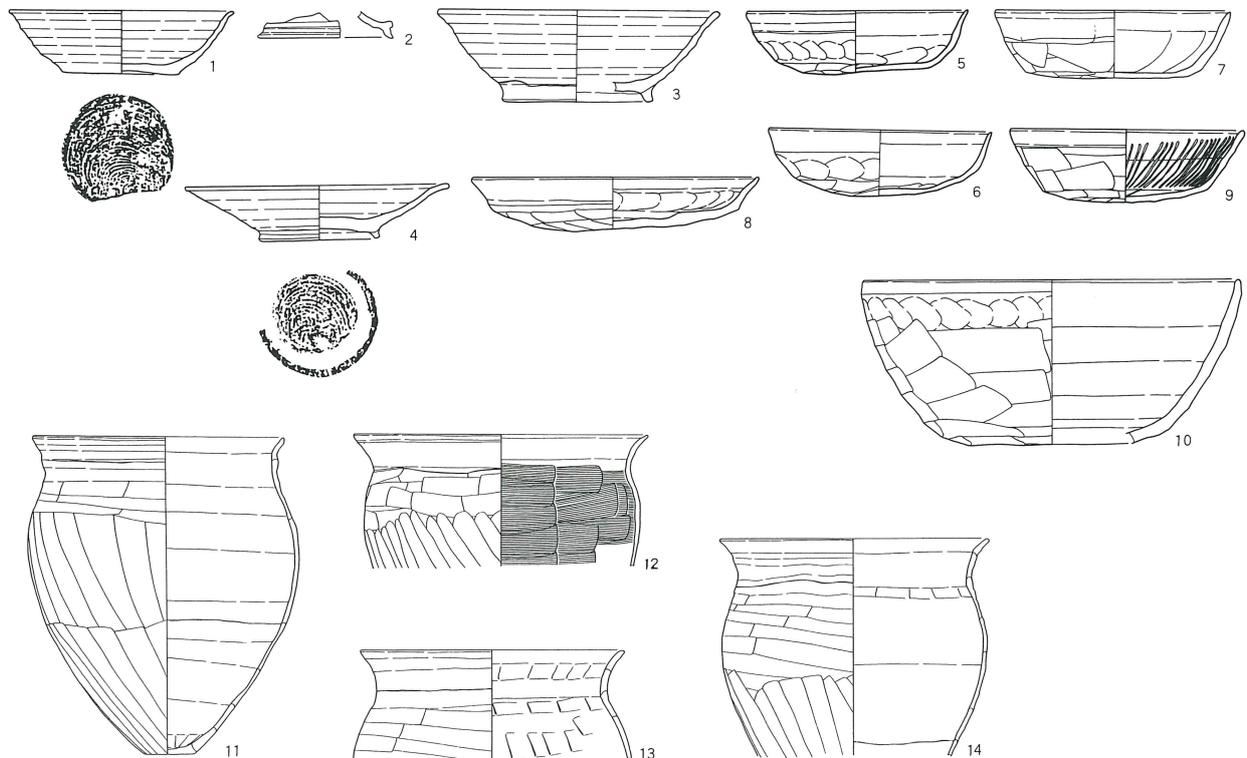
土師器甕Aの口縁部は、ユビオサエで一旦上方へ胴部の厚さよりやや厚く引延す。さらにそれを数回に亘って、丁寧にヨコナデを施すことによって、薄くきれいな湾曲を造り出している。

ところが、土師器甕Bの頸部から口縁部をみると、数回に亘って行った口縁部のヨコナデを省略するため、粘土を引き延ばす時点で胴部と同じくらいの厚さまで、薄くユビオサエにより一気に引延している。

当然、口縁部は今までよりも長くなるわけで、その処理を「コ」の字という形で行ったと思われる。引き延ばした粘土をそのまま上方に立ち上げて頸部を作り、口縁端部付近だけを短く外に屈曲させているのである。

そして、屈曲させる肩部と頸部の境目、頸部と口縁端部の境目だけが、曲がりやすいように指や棒状の工具で、ヨコナデ整形するのである。

第839図 中堀第Ⅲ期の土器



- | | | | |
|---------------------|-------------------|----------------------|----------------------|
| 1 第47号住居跡-7 (椀) | 5 第100号住居跡-1 (坏A) | 9 第100号住居跡-3 (暗文土器) | 13 第100号住居跡-6 (甕AⅢa) |
| 2 第140号住居跡-38 (蓋) | 6 第100号住居跡-2 (坏A) | 10 第100号住居跡-4 (鉢) | 14 第47号住居跡-10 (甕BⅡc) |
| 3 第47号住居跡-8 (高台付椀) | 7 第2・3号住居跡-4 (坏A) | 11 第186号住居跡-7 (甕BⅠa) | |
| 4 第186号住居跡-4 (高台付皿) | 8 第47号住居跡-5 (皿) | 12 第34号住居跡-54 (甕AⅣa) | |

以上のように、これまで手抜きのみられなかった土師器甕Aに、手抜きが認められたのは、9世紀中葉以降にみられる集落の増大と無関係ではあるまい。

急増する需要をカバーするために、手抜きが行われたと思われる。

土師器甕Aは、熱効率を追求するため、胴部は極限まで薄く仕上げられている。胴部整形の手抜きは、熱効率の低下を招くことから、口縁部の手抜きが行われたのであろう。

土師器甕Bの胴部が、非常に薄く丁寧にヘラケズリされているのに対して、頸部から口縁部の成形が、非常に雑であるのもこのためである。

やや説明が長くなったが、Ⅲ期には半分近くの土師器甕がB型となる。ただし、屈曲部に施されるヨコナデはまだ弱く、明瞭な「コ」の字状とはならない。

胴部の形状は、A型もB型もあまり変わらない。肩部がやや強く張り、小さな底部に向かって細くなる。

第Ⅳ期

第Ⅳ期の土器群の器種構成は、新たに須恵器の無台の皿が加わり、灰釉陶器が急速に普及する段階である。また黒色土器や暗文土器も客体的ながら組成の中にみることができる。第23・38・49・65・75・174・194・217号竪穴式住居跡の土器群が、該当する。

須恵器の椀は、さらに底径の小形化が進む。また器肉も厚くなる。さらに無台の皿が加わる。椀の器高を低くした形態で、口唇部に緩い返りのある無紐の蓋と間違い易い。高台付皿は、第Ⅲ期に比較すると、高台の作りがやや鈍くなるようだが、大きな変化はみられない。高台付椀は、第Ⅲ期よりも底径がやや小さくなるが、深みを増し、口縁部で緩く外反してくる。

暗文土器は、僅かにみられる。破片資料が多い。内面の放射状暗文は、間隔が開き粗雑となる。一方、黒色土器は、器の内外面を丁寧にヘラミガキして黒色処理を行った第38号住居跡10や、内面のみヘラミガキを施し、黒色処理した第49号住居跡6など丁寧さが目立つ。

土師器の坏は、本格的な坏Aとなる。つまり口縁部

が緩いS字状のカーブを描き、口唇部で緩く内湾する形態で、口縁部にはユビオサエの跡を明瞭に残している。底径は大きく、平底が多いが、口縁部のヘラケズリの手法とともにバリエーションが大きい。

皿は、前期から継続してみられる形態と、数は少ないが、底径の極端に小さな第75号住居跡24の両者を確認することができる。後者は、須恵器皿の形態を忠実に模倣したと考えた。このほか鉢があるが、やはり形態変化は乏しい。

灰釉陶器は、高台付椀・段皿・高台付皿など様々な器種を確認することができる。灰釉陶器については、後述するが、胎土や形態・色調などから三河(二川)・西遠江(宮口)産が多い。口縁部内外面へ刷毛塗りや施釉し、底部はヘラキリ調整である。高台は比較的長く、角高台から三日月かかった高台まで認められる。黒笹90窯式2型式に併行すると考えた。

土師器甕は、ほとんどがB型となる。頸部の上下に施されるヨコナデも明瞭になり、断面形は、しっかりした「コ」の字状で、いわゆるコの字状口縁の完成期である。

土師器甕Aはわずかで、図示した30個体の中で、1/3以下の9個体だけである。土師器甕Aの口縁部は、まだ比較的長く湾曲する。

土師器甕Bは、肩部がⅢ期より強く張る土師器甕BⅡ型が主体である。胴部はやや長くなり、小さな底部に向かって急激に細くなる。

第174号住居跡8は、肩部の張らない土師器甕BⅢ型で、Ⅴ期以降に多くみられるが、すでに本時期からみられる。

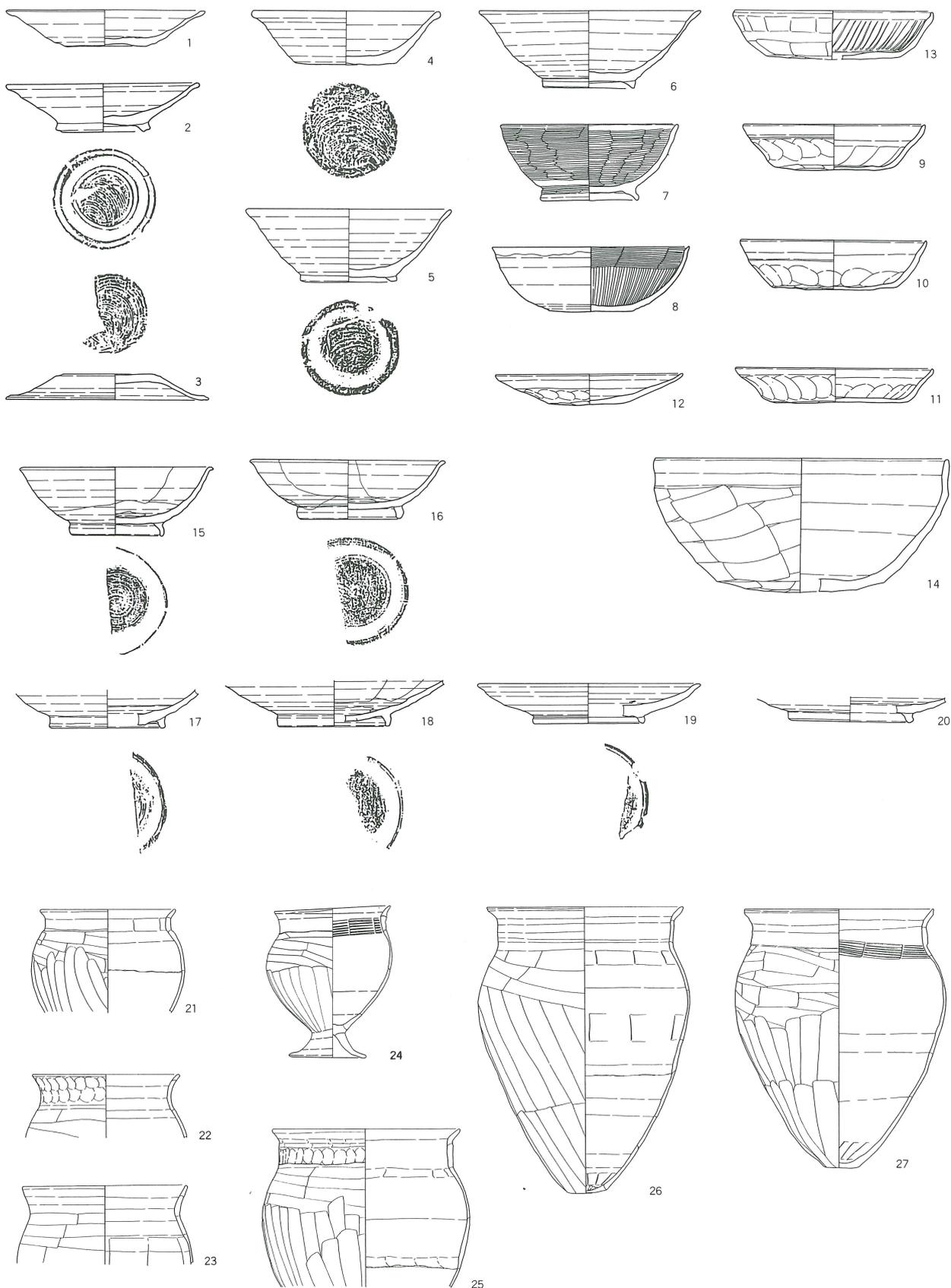
本時期から新たに出現する煮炊具は、台付甕と須恵器甕である。

台付甕は、小形で第147号住居跡17のように胴部中位が張り、球形に近いタイプと、肩が張る第159号住居跡3のタイプがある。

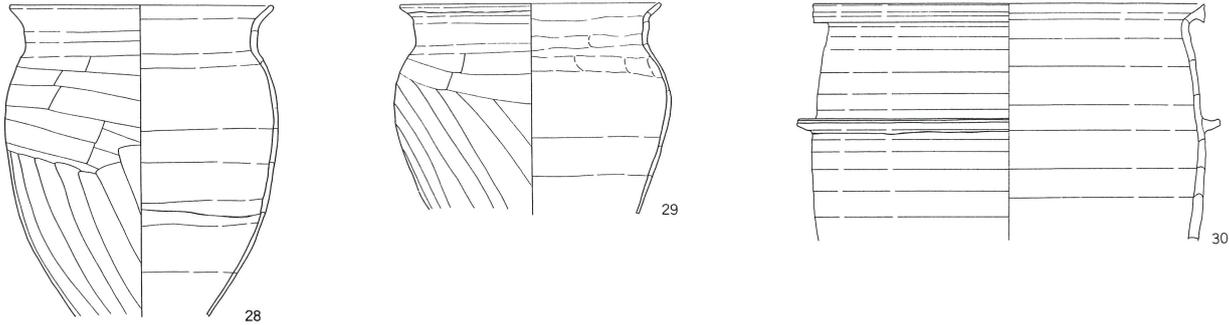
土師器甕に比べて口縁部のバリエーションは豊富で、とくに台付甕Bが多いというわけではない。

須恵器甕は、口縁部が短く強く外反し、須恵器甕や

第840図 中堀第IV期の土器（1）



第841図 中堀第Ⅳ期の土器（2）



- | | | | |
|---------------------|---------------------|----------------------|----------------------|
| 1 第75号住居跡-51（皿） | 9 第75号住居跡-8（坏A） | 17 第65号住居跡-8（高台付椀） | 25 第151号住居跡-11（甕BⅢb） |
| 2 第75号住居跡-48（高台付皿） | 10 第75号住居跡-13（坏A） | 18 第49号住居跡-8（段皿） | 26 第194号住居跡-13（甕BⅡb） |
| 3 第75号住居跡-54（蓋） | 11 第75号住居跡-22（皿） | 19 第217号住居跡-70（高台付皿） | 27 第75号住居跡-63（甕BⅡa） |
| 4 第75号住居跡-32（椀） | 12 第75号住居跡-24（皿） | 20 第65号住居跡-9（高台付皿） | 28 第174号住居跡-8（甕BⅢc） |
| 5 第217号住居跡-46（高台付椀） | 13 第194号住居跡-8（暗文土器） | 21 第147号住居跡-17（台付甕） | 29 第151号住居跡-10（甕BⅡc） |
| 6 第75号住居跡-46（高台付椀） | 14 第174号住居跡-7（鉢） | 22 第151号住居跡-12（甕AⅢb） | 30 第217号住居跡-88（甕AⅠ） |
| 7 第38号住居跡-10（黒色土器） | 15 第23号住居跡-20（高台付椀） | 23 第247号住居跡-13（甕AⅢb） | |
| 8 第49号住居跡-6（黒色土器） | 16 第75号住居跡-56（高台付椀） | 24 第159号住居跡-3（台付甕） | |

壺の口縁部を思わせる甕A型で、胴部やや上位に鏝を巡らす。胴部の形状はやや張りをもち、甕AⅠ型となる。胴部は後出するものより薄く造られている。

還元焰で焼成されているがやや甘く（NS）、同時期に焼成される須恵器甕や壺などが、硬く焼き締められているのとは対象的である。

胎土中には、片岩・酸化粒子を多量に含むことから、末野産と思われる。

第Ⅴ期

器種構成上の新たな変化としては、須恵器の蓋がほぼ壊滅すること、坏Bの萌芽的な器形が登場することである。第35・53・127・162・172・195・223・245・248号住居跡の土器群が、該当する。

須恵器の椀は、変化に乏しいがやはり底径をやや小形化しているようである。高台付椀は、前代よりも腰が張り、深めの器形となる。口縁部は鶴首状に緩く外反する。高台付皿は、やや小形化するようである。無台の皿は、小形化と扁平化がみられ、器高は極端に低くなる。

土師器の坏Aは、底径がやや小さくなり口縁部がやや外傾する。前代みられた深めの坏Aは、みられなくなる。体部が内湾し、口縁部が外反する第53号住居跡14のような器形が登場する。これも坏Aとともに考え

た。

皿は、やはり小形化し、須恵器皿を模倣した皿も確認できるが、相対的にきわめて減少する。

新たに土師器坏Bの萌芽的な形態の坏が登場する。これまで第245号堅穴式住居跡1のように体部を横位にヘラズリする坏はあったが、第248号堅穴式住居跡21のように、底部から口縁部にかけて斜めに削りあげるタイプの坏（坏B）は存在していなかった。底部も広く残り、全体が球形となるように削られている。

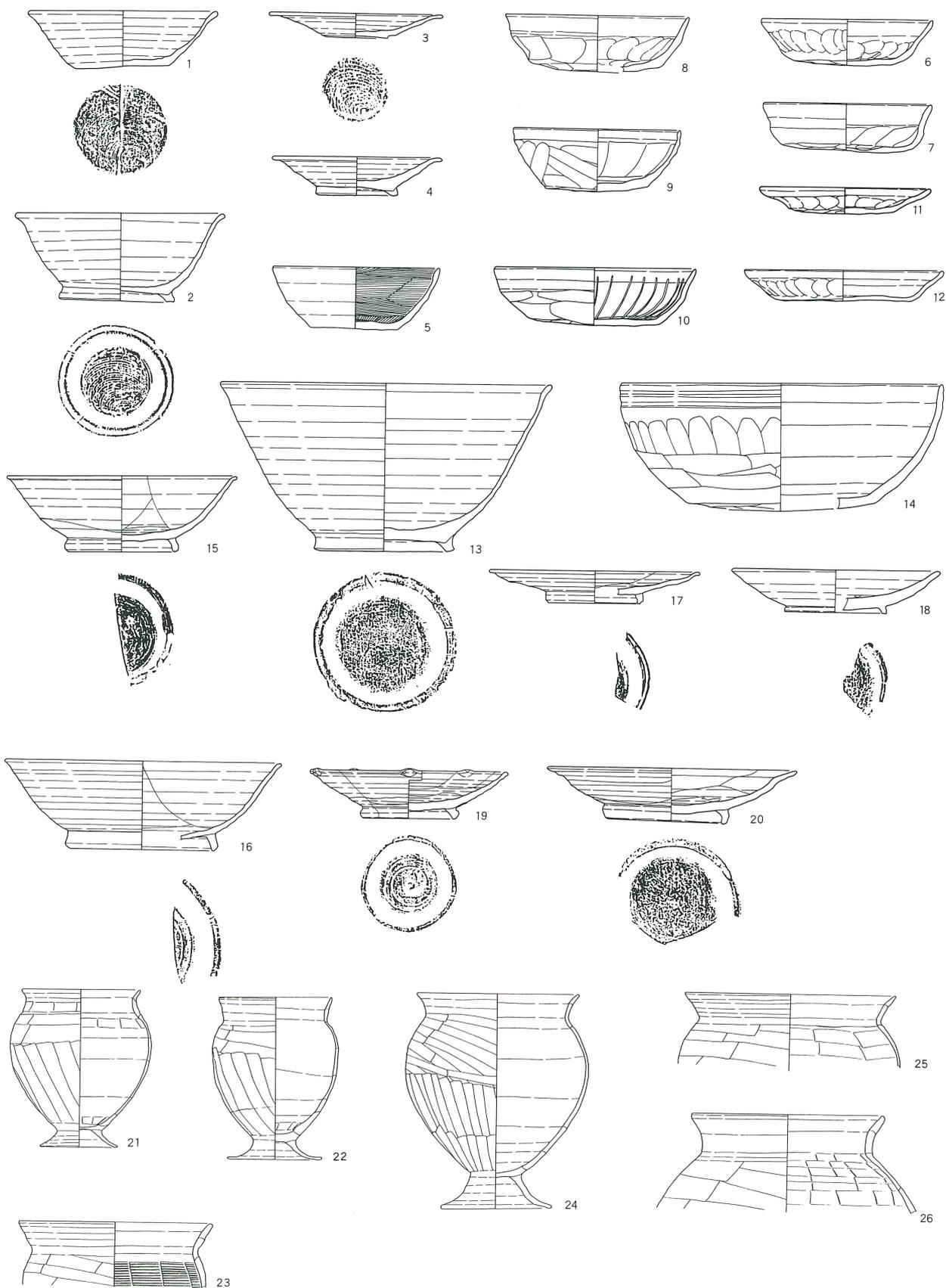
このほか鉢がみられる。鉢は、ほとんど変化しないまま、この段階をもって消滅したようである。

灰釉陶器は、高台付皿・段皿・高台付椀などがみられる。胎土や形態・色調などから三河（二川）・西遠江（宮口）・東遠江（清ヶ谷）産、ことに西遠江（宮口）産が多い。口縁部内外面・内面のみに灰釉を刷毛塗りで施釉し、底部はヘラキリ調整とする。高台は比較的高く、三日月高台がみられる。大形の椀も確認できる。黒笹90窯式3型式に併行すると考えた。

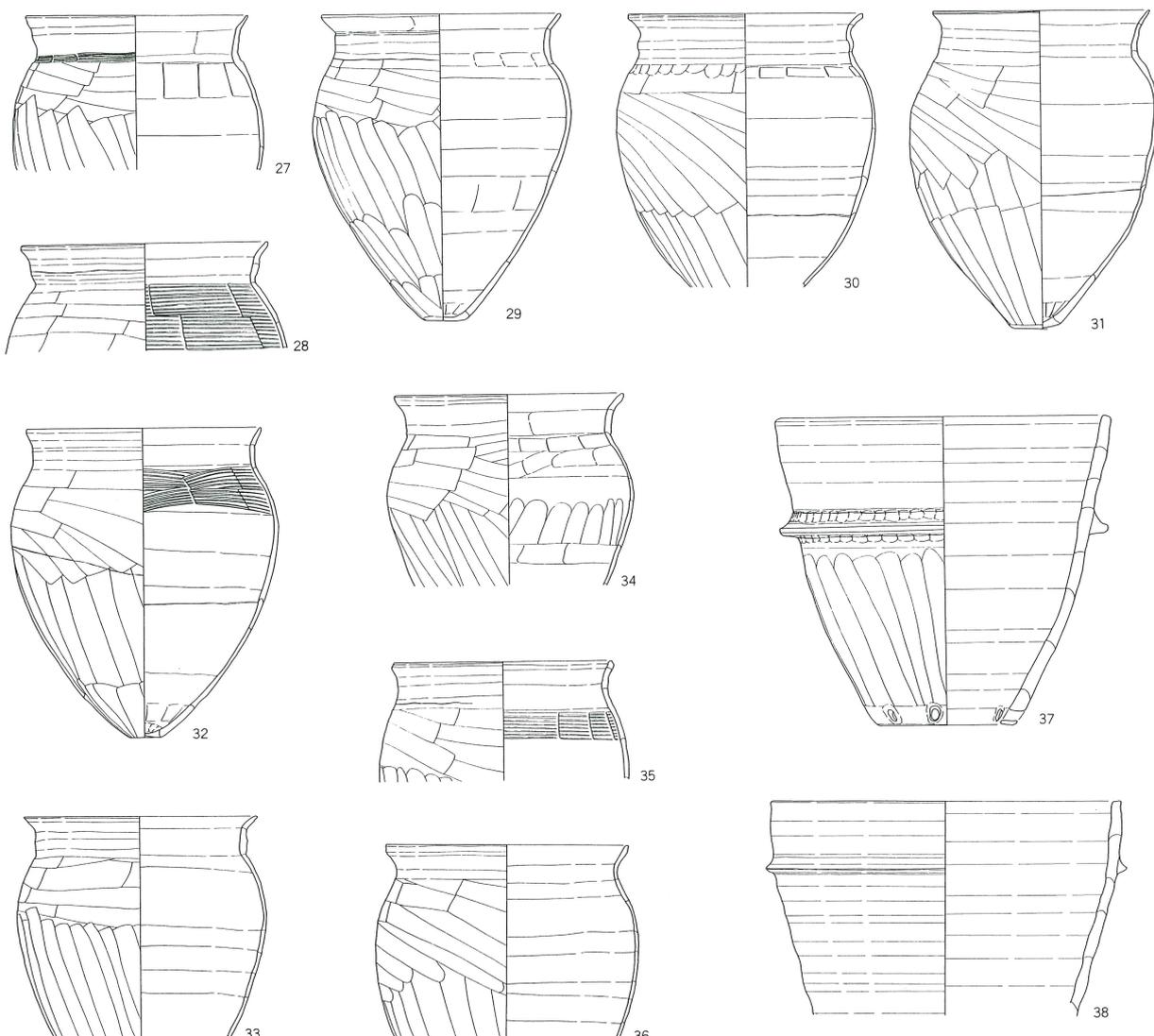
煮炊具は、Ⅳ期同様に土師器甕Bが主体となる。土師器甕Aも若干増加するが、図示した101個体のうち31個体と30%程度である。

土師器甕Bの頸部は、Ⅳ期に比べて短くなる。これは、口縁部を成形する時、粘土の引延しが短くなるた

第842図 中堀第V期の土器（1）



第843図 中堀第V期の土器（2）



- | | | | |
|---------------------|-------------------------|----------------------|----------------------|
| 1 第223号住居跡-45（椀） | 11 第162号住居跡-8（皿） | 21 第248号住居跡-57（台付甕） | 31 第53号住居跡-77（甕AⅡc） |
| 2 第223号住居跡-55（高台付椀） | 12 第223号住居跡-26（皿） | 22 第199号住居跡-17（台付甕） | 32 第199号住居跡-16（甕BⅠa） |
| 3 第223号住居跡-49（皿） | 13 第223号住居跡-71（高台付大椀） | 23 第213号住居跡-4（甕AⅣb） | 33 第150号住居跡-15（甕BⅡc） |
| 4 第223号住居跡-73（高台付皿） | 14 第35号住居跡-51（鉢） | 24 第53号住居跡-79（台付甕） | 34 第145号住居跡-10（甕AⅡc） |
| 5 第223号住居跡-75（黒色土器） | 15 第172号住居跡-10（高台付椀） | 25 第223号住居跡-94（甕AⅢd） | 35 第170号住居跡-10（甕AⅢb） |
| 6 第223号住居跡-20（坏A） | 16 第223号住居跡-80（高台付椀） | 26 第223号住居跡-92（甕AⅠb） | 36 第150号住居跡-18（甕AⅢb） |
| 7 第53号住居跡-14（坏A） | 17 第223号住居跡-82（高台付皿） | 27 第150号住居跡-16（甕BⅢc） | 37 第248号住居跡-64（甕BⅠ） |
| 8 第245号住居跡-1（坏A） | 18 第127号住居跡-11（高台付皿） | 28 第208号住居跡-5（甕BⅢc） | 38 第146号住居跡-5（甕BⅠ） |
| 9 第248号住居跡-21（坏B） | 19 第223号住居跡-78（輪花付高台付皿） | 29 第18号住居跡-31（甕BⅡb） | |
| 10 第195号住居跡-6（暗文土器） | 20 第172号住居跡-12（段皿） | 30 第252号住居跡-6（甕BⅢa） | |

めで、それだけ頸部は厚くなる（第18号住居跡第31・145号住居跡第16・208号住居跡5）。

また、頸部が内傾するa型の口縁部は少なく、外傾するc型が増加する。

胴部は依然として、ヘラケズリにより薄く仕上げられる。胴部の形状は肩の張るⅡ型と、張りが弱いⅢ型がある。

BⅡ型はⅣ期に比べて、胴部が短くなり、肩の張りがより強くなったような印象を受ける。短胴化は、BⅢ型も同様である。

土師器甕Aは、口縁部のバリエーションが多くなる。Ⅲ期までのように、長くきれいに外反するa型は少なくなり、短いb・c・d型が多くなる。これらの口縁部には、ユビオサエの痕跡が明瞭に残るものもあり、

土師器甕B同様に手抜きによると思われる。

胴部形状は肩の張らない皿型が中心で、一部Ⅱ型となるものもある、第105号住居跡第10・53号住居跡77がそれである。

第223号住居跡第92・170号住居跡10のように、土師器甕Aの中には、胴部が厚いものもみられるようになる。

Ⅳ期に出現した台付甕は、ほとんど変化しない。第53号住居跡79は、比較的大型で台付甕には、大形・小形の二者があったと思われる。

須恵器甕には、新たな形態が出現する。第248号住居跡64の甕Bがそれで、底部から口縁部まで、一気に直線的に開く甕BⅠ型である。器肉は厚く、焼成はいわゆる半還元焰焼成で甘い(HS)。そのため胎土が手に付く。

鏝は胴部中位に巡り、鏝部から下位は弱いヘラケズリが縦方向に施される。ロクロ目は不明瞭で、成形時のユビオサエ痕跡が明瞭に残る。

底部は筒抜けで、簀子受けの孔が4つ開いている。

第146号住居跡5は、同じ甕BⅠ型であるが、焼成はやや甘いが還元焰焼成である(NS)。第248号住居跡64のように鏝部下位のヘラケズリを施さないものもある。

甕B型は、大形で非常に重く、伴出する土師器甕の上に載せて使用したとは考えられない。次のⅥ期から出土する羽釜ならばセットとして充分対応するが、本時期にはまだ羽釜はみられない。鉄製の煮炊具(羽釜)などを使用していたのであろうか、今後の課題である。

第Ⅵ期

器種構成上の変化が大きい。須恵器の無台の皿や土師器の皿がみられなくなり、須恵器の高脚高台付椀が登場する。この椀を模倣した土師器の高台付椀もみられる。また耳皿もみることが出来る。第36・45・58・87・135・198・219・240・256号住居跡の土器群が、該当する。

須恵器椀は、さらに底径を小さくし、口径の半分以上となる。ただ器高は、そのままのため椀というより

坏である。高台付椀は、口縁部形状に各種の形態が登場する。ことに法量に大小の2種が、存在することは特筆できよう。全体的に器肉の厚みが増し、厚ぼったくなる。第135号住居跡4のように高台部が伸び、いわゆる高脚高台となる椀が出現する。

須恵器の無台の皿はみられなくなり、高台付皿も減少する。高台部は高く、作りは大変雑となる。

土師器の坏Aも急速に減少する。体部の緩いS字状カーブは直線化し、なによりも器肉が厚くなっていく。しかし底部のヘラケズリは今まで通り施されるが、次第にみられなくなるようである。坏Bは、この段階に平底、「ハ」の字に伸びる口縁部、斜めのヘラケズリなど定型化する。高脚高台付椀を模倣した土師器の高台付椀が作られるが、坏部の作りが、緩いS字状となることなど、坏Aの作りに近似している。

このほか黒色土器や高台付耳皿などが、出土している。

灰釉陶器は、遠江(宮口・清ヶ谷)に加え、東濃の製品がみられる。高台付椀・高台付皿・高台付大椀・段皿などの器種を何うことができる。施釉は、刷毛塗りとつけがけがみられ、底部は、糸切りとヘラキリ調整が認められる。折戸53号窯式の1型式と併行すると考えた。

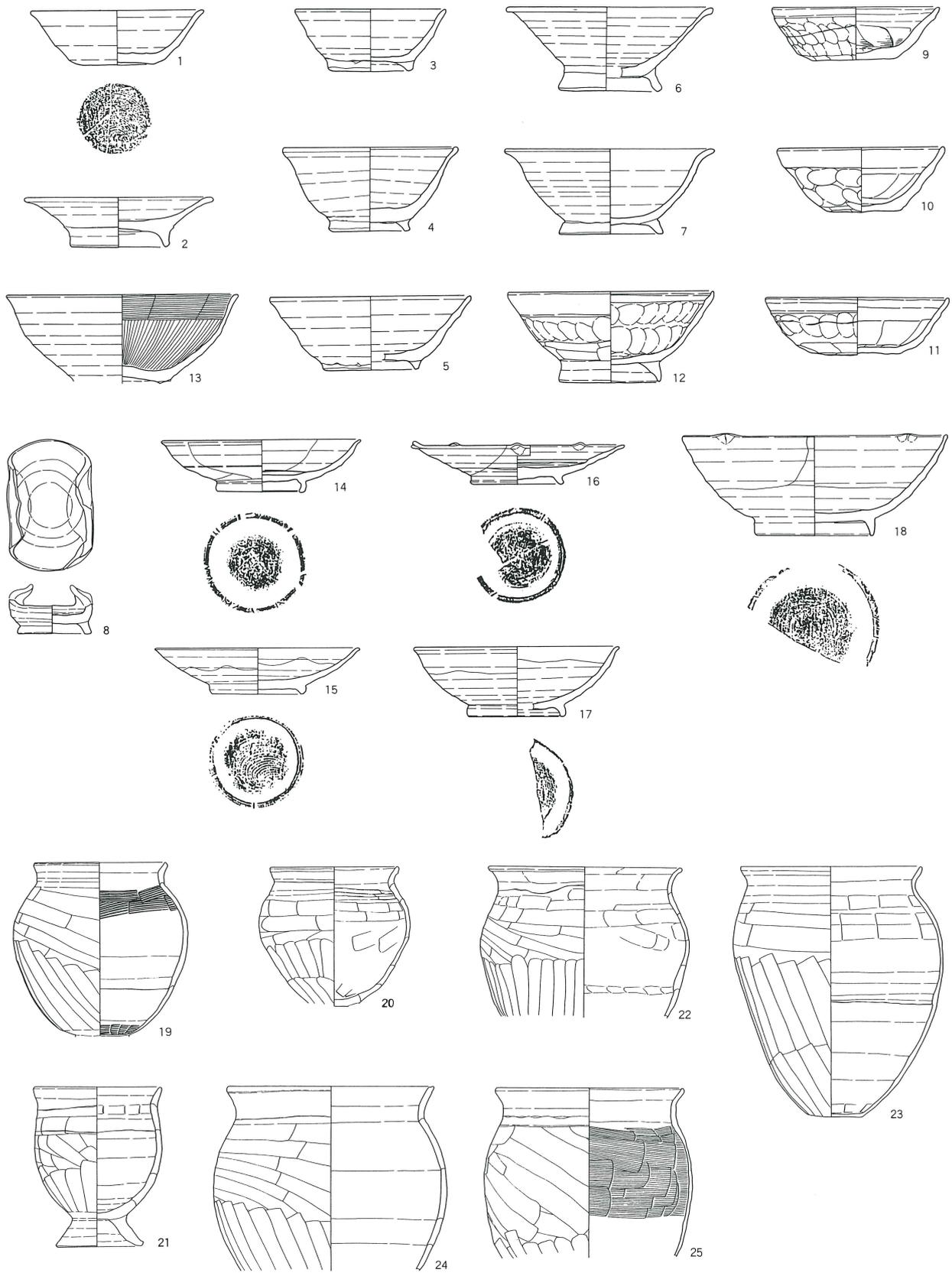
煮炊具には羽釜が加わる。羽釜はロクロ整形されていて、土師器甕からの系譜ではまったく追えない。武蔵・上野において、甕以外の煮炊具に須恵器の技術が、使われたことはこの時期までまったくなく、画期的な出来事である。

羽釜が出現したといっても、煮炊具の主体は土師器甕であり、土師器甕84個体に対して、羽釜はわずかに8個体だけである。

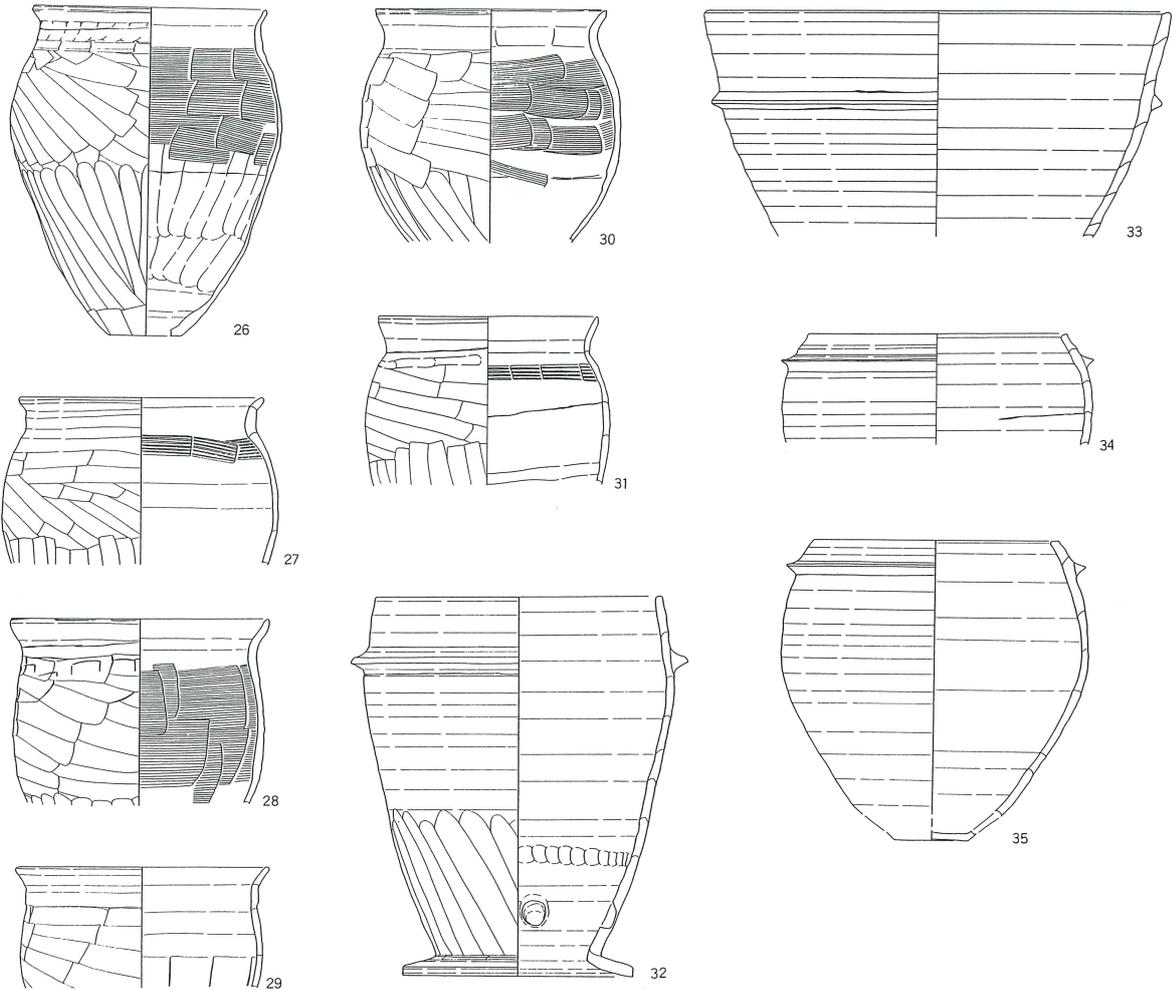
土師器甕は、再びA型が中心となる。比率は84個体中、49個体と58%になる。

土師器甕Aの口縁部は、Ⅴ期同様にバリエーションが豊富である。胴部は張りの弱い皿型が主体であるが、丸味の強いⅠ型や、最大径が口縁部となるⅣ型もみられる。

第844図 中堀第Ⅵ期の土器（1）



第845図 中堀第Ⅵ期の土器（2）



- | | | | |
|----------------------|-------------------------|----------------------|------------------------|
| 1 第36号住居跡-17（坏） | 10 第36号住居跡-7（坏B） | 19 第222号住居跡-32（台付甕） | 28 第87号住居跡-42（甕AⅣc） |
| 2 第87号住居跡-23（高台付皿） | 11 第36号住居跡-1（坏A） | 20 第31号住居跡-50（台付甕） | 29 第240号住居跡-15（甕BⅣb） |
| 3 第58号住居跡-2（高台付椀） | 12 第240号住居跡-2（高台付椀） | 21 第87号住居跡-36（台付甕） | 30 第36号住居跡-52（甕AⅢb） |
| 4 第58号住居跡-3（高台付椀） | 13 第198号住居跡-17（黒色土器） | 22 第105号住居跡-2（甕AⅡa） | 31 第76号住居跡-10（甕AⅢc） |
| 5 第36号住居跡-23（高台付椀） | 14 第45号住居跡-13（高台付皿） | 23 第235号住居跡-10（甕AⅢb） | 32 第118号住居跡-22（甕BⅡ） |
| 6 第135号住居跡-4（高脚高台付椀） | 15 第219号住居跡-4（高台付皿） | 24 第87号住居跡-41（甕AⅠb） | 33 第87号住居跡-49（甕BⅠ） |
| 7 第87号住居跡-21（高台付椀） | 16 第256号住居跡-4（輪花付段皿） | 25 第27号住居跡-11（甕BⅢa） | 34 第182号住居跡-11（羽釜AⅡaⅠ） |
| 8 第105号住居跡-1（耳皿） | 17 第36号住居跡-38（高台付椀） | 26 第45号住居跡-14（甕BⅢa） | 35 第32号住居跡-18（羽釜BⅠ） |
| 9 第87号住居跡-2（坏B） | 18 第87号住居跡-33（輪花付高台付大椀） | 27 第31号住居跡-45（甕BⅢb） | |

土師器甕Bの頸部はさらに短くなり、「コ」の字形態もほとんど崩れかけている。胴部は、Ⅴ期までみられた肩部の張るⅡ型はなくなり、ほとんどがⅢ型でⅣ型もある。

土師器甕A・Bとも、胴部の張りが弱くなり、最大径が胴部中位まで下がったため、これに対応して、斜め方向のヘラケズリが施される範囲が広がっている。また、ヘラケズリにも手抜きが及び、器肉がⅤ期に比べて一気に厚くなる。

「極限まで薄い武蔵型甕」の面影はなく、胴部外面の斜めと縦のヘラケズリと、胴部内面にみられる接合痕跡だけが、武蔵型甕の名残りとなる。

台付甕は、土師器甕A・Bよりも様々な形態がみられる。変化の方向性は、土師器甕と同様で器肉が厚くなり、胴部の張りが弱くなる。中には第87号住居跡36のように最大径が、口縁部にあるものまで現れる。

羽釜の出土量は、前述の通り少ない。第32号住居跡18と第182号住居跡11は、吉井型と呼ばれる羽釜で、

本時期から生産が開始されるようになる。

生産地と考えられる上野以外で、この時期に出土しているのは、今のところ中堀遺跡だけである。

第32号住居跡18は、胴部中位が強く張り、球形になるB I型である。焼成は良好で、硬質に焼き上がっている(HS)。

吉井型羽釜は、外面の雑なヘラケズリが特徴であるが、初期のものは、底部付近のみにヘラケズリを施す例が多いと指摘されている。第32号住居跡18は、まったくヘラケズリがみられず、指摘を裏づけるものである。

第182号住居跡11は、口縁部が強く内湾するもので、胴部が欠損しているが、おそらく卵型(羽釜A)となるものである。

甗は、B I型の第87号住居跡49と、B II型の第118号住居跡22がある。

第87号住居跡49は、口縁部が非常に大きく開く。ロクロ目が明瞭で、還元焰焼成(NS)である。

第118号住居跡22は、「ハ」の字に開く底部から内湾気味に口縁部に至る。胴部下半には、雑なヘラケズリが施される。口縁端部から鏝部までは、羽釜に比べて長い。底部には、簀子受けの窪みがある。焼成は、還元焰焼成(NS)である。

第Ⅶ期

器種構成上、須恵器の高台付皿が消滅する他は、大きな変化はみられない。第14・16・19・37・56・101・102・167号住居跡の土器群が、該当する。

須恵器碗は、さらに底径が小形化する傾向もあるが、法量にばらつきが多く、一定しない。高台付碗とともに器肉が厚くなる傾向にある。高台は小さく低いタイプと、細長く伸びる高脚高台とがある。両者とも体部の作りが粗雑化し、一定した形態ではない。

土師器坏Aは、器肉が大変厚くなり、坏Bと近似する。第Ⅶ期に現れた土師器高台付碗も、この段階に残存している。土師器の主体は坏Bである。底部に離れ砂の確認できる個体もある。口縁部はハ字状に開き、口唇部で小さく屈曲する。

黒色土器は、大形の碗形土器が確認できる。

灰釉陶器は、東濃の製品を主体に遠江(宮口・清ヶ谷)が加わるようになる。器種は、高台付皿・高台付碗・高台付大碗などがみられる。つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りとヘラキリがみられる。これらから折戸53号窯式の2型式、大原2号窯式後半期と併行すると考えた。

煮炊具では、須恵器羽釜の出土量が急激に増加する時期である。土師器甗7個体に対して、羽釜は23個体である。

土師器甗はA型だけになる。口縁部は短く外に開くC型が主体となる。胴部はⅥ期よりもさらに張りが弱くなり、器肉も厚くなる。

またⅥ期までのように、硬く焼かれるものは少なく、焼成の甘いものが多くなる。

台付甗にも土師器甗と同様な変化がみられる。

胴部が卵形である羽釜Aには、第5号住居跡6や第25号住居跡9のように、鏝部付近で、弱く屈曲するb型もみられるようになる。また、第115号住居跡3は胴部上位の張りが弱く、胴部中位が弱く張るロ型である。

羽釜Bは、胴部中位の張りが強く、底部の大きいもので、Ⅶ期にもみられた球形胴に近いB I型(第102号住居跡4)と、胴部が長胴気味のB II型(第130号住居跡16・93号住居跡3)がある。

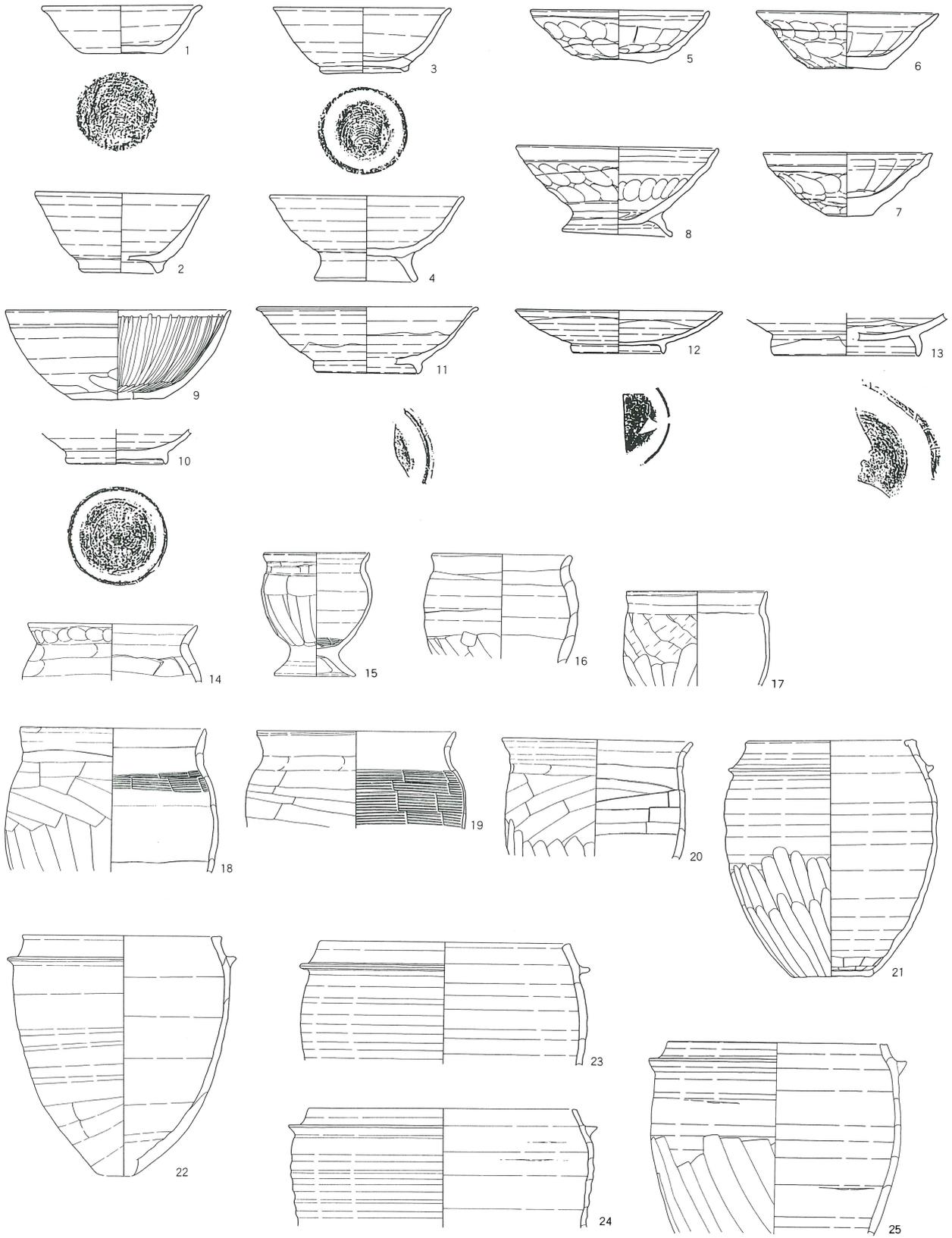
羽釜A・Bともに、胴部中位もしくは下位から底部まで、雑なヘラケズリが施されるようになる。焼成は様々で還元焰(NS)や、半還元焰(HS)など多様である。

羽釜は、一見するとどれも似たように見えるが、細部の形態にはバリエーションが多い。この特徴は、出現段階からみられるもので、Ⅵ期まで煮炊具の主体であった土師器甗のような変化の方向性を見つけだすことは難しい。

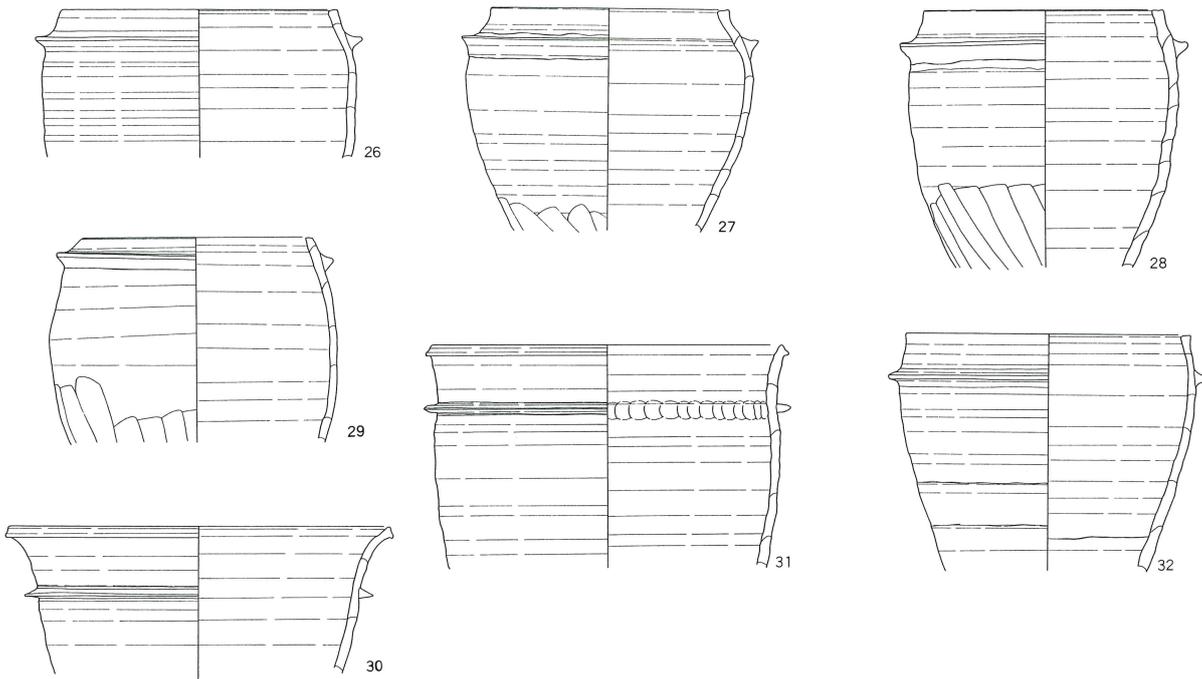
須恵器甗は、A型(第115号住居跡第5・134号住居跡13)とC型(第19号住居跡32)がある。

第115号住居跡5は胴部が張るA I型で、第134号住

第846図 中堀第Ⅶ期の土器（1）



第847図 中堀第Ⅶ期の土器（2）



- | | | |
|--------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 第37号住居跡-36（椀） | 12 第167号住居跡-3（高台付皿） | 23 第102号住居跡-4（羽釜BⅠ） |
| 2 第167号住居跡-1（高台付椀） | 13 第37号住居跡-45（高台付大椀） | 24 第25号住居跡-9（羽釜AⅡbⅠ） |
| 3 第37号住居跡-37（高台付椀） | 14 第167号住居跡-7（甗AⅢd） | 25 第5号住居跡-6（羽釜AⅠb□） |
| 4 第101・102号住居跡-3（高脚高台付椀） | 15 第134号住居跡-12（台付甗） | 26 第102号住居跡-5（羽釜AⅡb□） |
| 5 第16号住居跡-3（坏A） | 16 第5号住居跡-5（ロクロ甗） | 27 第93号住居跡-2（羽釜AⅠaⅠ） |
| 6 第37号住居跡-4（坏B） | 17 第134号住居跡-11（台付甗） | 28 第115号住居跡-3（羽釜AⅡaⅠ） |
| 7 第37号住居跡-16（坏B） | 18 第167号住居跡-6（甗AⅢc） | 29 第93号住居跡-3（羽釜BⅡb） |
| 8 第16号住居跡-4（高台付椀） | 19 第182号住居跡-10（甗AⅢa） | 30 第134号住居跡-13（甗AⅡ） |
| 9 第56号住居跡-8（黒色土器） | 20 第122号住居跡-12（甗AⅣc） | 31 第115号住居跡-5（甗AⅠ） |
| 10 第19号住居跡-29（高台付椀） | 21 第130号住居跡-16（羽釜BⅡa） | 32 第19号住居跡-32（甗C） |
| 11 第14号住居跡-5（高台付椀） | 22 第44号住居跡-8（羽釜AⅠaⅠ） | |

居跡13は、大きく開くAⅡ型である。

甗C型は、口縁端部から鋸部までの長さが短くなり、胴部上位までの破片では、羽釜か甗か判別が難しい。

甗の焼成は、いずれも還元焰（NS）であり、羽釜にみられる胴部中位以下のヘラケズリはみられない。

ロクロ整形の甗が、本時期から出現する。第5号住居跡5がそれで、「ロクロ整形酸化焰焼成の甗」と呼ばれている。

この甗は、その名前の通り酸化焰焼成（HS）で、羽釜にみられるように、胴部中位から底部にかけてヘラケズリを施す。また、胎土も羽釜と類似することから、羽釜工人により製作されたといわれている。

第Ⅷ期

器種構成上、小形の坏が第Ⅶ期の組成に加わる他、大きな変化は認められない。第20・48号堅穴式住居跡

出土の土器群が、該当する。

須恵器の小形の坏は、いわゆる小皿とは異なり、深めの坏形の土器で出土点数は、それほど多くない。須恵器の坏は、法量やプロポーションに様々な形態が認められ、一定しないが、扁平化、底部の小形化の進む器種と、深めの椀形となる器種がある。

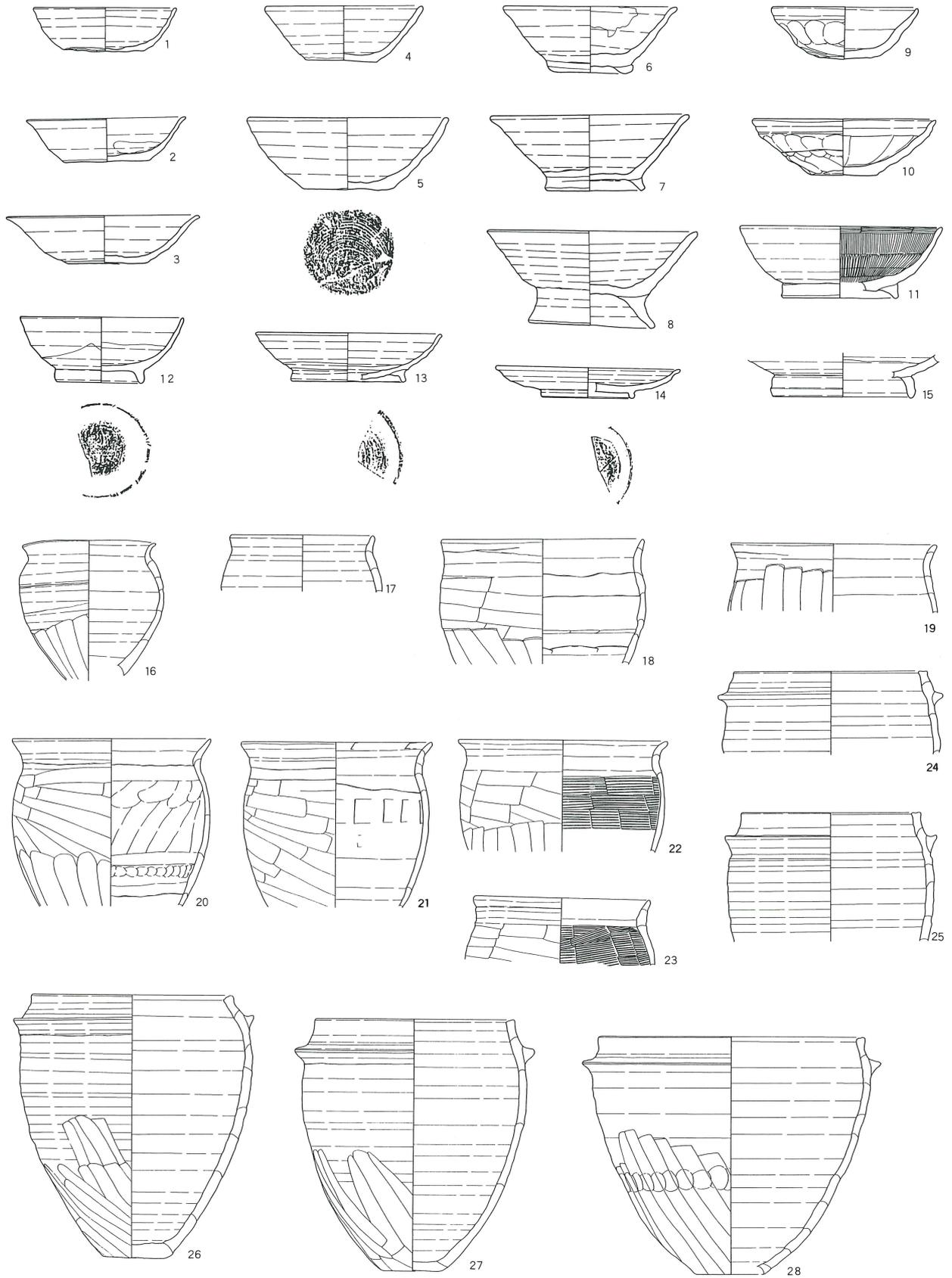
高台付椀は、高台部が鈍化し、様々な形を認めることができる。高脚高台付椀も、一定量認めることができる。

土師器坏Bは、少量ながら残存している。器形や手法の変化は乏しいが、全体に球形化するようである。

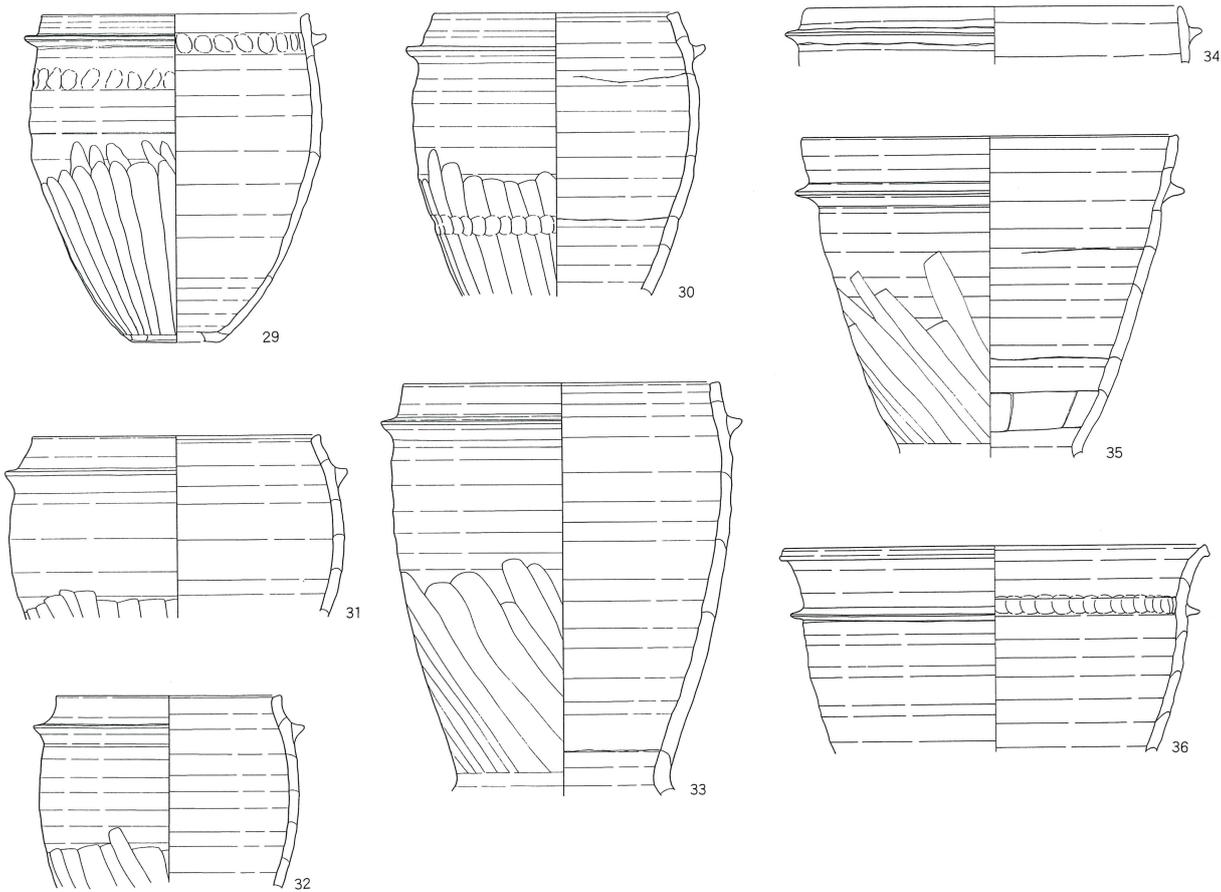
黒色土器は、高台付椀が認められる。

灰釉陶器は、東濃の製品が主体である。ただし出土量は激減する。器種は、高台付皿・高台付椀・高台付大椀などがみられる。つけかけによる施釉で、底部調

第848図 中堀第Ⅷ期の土器（1）



第849図 中堀第Ⅶ期の土器（2）



- | | | |
|----------------------|-----------------------|------------------------|
| 1 第48号住居跡-15（小形坏） | 13 第48号住居跡-51（高台付椀） | 25 第113号住居跡-5（羽釜AⅠb口） |
| 2 第20号住居跡-11（坏） | 14 第48号住居跡-25（高台付皿） | 26 第54号住居跡-31（羽釜AⅡaⅠ） |
| 3 第20号住居跡-10（坏） | 15 第48号住居跡-52（高台付大椀） | 27 第178号住居跡-14（羽釜AⅠaⅠ） |
| 4 第20号住居跡-14（椀） | 16 第59号住居跡-16（ロクロ甕） | 28 第70号住居跡-5（羽釜AⅠaⅠ） |
| 5 第20号住居跡-17（椀） | 17 第54号住居跡-30（ロクロ甕） | 29 第180号住居跡-29（羽釜BⅡa） |
| 6 第20号住居跡-22（高台付椀） | 18 第48号住居跡-62（甕AⅣc） | 30 第59号住居跡-18（羽釜AⅡa口） |
| 7 第48号住居跡-41（高台付椀） | 19 第180号住居跡-21（甕C） | 31 第177号住居跡-5（羽釜BⅠ） |
| 8 第20号住居跡-26（高脚高台付椀） | 20 第178号住居跡-9（甕AⅣd） | 32 第59号住居跡-19（羽釜AⅠa口） |
| 9 第48号住居跡-2（坏B） | 21 第20号住居跡-30（甕AⅢb） | 33 第59号住居跡-23（甕BⅡ） |
| 10 第20号住居跡-2（坏B） | 22 第20号住居跡-32（甕AⅣc） | 34 第10号住居跡-17（土師器羽釜A） |
| 11 第48号住居跡-50（黒色土器） | 23 第59号住居跡-17（甕AⅢe） | 35 第59号住居跡-22（甕BⅠ） |
| 12 第48号住居跡-22（高台付椀） | 24 第121号住居跡-14（羽釜BⅡb） | 36 第113号住居跡-6（甕AⅠ） |

整は糸切りである。皿や椀など小形化が進む。これらから虎溪山1号窯式に併行すると考えた。

煮炊具では、羽釜が主体であることに変化はないが、土師器甕もかなりの比率で残っている。羽釜86個体に対して土師器甕26個体である。

土師器甕はⅦ期とほとんど変化はない。さらに、器肉が厚くなり、相変わらず焼成は甘く、胎土が粉っぽく手に着く。

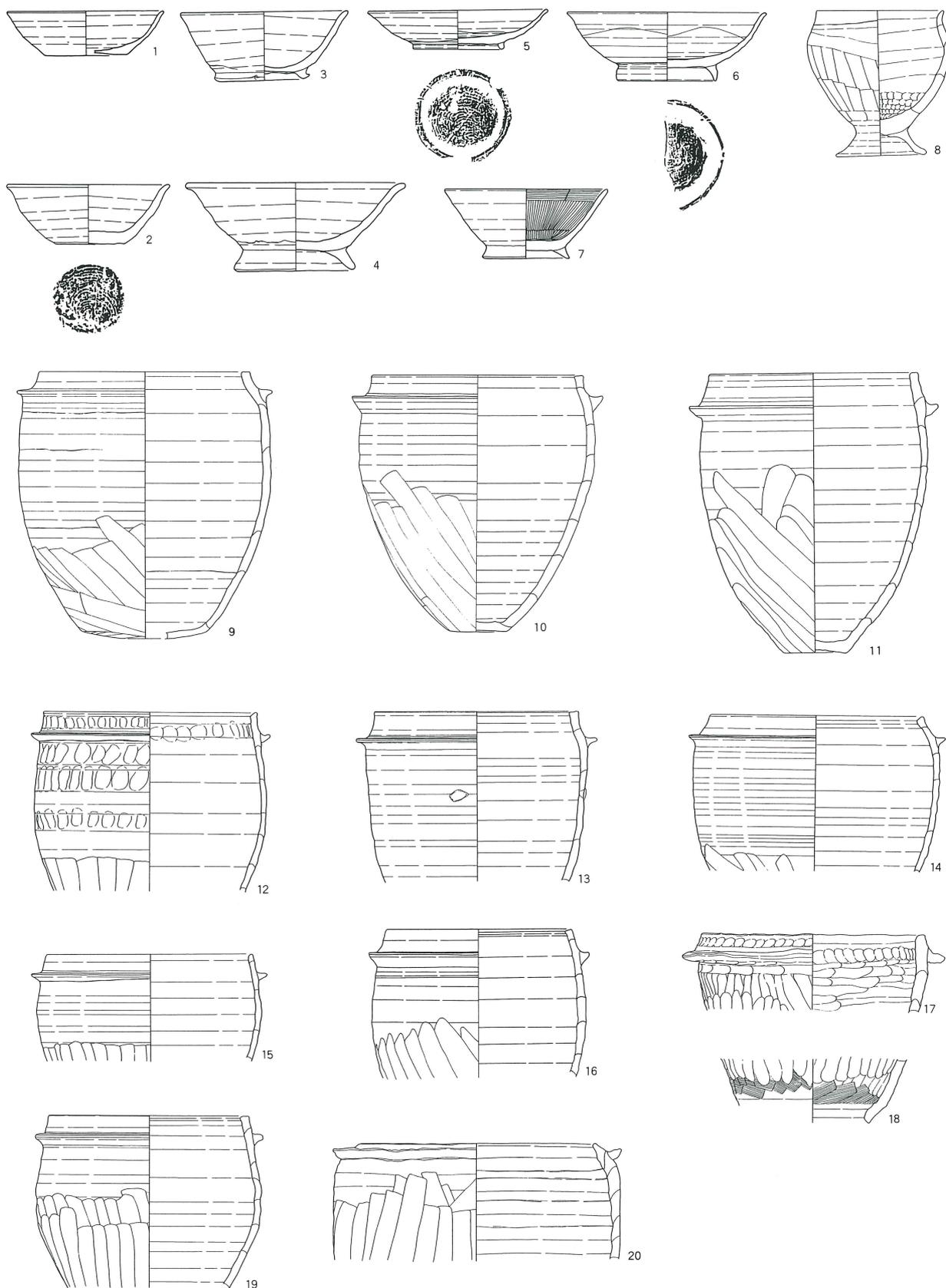
土師器甕C（第180号住居跡21）は、Ⅶ期までの土

師器甕とは大きく異なり、胴部整形が縦方向のヘラケズリだけである。土師器甕A・Bのように、武蔵型甕の系譜下にあるものではなく、本時期から新たに出現するタイプである。

また、土師器羽釜Aもみられる。第10号住居跡17は、明らかに酸化焰焼成（H）で、ロクロを用いず整形したものである。

土師器羽釜Aは、本時期以降に東毛地域に少量みられる「東毛型」といわれるものと考えられる。

第850図 中堀第Ⅸ期の土器



- | | | |
|------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| 1 第51号住居跡-1 (小形坏) | 8 第82号住居跡-9 (台付甕) | 15 第77号住居跡-6 (羽釜B II b イ) |
| 2 第104号住居跡-1 (椀) | 9 第109・106号住居跡-18 (羽釜A I b ロ) | 16 第6号住居跡-5 (羽釜B II a) |
| 3 第51号住居跡-4 (高台付椀) | 10 第71号住居跡-14 (羽釜A I a イ) | 17 第82号住居跡-11 (土師器羽釜B) |
| 4 第104号住居跡-14 (高脚高台付椀) | 11 第143号住居跡-3 (羽釜A II a ロ) | 18 第82号住居跡-12 (甑) |
| 5 第51号住居跡-8 (高台付皿) | 12 第77号住居跡-5 (羽釜B II b) | 19 第51号住居跡-10 (羽釜B II b) |
| 6 第88号住居跡-8 (高台付椀) | 13 第104号住居跡-23 (羽釜A I b イ) | 20 第88号住居跡-15 (土師器羽釜B) |
| 7 第88号住居跡-7 (黒色土器) | 14 第71号住居跡-13 (羽釜A II a イ) | |

須恵器羽釜はⅦ期同様にバリエーションが豊富であり、目立った変化はみられないが、本時期から砲弾型の羽釜B II a型がみられるようになる。

第180号住居跡29はその中でも特徴的で、鏝部の下位と鏝部内面に、明瞭なユビオサエの痕跡を残し、胴部中位以下のヘラケズリも強い。また、口縁端部を面取りせず丸く仕上げている。このような羽釜B II a イ型が、一定量出土している。

甑には、A・B・Cの3つがある。このうち、甑B・C (第59号住居跡22・第59号住居跡23) の胴部には、羽釜同様のヘラケズリが施されるようになる。

ロクロ整形の甕 (第59号住居跡第16・54号住居跡30) は、出土量がわずかながら増加する。

第Ⅷ期

器種構成上、土師器の坏は全く姿を消す。その他、須恵器の器種構成に変化はみられない。土器そのものの出土量が少なくなる。第51・88・104号竪穴式住居跡出土の土器群が、該当する。

須恵器は、小形の坏、坏、高台付椀、高脚高台付椀などからなる。それぞれ第Ⅷ期からの変化は乏しい一方で、器形は一定化しない。全体に大変厚ぼったい器形となる。ただし高脚高台付坏を除いて、全体的に小形化の傾向がみられる。

黒色土器は、高台付椀がみられる。内面のみ丁寧にヘラミガキされ、黒色処理されている。

灰釉陶器は、東濃の製品が主体である。量的には大変少なくなる。高台付皿と高台付椀が確認できる。つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。皿や椀など小形化が進む。これらから虎溪山1号窯式から丸石2号窯式に併行すると考えた。

大形の煮炊具は、すべて羽釜となる。羽釜は、Ⅷ期

から大きな変化はみられない。

羽釜Aの中には、第109号住居跡18のように底部が大きく、寸胴型が現れる。また、鏝部付近が強く張るタイプはみられなくなる。

羽釜A・Bともに、ロクロ目が不明瞭になる傾向がある。これと連動して、粘土紐積上の痕跡は明瞭で、器面の凹凸は激しくなり、器肉はやや厚くなる。

土師器羽釜Bが少量存在する。器肉は厚く胴部の整形は、ヘラまたはヒゲ状工具を使用する非常に雑な造りである。焼成も甘く粉っぽい。胎土が手に着く。第82号住居跡11は、第82号住居跡12とセットになって甑となる可能性もある。

Ⅷ期にみられた土師器羽釜Aとは異なる。東毛型とは違う在地のものであろう。

台付甕が1点みられる。第82号住居跡9で、胴部上阪は斜め方向に、弱くユビナデされる。武蔵型甕の系譜に繋がるものかもしれない。

器肉は非常に厚く、小形の割に重量感がある。

以上、中堀遺跡の土器は、Ⅸ期に亘って変遷していることを明らかにした。

各期の年代的な位置付けであるが、近年の灰釉陶器の編年観や、須恵器の窯編年による年代観を考慮し、以下の通りとしておくこととする。第Ⅰ期：8世紀後葉、第Ⅱ期：9世紀第Ⅰ四半期、第Ⅲ期：9世紀第Ⅱ四半期、第Ⅳ期：9世紀第Ⅲ四半期、第Ⅴ期：9世紀第Ⅳ四半期、第Ⅵ期：10世紀第Ⅰ四半期、第Ⅶ期：10世紀第Ⅱ四半期、第Ⅷ期：10世紀第Ⅲ四半期、第Ⅸ期：10世紀第Ⅳ四半期。

なお本章は、供膳具を田中広明、煮炊具を末木啓介が執筆した。

(3) 供膳具

1 供膳具の法量変化

中堀遺跡から出土した供膳具は多岐に及ぶが、その中でも比較的出土量の多かった土師器坏A・B・皿、須恵器碗・高台付碗・高脚高台付碗・皿・高台付皿の法量変化について記しておきたい。

まず土師器坏Aである。土師器坏Aは、底部の調整手法で6類に分類可能なことはすでに述べた。第851・852図は、各手法で法量差が存在するかを考えた図である。横軸(X)に口径、縦軸(Y)に底径か器高を取り、口径：底径を▲、口径：器高を●で表した。そのため図の上位に前者が集中し、後者が下位に集中する傾向となる。

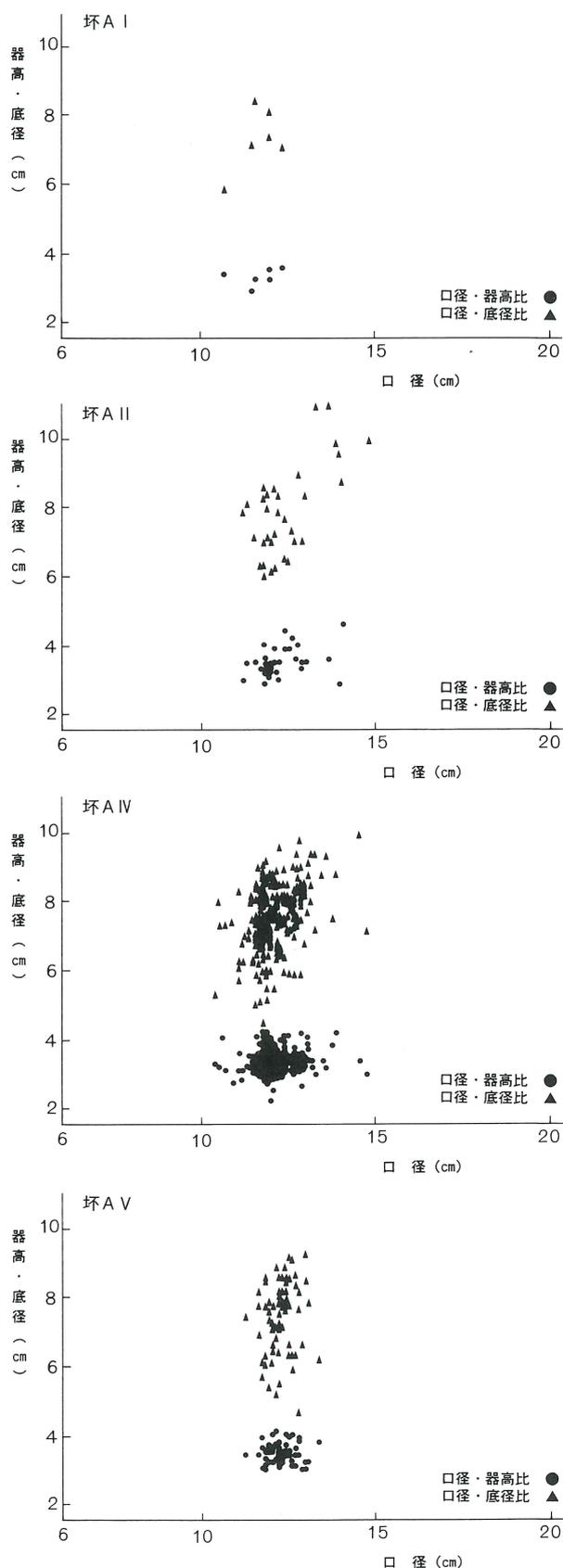
両者の分布傾向をみると、坏AⅢ・Ⅳをのぞき、口径はほぼ11～13.5cmに収まり、器高は比較的一定であるが、底径は、5～10cmと大きくばらつく。ただ器高が、極端に低い、つまり2cm以下は、皿として扱ったのでこの図には登場しない。

坏AⅢ・Ⅳにみられたばらつきは、量的に少ないが大形品がみられたためである。これは、坏AⅡ・坏AⅣ類の中に比較的古い形態、すなわち深めて碗形に近い器形が存在するためである。また口径：底径比のばらつきをみると、底部に何らかのヘラケズリを施す坏AⅠ～Ⅳ類と坏AⅥ類では、底径の大きさに違いがみられる。つまりヘラケズリを施さない坏AⅥ類は、全体的に底径が小振りという傾向がみられた。

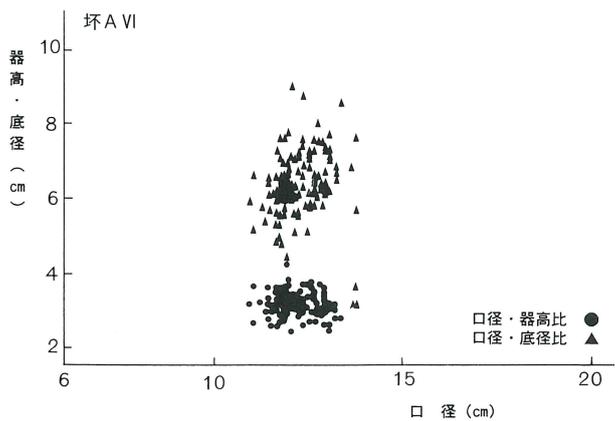
一方、坏Aの法量が、時期を追ってどのように変化したかを探ったのが、第853図である。坏Aは、中堀Ⅱ期にその萌芽的形態が登場し、中堀Ⅶ期まで残存する。中堀Ⅳ・Ⅴ期、とくにⅤ期にきわめて大量に見受けられる。出現期であるⅡ期には、未だに法量は一定せず、ばらつきが激しいが、Ⅲ期に底径は、6～10cmとばらつくが、口径は一定化してくる。この傾向はⅤ期まで続く。Ⅵ期には、底径が縮小化し、5～8cm程度となる。

底径の縮小化は、前に見た坏AⅥ類の中で起こった現象で、ヘラケズリの単位が、粗くなっていくという

第851図 土師器坏A技法別法量(1)



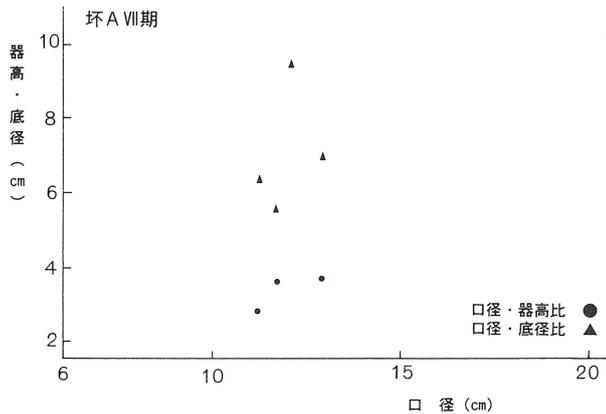
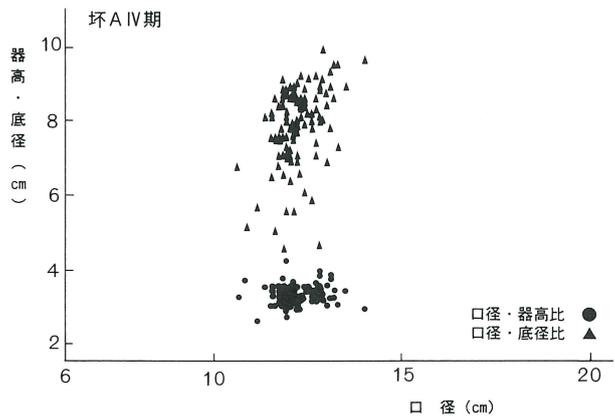
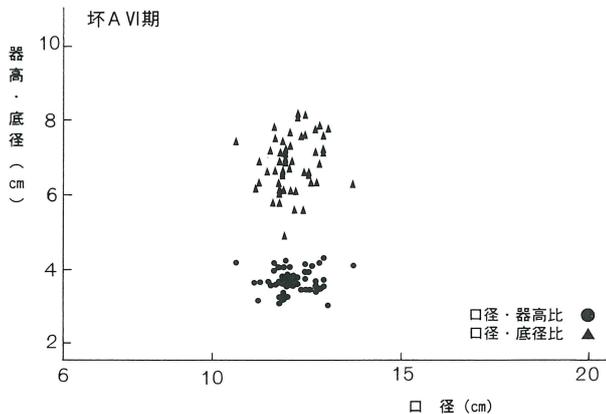
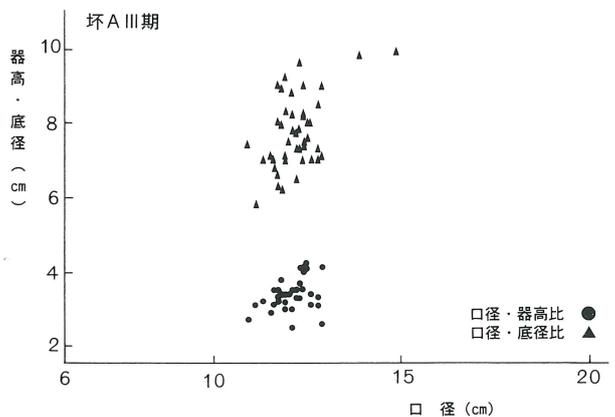
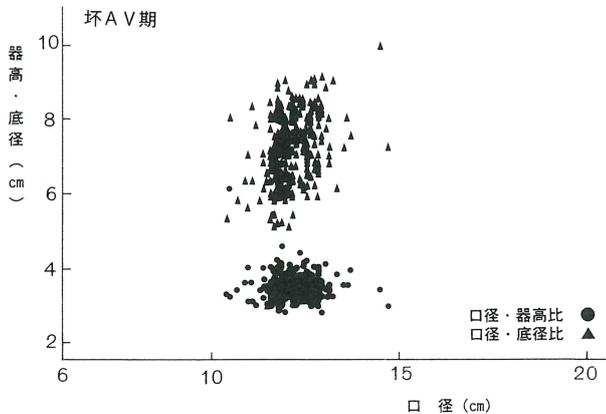
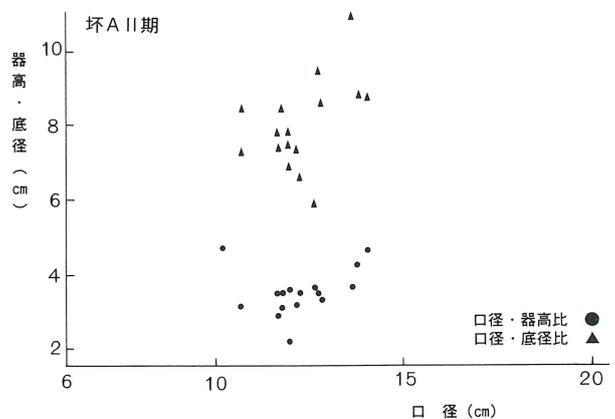
第852図 土師器坏A技法別法量（2）



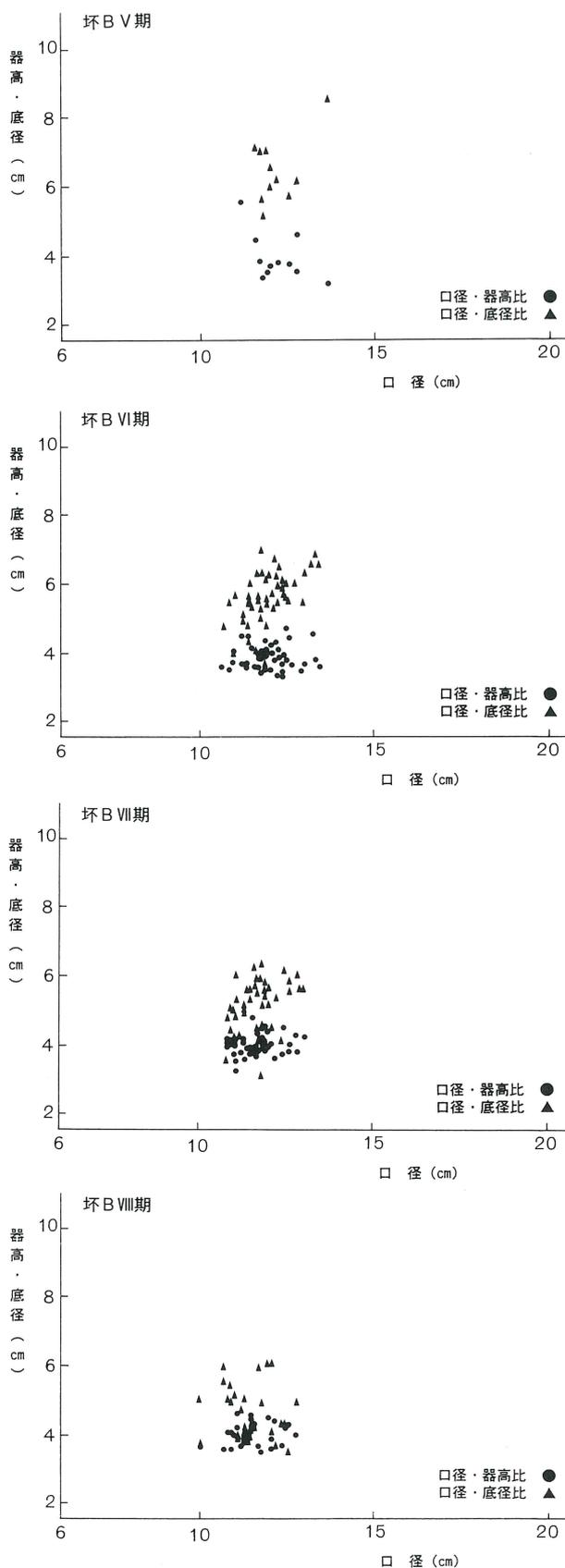
傾向と合致した現象である。ただし器高は、成立当初から一定であり、3～4 cm前後である。つまり口縁部の外傾化が進むのである。

このような傾向は、底部のへラケズリの手法に違いこそあっても、一定の口径や器高は、維持されていたことを示していよう。ところで坏Aは、全国的にみても古代の土器の手法上、最も簡略化の進んだ土器であり、個体差の激しい土器である。にもかかわらず、こうした傾向を指摘できるということは、坏Aが、比較的集中的に、しかも大量に生産されたことを予測させ

第853図 土師器坏A時期別法量



第854図 土師器坏B時期別法量



る。

一方、中堀V期から登場し、VIII期まで存在が確認できる坏Bは、第854図にみるように、以下の変化をたどる。出現段階の坏Bは、数も少ないが、比較的まとまりをみせ、底径が、器高を上回る例をみることはない。しかし徐々に底径の狭い個体が出現し、ついに器高と底径が逆転する程度の個体が現れる。

しかも坏Bが、一定量確認できるVI期から底径の広い個体と、底径の狭い個体との分化が始まり、VII期に顕在化し、ついにVIII期は再び分解し、法量のまとまりはみられなくなる。

坏Bのピークは、VI・VII期にあり、坏Aが減少していくVI期とは、裏腹の関係といえよう。坏Aと坏Bは、前にも述べたが、全く異なった手法で製作された土器で、この転換は、前後して煮沸具に出現した羽釜とともに、技術系列の異なる土器製作者の登場を意味しているようか。

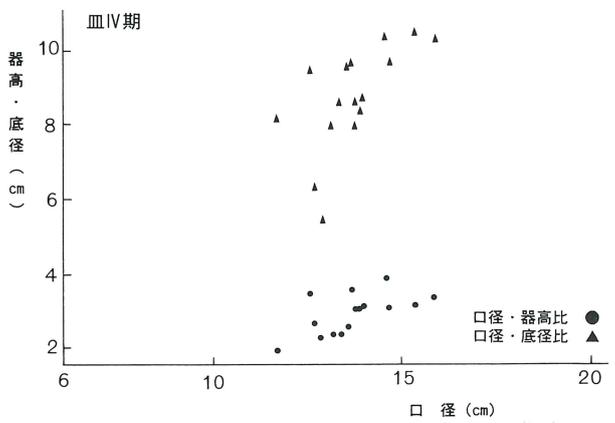
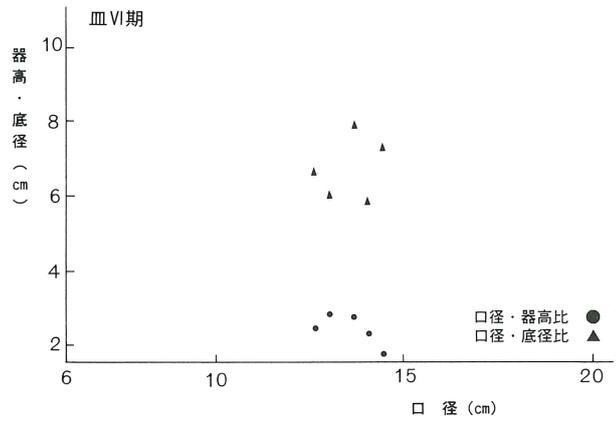
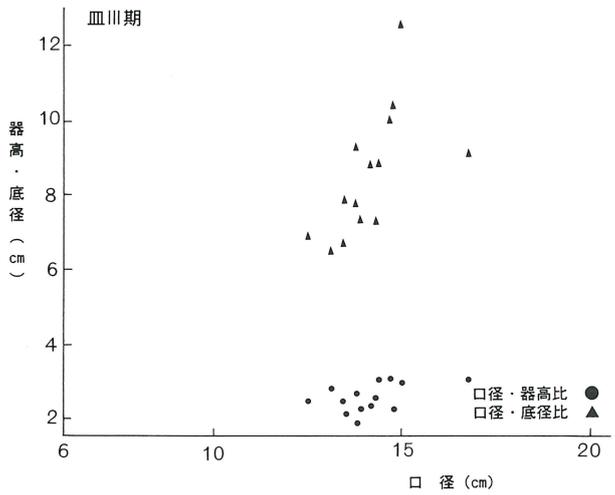
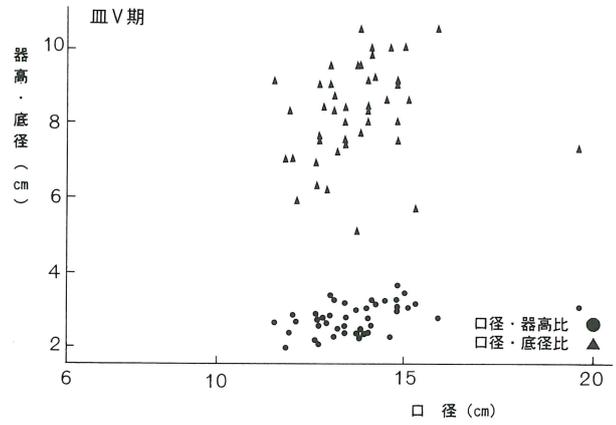
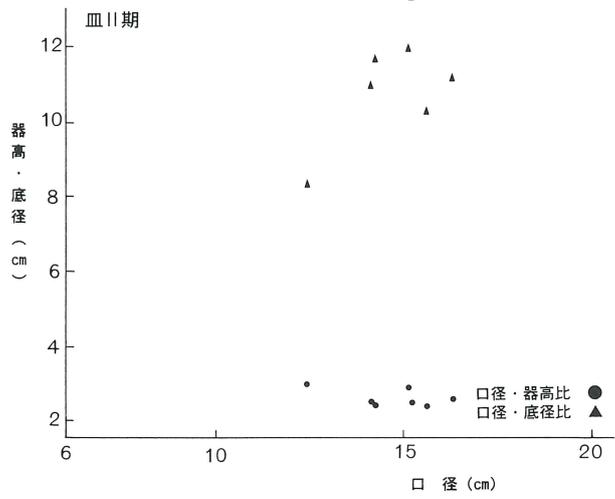
ところで量的に少ないが、土師器の皿はどうだろうか。土師器の皿は、II期からVI期にかけて確認できるが、最も増加したのは、土師器坏Aと同様V期である。法量変化の傾向をみると、器高が2 cm前後と一定しているが、底径や口径は、II期から徐々に小形化し、VI期には、ついに出現期の3分の2程度となる。しかし分布図上の点の散布状況を見る限りは、決して法量上のまとまりは確認できず、散漫な状況といえよう。

また土師器皿の消長は、須恵器皿・高台付皿等と一致し、土師器坏Aとも一致することは、9世紀の土師器食膳具における器種組成の特長といえよう。

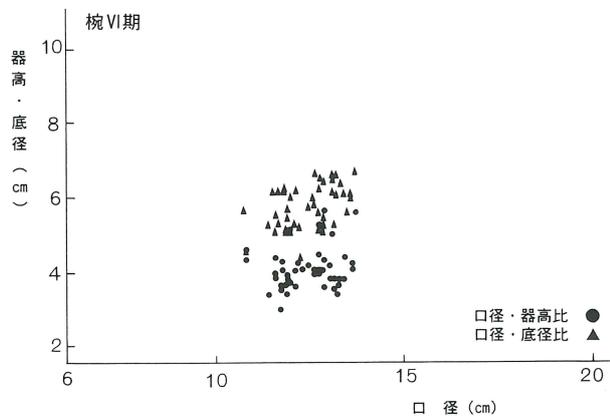
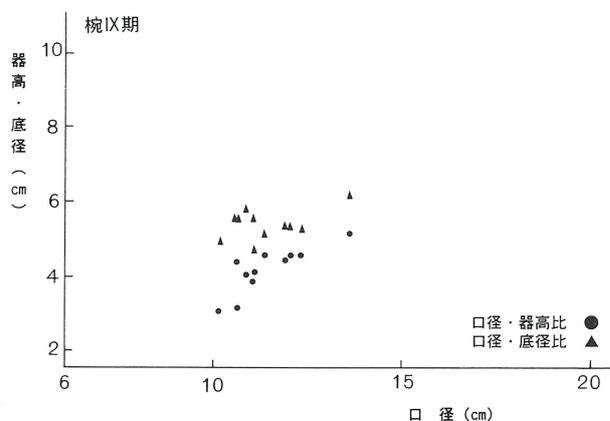
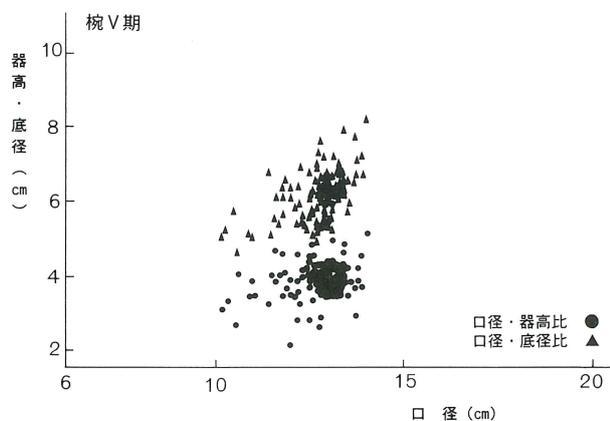
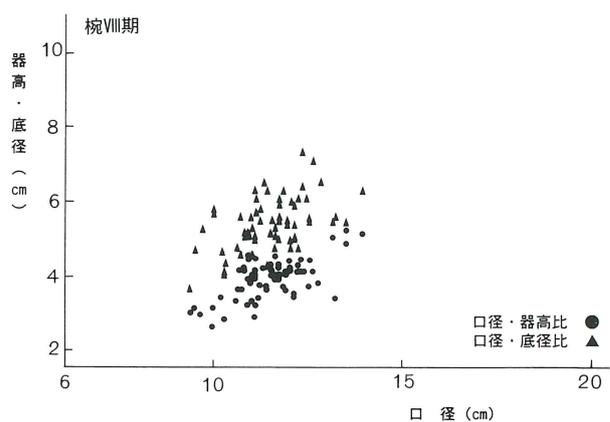
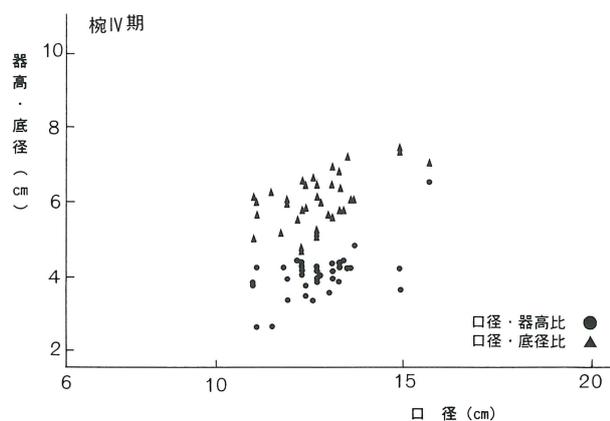
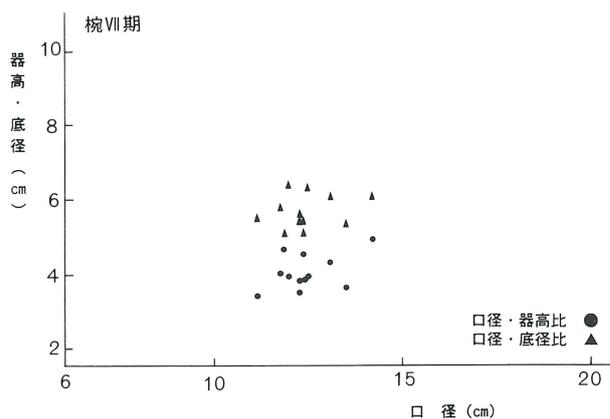
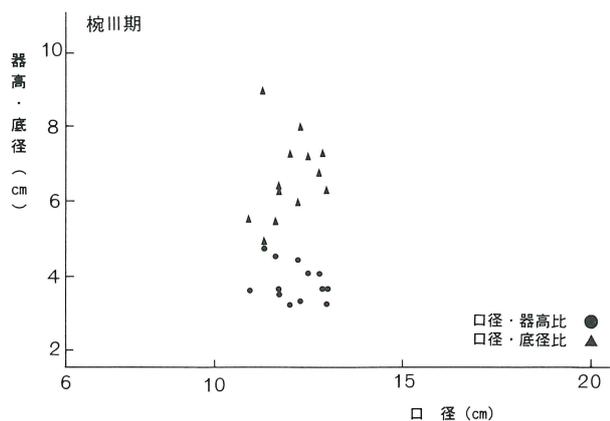
次に須恵器の食膳具の法量変化について考えたい。須恵器の食膳具のなかでも、ここで取り上げた椀・高台付椀は、中堀遺跡の出現期から消滅期に至るまで、普遍的に認められる器種である。ことに椀とした一群は、形態や法量から椀との分離のきわめて難しい「坏」を含む。普遍的な存在であるため出土量の変化は、堅穴式住居跡の構築数の変化と、一致することを念頭に置き分析する必要がある。

椀の法量分布をみると、III期からVII期にかけては、

第855図 土師器皿時期別法量



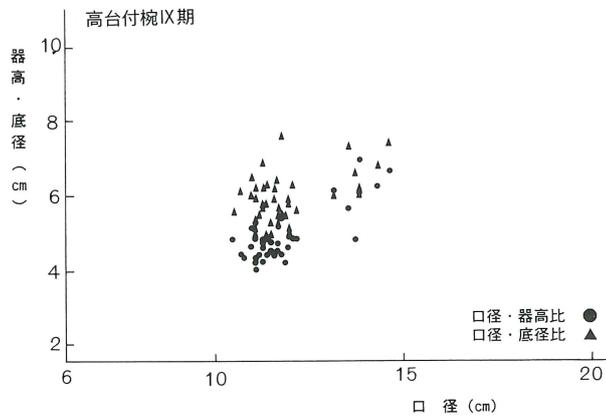
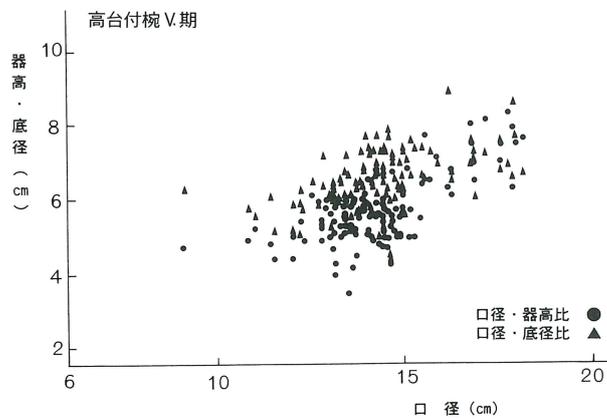
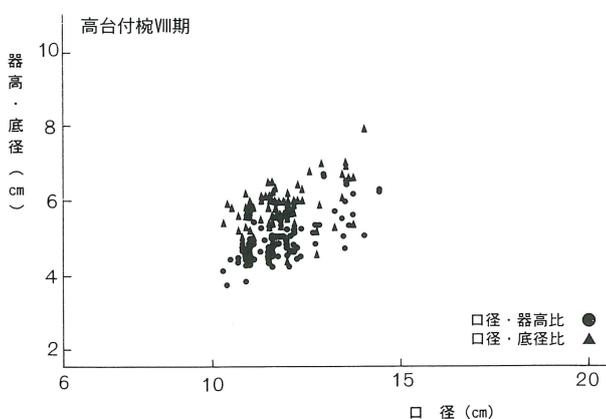
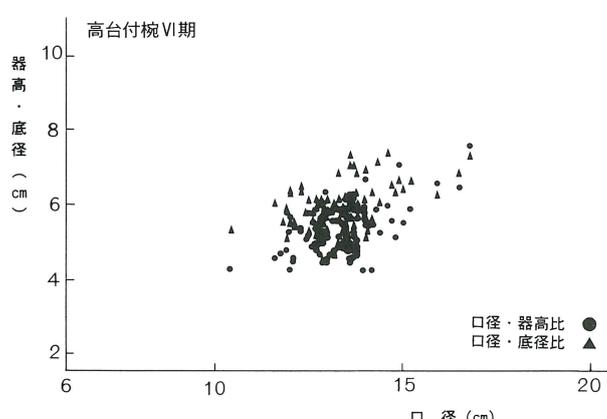
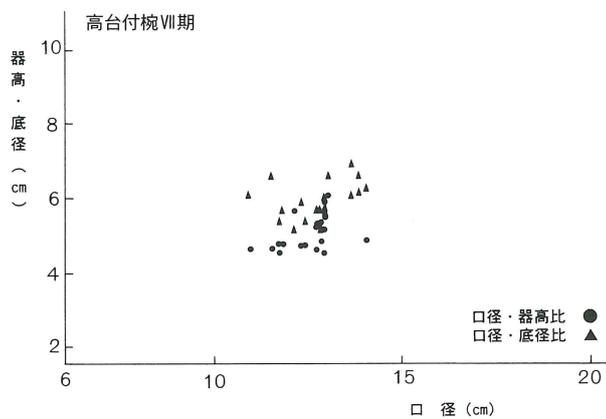
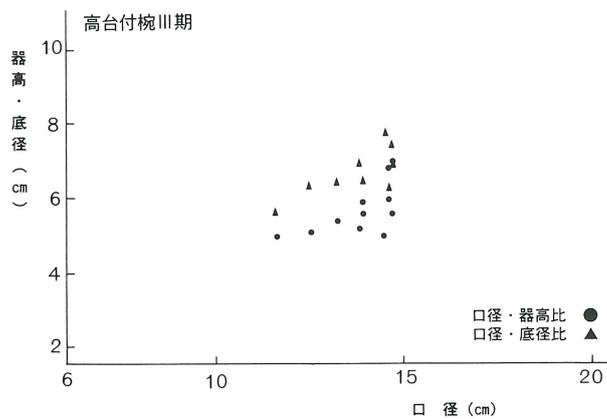
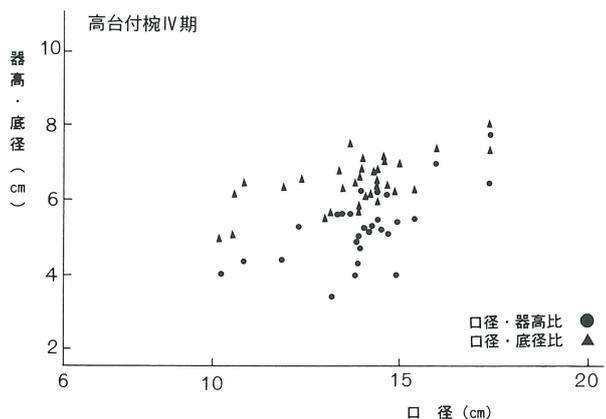
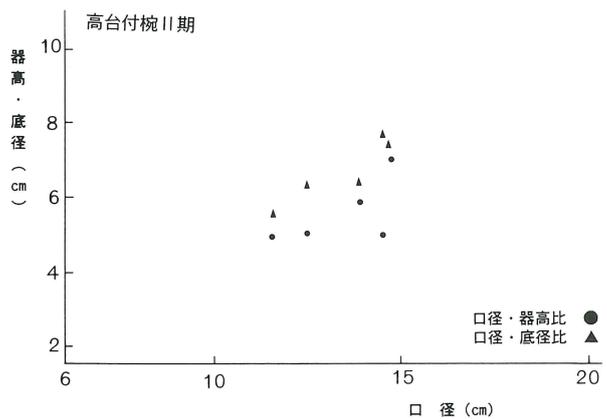
第856図 須恵器碗時期別法量



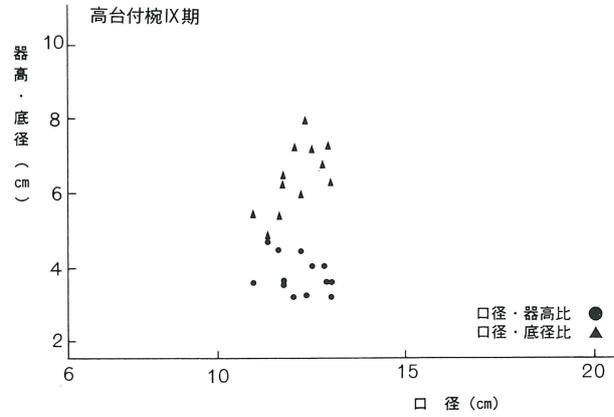
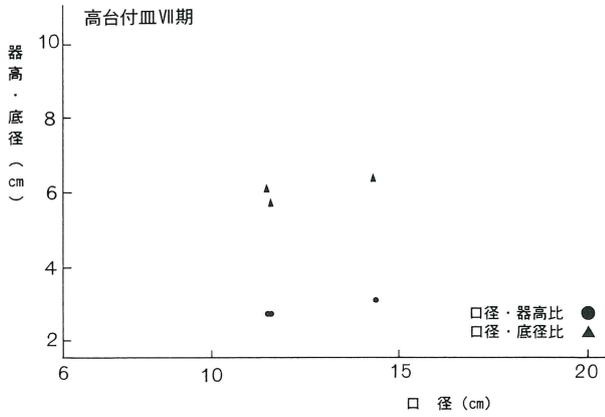
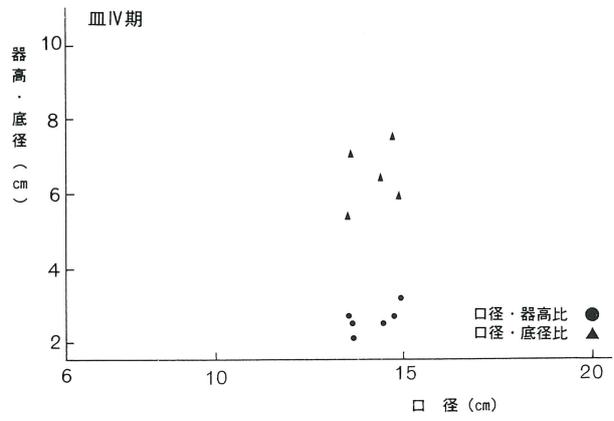
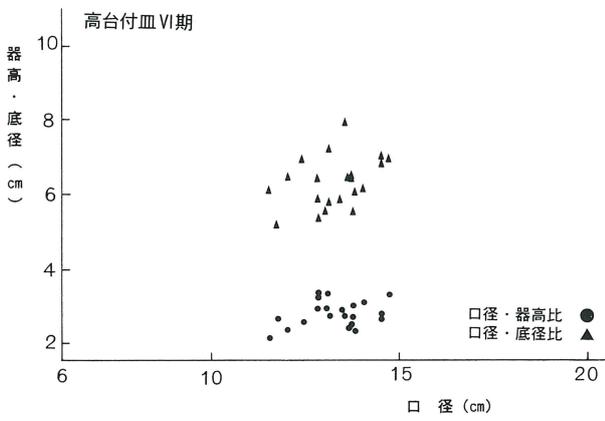
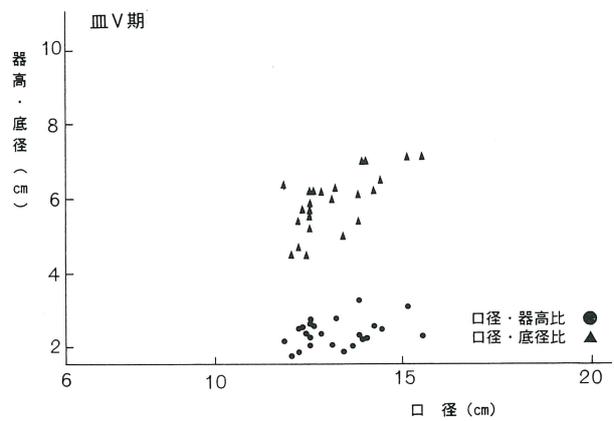
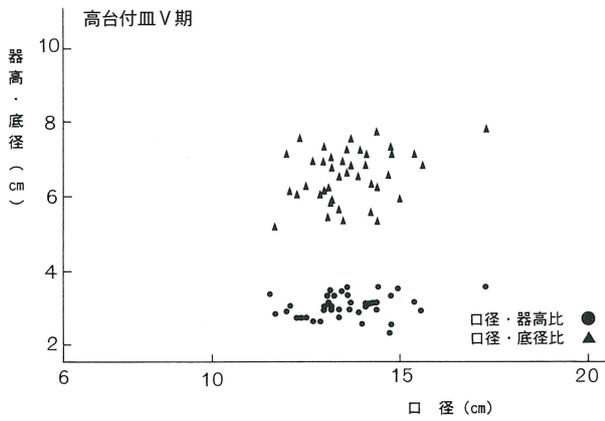
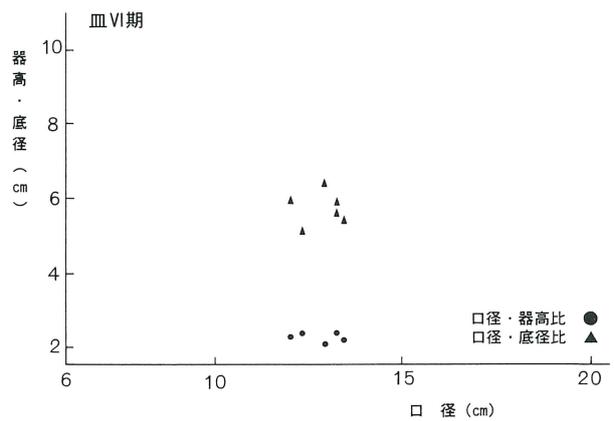
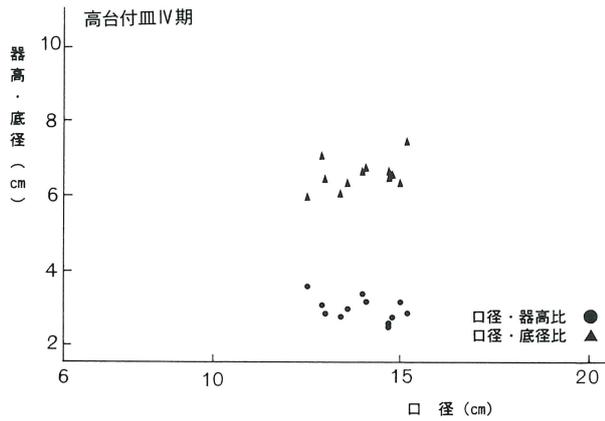
口径が10~14cmと一定しているが、底径では、III期は6~8cmであったが、IV・V期は5~8cm、VI期は、4.5cm~7cm、VII期は、6cm前後と小形化の傾向がみられる。しかし各時期ごとには、明確な法量分化は認められず、せいぜいIV期に大形品が一部みられる程度である。碗には、規格的な法量分化と云うよりも相対的な法量差として、大・中・小を確認できる程度である。

ところがVIII期以降、口径の縮小化が進み、IX期には、10~12cm程度となる。器高も3~4cm程度となる。ま

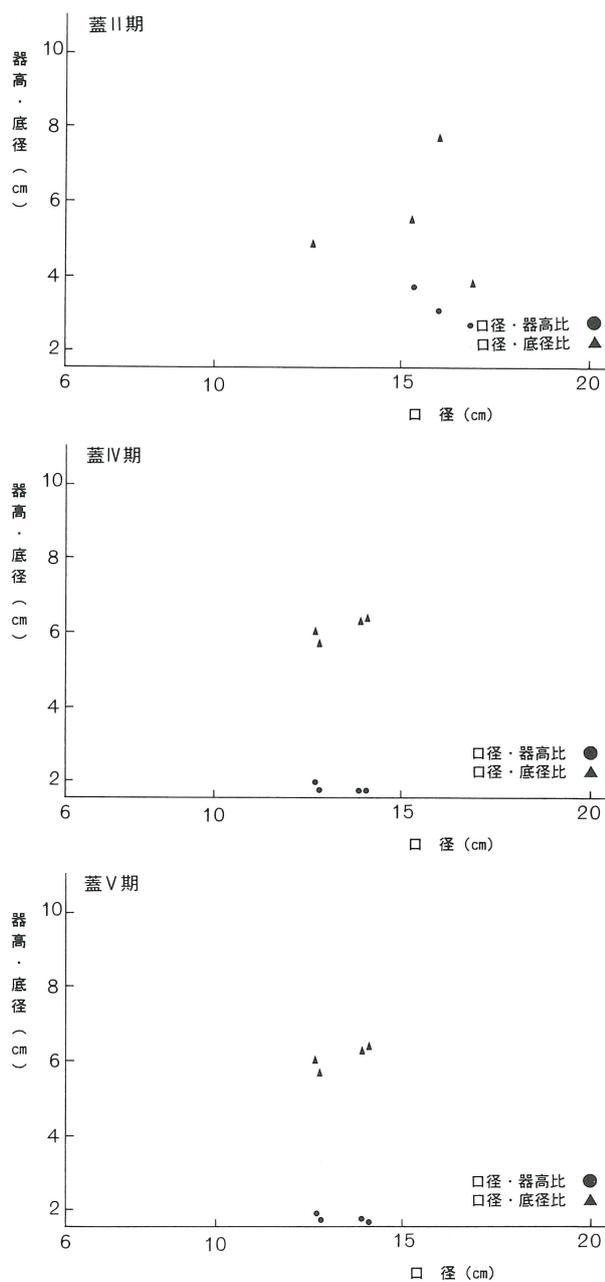
第857図 須恵器高台付椀時期別度量



第858図 須恵器高台付皿時期別法量



第860図 須恵器蓋時期別流量



岡地域) で生産されたと考えられる。

Y (吉井地域)

胎土中に角閃石や白色、または半透明な鉱物粒子を混入する。供膳具の中には、精選された粘土を使用し、薄い器肉で、ロクロ目の顕著な作りの丁寧な例がみられる。

焼成は、良好で還元焰焼成されている例が多い。しかし藤岡地域産 (F) と同様に硬質な焼きはみられない。粉っぽく胎土が手に付く例もある。

底部または体部の一部に、黒斑状の焼きムラがみられる一群が存在する。

羽釜などの大型品は、還元焰焼成、半還元焼成、酸化焰焼成と様々な焼成がみられ、砂粒を多く含み器面がザラつく。

胎土の特徴から、群馬県鎗川流域の吉井町を中心とした地域で生産されたと考えられる。

Z (中堀遺跡近隣)

土師器の胎土に類似する。角閃石および粗い砂粒を多量に混入し、器面がザラつき、器肉が厚く雑な作りである。

焼成は、甘いものから硬質なものまで多様である。還元焰焼成もみられるが、大半は酸化焰焼成、または半還元焰焼成である。

胎土や作りから中堀遺跡近隣の粘土で生産されたと考えた。

H (南比企地域)

白色針状物質を混入する。白色粒子を少量含むほかは、夾雑物をほとんど含まない。

焼成は良好で、硬質な焼き上がりである。

胎土の特徴から、埼玉県南比企窯跡群を中心とする地域で生産されたと考えられる。

その他

S・Y・Z・Hの分類にあてはまらない一群を一括した。この中には、埼玉県東金子窯跡群周辺で生産されたと考えられる例もある。きめの細かい粘土を使用し、硬質な焼き上がりである。色調は、淡黄色と青灰色の二者が確認できた。

黒色土器

黒色土器については、産地の特定は難しいが、胎土の特徴から、5種に分けた。

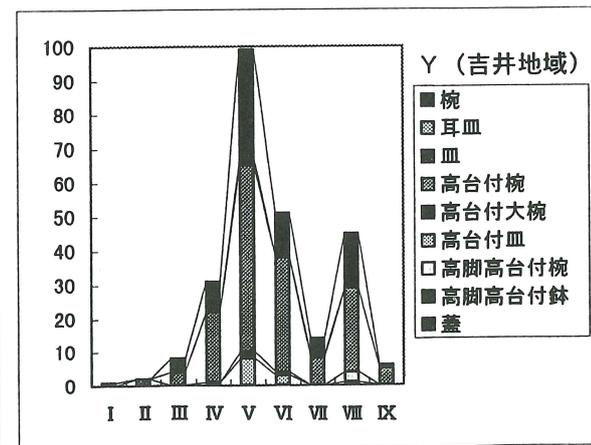
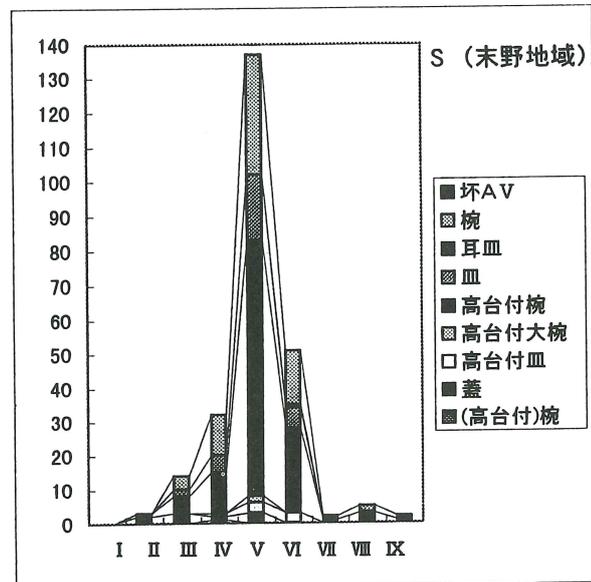
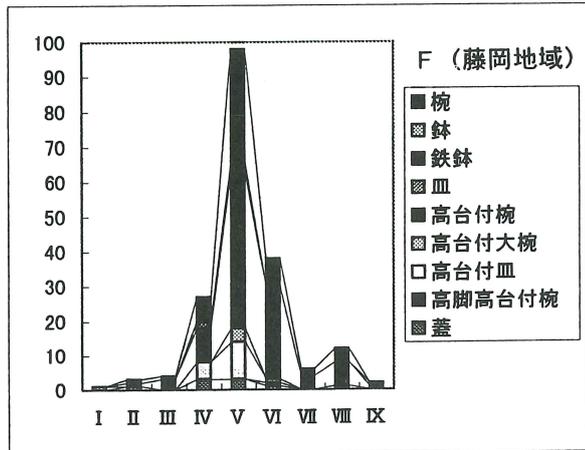
A類—角閃石、および黒色粒子を多量に混入する。精選されたきめ細かい粘土を使用する。焼成は、良好で硬質である。

B類—角閃石の混入がみられない。精選されたきめ細かい粘土を使用する。薄く丁寧な作りである。焼成は良好だが、硬質と軟質の二者がある。

第 663 表 須恵器産地別器種出土量の推移

産地	器種	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
F	蓋	0	1	0	3	3	1	0	0	0
	高脚高台付椀	0	0	0	0	0	1	0	1	0
	高台付皿	0	0	0	5	11	1	0	0	0
	高台付大椀	1	0	0	0	4	0	0	0	0
	高台付椀	0	1	3	10	45	27	4	7	1
	皿	0	0	0	2	1	0	0	0	1
	鉄鉢	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	鉢	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	椀	0	1	1	7	32	8	2	4	0
F 計		1	3	4	27	104	43	9	14	2
H	椀	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	(高台付) 椀	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	蓋	0	2	3	1	3	0	0	0	0
	高台付皿	0	0	0	1	3	3	0	0	0
	高台付大椀	0	0	0	0	2	0	0	0	0
	高台付椀	0	1	5	12	75	25	1	3	1
	皿	0	0	2	5	19	6	0	0	0
	耳皿	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	椀	0	0	4	12	35	16	1	2	1
	坏AV	0	0	0	0	0	0	0	0	0
S 計		0	3	15	34	140	51	2	5	2
Y	蓋	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	高脚高台付鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	高脚高台付椀	0	0	0	0	0	0	0	3	0
	高台付皿	0	0	0	1	8	3	0	0	0
	高台付大椀	0	0	0	0	2	1	0	0	0
	高台付椀	0	0	4	21	55	34	8	25	5
	皿	0	0	0	0	2	0	0	0	0
	耳皿	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	椀	1	0	4	9	32	13	5	16	1
Y 計		1	3	9	31	102	57	19	65	9
Z	高脚高台鉢	0	0	0	0	1	0	2	1	0
	高脚高台付椀	0	0	0	1	2	1	4	19	4
	高足高台付椀	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	高台付皿	0	0	1	2	11	5	1	0	0
	高台付大椀	0	0	0	0	0	0	0	1	2
	高台付椀	0	0	7	12	50	116	29	119	58
	皿	0	0	0	0	1	0	0	1	1
	耳皿	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	片口鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	椀	1	0	5	9	17	20	7	54	11
Z 計		1	0	13	25	93	157	67	288	106
黒色 A	高台付椀	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	小形ロクロ甕	0	0	0	0	1	0	0	0	0
黒色 A 計		0	0	0	0	1	0	0	1	0
黒色 C	暗文土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	甲斐型坏	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	高台付椀	0	0	0	0	2	0	0	0	0
	椀	0	0	0	2	1	1	0	1	0
黒色 C 計		0	0	0	2	3	1	1	1	0
黒色 D	高台付椀	0	0	0	1	0	0	0	0	0
黒色 D 計		0	0	0	1	0	0	0	0	0
黒色 E	高脚高台付椀	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	高台付椀	0	0	0	0	1	2	0	2	3
	椀	0	0	0	0	1	0	0	0	0
黒色 E 計		0	0	0	0	2	2	1	2	3
他	高台付椀	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	長頸壺	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	壺 G	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	椀	0	0	1	0	0	1	0	0	0
他 計		0	0	1	1	2	1	0	0	0
総 計		3	11	42	121	448	312	99	376	122

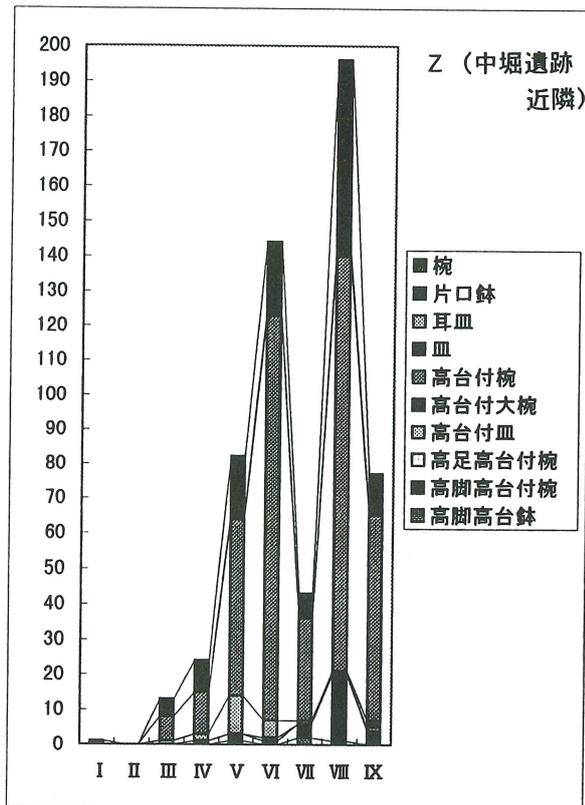
第 861 図 須恵器産地別器種出土量の推移 (1)



C類一角閃石を少量混入する。ほかの特徴は、A類に類似する。

D類一角閃石を少量含み、粗い半透明の鉱物粒子を多量に混入する。この半透明の粒子のため、器面がゴツ

第862図 須恵器産地別器種出土量の推移（2）



ゴツし汚い。焼成は良好だが軟質である。

E類一角閃石、および砂粒を多量に混入する。器面はザラつき、胎土が手に付く。焼成は、やや甘い。

以上、産地ごとに分類した須恵器の供膳具について、産地・器種の時期ごとの推移を第861・862図にまとめた。この図で明らかなように、圧倒的な消費量のピークは、遺跡の消長とともに、中堀V期にあり、この段階を境に大きな山を描いている。しかし各産地別の供給に推移の違いがあり、時期によって供給を受ける生産地のバランスが異なっていた。

藤岡地域

藤岡地域で生産されたと考えた製品は、IV期から急速に増加し、V期には3倍近く増加してピークとなり、VI期からVII期にかけて下降線をたどる。しかしVII期に落ち込んだ消費も、VIII期にやや盛り返すが、IX期にはほとんどみられなくなる。

碗と高台付碗の消費量が極めて高く、ついで皿がみられる。藤岡地域の製品の消費量の推移は、末野地域

の須恵器や土師器の供膳具の推移と共通していた。

末野地域

末野地域で生産されたと考えた製品は、II期からIV期にかけて徐々に増加し、V期には急増しピークとなるが、VI期に半減以下となる。しかもVII期以降は、ほとんどみられないが、IX期まで細々と消費されていたようである。

碗と高台付碗の消費量が極めて高く、ついで皿がみられる。これは、末野地域の須恵器生産が、9世紀末から10世紀始めを境に、丘陵地から平地部へ拡散傾向にあることと、生産が小規模化し、供給がより小さな単位へ移行したためであろう。

吉井地域

吉井地域で生産されたと考えた製品は、VII期まで藤岡地域と同様な消費量の推移をたどる。しかしVIII期に再び急速に需要を増し、IX期に減少する。ことにVIII期の消費量は、VI期と比肩するまで盛り返す。

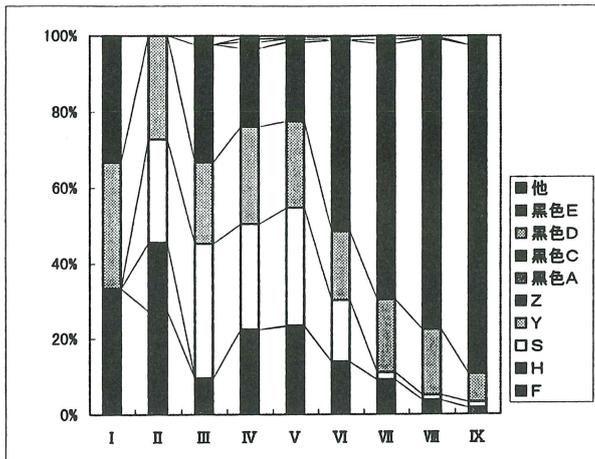
これは、後述するように吉井型羽釜の生産地である吉井地域が、この段階に急速に生産量を増加し、果敢に中堀遺跡へ供給し、消費されていたことと一致する。つまり中堀遺跡にみられた消費の形態から羽釜の生産者の中には、供膳具の生産者が、内包されていたことを予測できる。少なくとも煮炊具と供膳具が、共通の流通過程を経て、中堀遺跡で消費されていたといえよう。

中堀遺跡近隣

生産地は限定できないが、中堀遺跡の周辺（平地に立地した複数の地域窯か）で生産された可能性のある一群を一括し、その消費量の推移を図化すると、第862図のようになる。I・II期は、ほとんどみられないが、III期以降、急速に消費量を伸ばし、VI期まで増加傾向は続く。他の地域で生産された製品の消費が、ピークを迎えたV期は、未だ消費量は増加傾向にある。そしてこの一群は、他の地域産の消費量が、激減するVI期にピークが訪れる。

その後VII期には、竪穴式住居跡の構築数の減少から再び消費量は落ち込むが、VIII期に急速に消費量が増加

第863図 須恵器産地別器種出土量の変化



し、ピークを迎える。ただしこの消費は、それまで近隣窯で生産された製品と、同一の系譜で生産されたのではなく、吉井地域産の消費のように、新らしく編成された生産者集団の手による製品が供給されたと理解したい。

すなわちⅦ期に、それまでの生産体制の終焉と新たな生産体制の開始を予測しておきたい。そしてⅧ期にピークを迎えた消費も、中堀遺跡の縮小化とともに、Ⅸ期には、消費量が半減してしまう。

3 土師器の坏A・Bについて

中堀遺跡から出土した土師器の坏は、奈良時代から系譜をたどれる器肉の薄い坏Aと、平安時代から出現する厚手の坏Bで構成されている。

坏A・坏Bとも形態的特徴や器種構成・調整技法などについては、すでに土器の分類と変遷過程の中で述べているのでここでは省略し、この両者が、どのような地域にどの程度分布し、また时期的にその分布が、どのように変化するのかについて概括しておきたい。

まずその前に9・10世紀、中堀遺跡を含む武蔵国北部・上野国南部のように、手づくね成形によるいわゆる土師器（狭義の土師器）が、食膳具の大半を占める地域について、隣国の状況を瞥見しておく。

第864図は、9・10世紀の集落の食膳具が、土師器で占有されている地域を示した。周知のように武蔵国

や隣国では、8世紀に須恵器の生産が飛躍的に展開し、広く集落の食膳具や貯蔵具を賄うまでになった。しかし北陸地方で想定されている一郡一窯体制（宇野孝夫1990）のような生産体制は採らず、局所的に集中して展開し、その需給関係は、令制下の国郡域を越え、広域的な在地の枠組みのもとで完結した。

ことに広く台地上に集落が展開した8世紀中葉以降は、食膳具の全てが、須恵器で賄われる集落が出現した。その一方で須恵器は、食膳具の一部に過ぎず、主体はあくまでも土師器であった集落もある。

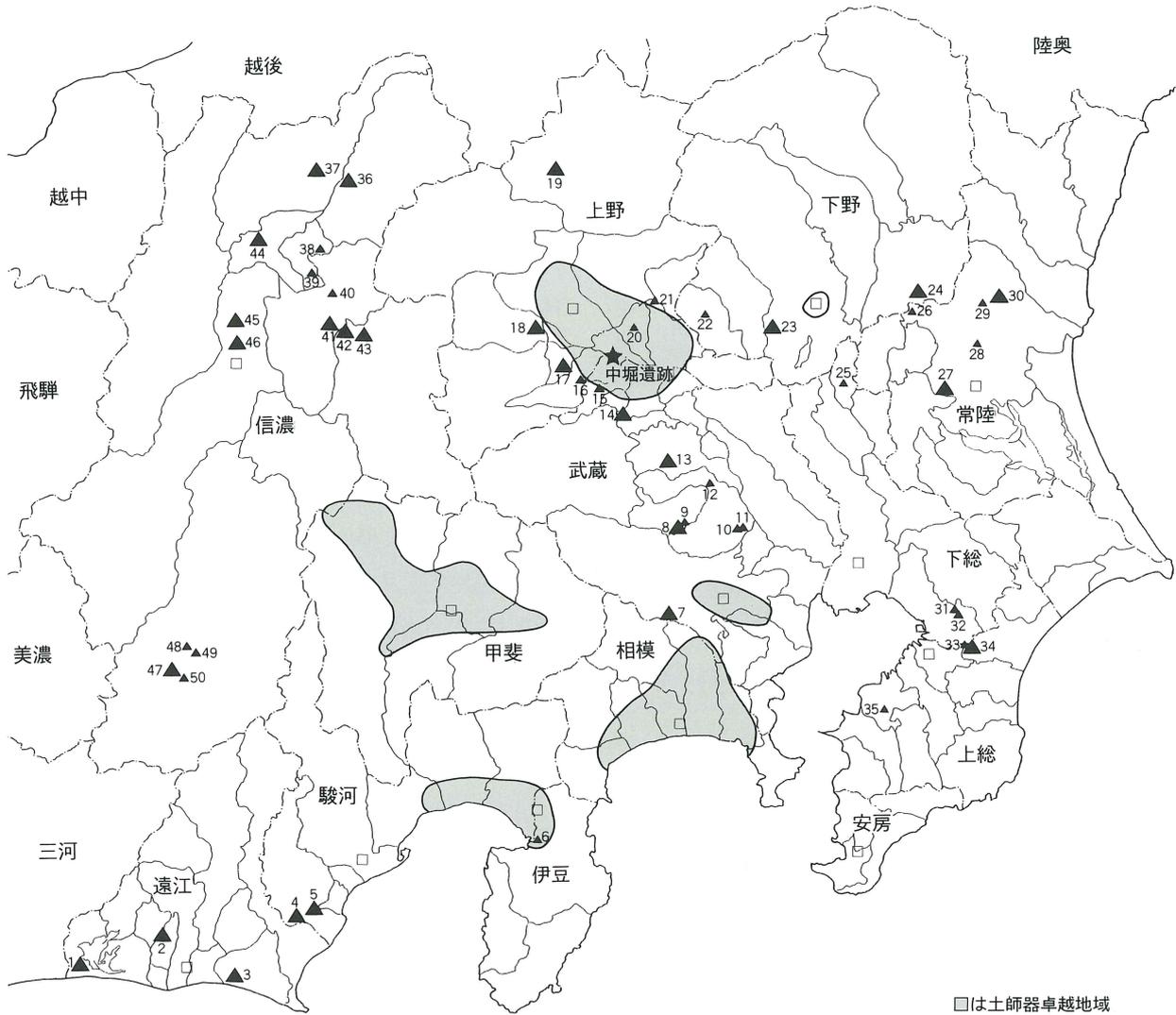
その差は、須恵器の窯場から製品をいかに入手するかにかかり、須恵器窯の経営と需要者側の食膳具に対する姿勢の相違に基づいているのであろう。しかしそれが、地域的なまとまりを示していることは、個別の竪穴式住居や集落が、独自に窯場と交渉を持ったり、製品を独占したのではなく、古墳時代以来のネットワークと、完結した在地の流通圏の上に成立したためであろう。

つまり概括するならば、武蔵国の南部では、南比企・東金子窯跡群から、上野国西部では、吉井・乗附・秋間窯跡群から、上野国北部では、月夜野窯跡群から、下野国南部では、益子・三曇山窯跡群から、常陸国や上総・下総国では、新治・木葉下・堀之内窯跡群から、駿河では、助宗窯跡群から、そして信濃では、松本平・佐久平・伊那谷など各盆地ごとに展開した窯跡群から須恵器が供給され、それぞれ各集落で食膳具の大半を占める傾向がある。

これらの地域は、地域内に窯場を形成し、須恵器の需給関係が完結するか、流通によって賄うかの違いはあるが、次にあげる大量の須恵器を食膳具として受けない、あるいは受け入れられない地域との、食膳具に対する指向の相違は歴然としている。

それは、相模型坏・甲斐型坏・北武蔵型坏などの「国別土器」の名称を生んできた、研究史上の背景はあるが、およそ大規模な須恵器窯跡群の形成と供給を受けなかった地域である。7世紀以来の土師器の伝統を引く形態の土師器を生産し、集落へ供給した地域である。

第864図 武蔵周辺国の須恵器窯と土師器を主体とする遺跡（網内）



- 1湖西窯跡群 2宮口窯跡群 3清ヶ谷窯跡 4旗指窯跡群 5助宗窯跡群 6花坂窯跡 7南多摩窯跡群御殿山地区
 8東金子窯跡群 9東八木窯跡群 10新聞窯跡群 11栗谷ッ窯跡 12西谷ッ窯跡 13南比企窯跡群
 14末野窯跡群 15児玉窯跡群 16藤岡窯跡群 17吉井窯跡群 18秋間窯跡群 19月夜野窯跡群 20舞台窯跡
 21笠懸窯跡群 22岡窯跡 23三轟山窯跡群 24益子窯跡群 25三和窯跡群跡 26堀ノ内窯跡群 27新治窯跡群
 28岩間窯跡群 29大淵窯跡群 30木葉下窯跡群 31中原窯跡群 32宇津志野窯跡群 33坂ノ越窯跡
 34南河原坂窯跡群 35上名主ヶ谷窯跡 36長丘・高丘窯跡群 37髻山窯跡群 38松代窯跡 39坂城窯跡
 40上平窯跡 41依田窯跡群 42御牧原台地窯跡群 43八重原台地窯跡群 44聖山高原東麓窯跡群
 45会田盆地窯跡群 46芥子坊主山窯跡群 47竜丘窯跡群 48金井原窯跡群 49大矢沢窯跡 50御殿田窯跡

その地域とは、上野国南部から武蔵北部、相模国・甲斐国・伊豆国などである。

相模国では、長谷川厚（長谷川1985）・國平健三・服部実喜（國平・服部1986）氏ら、甲斐国では、坂本美夫（坂本1990）・瀬田正明（瀬田1993）・森原明廣（森原1994）氏ら、伊豆国では、池谷初恵（池谷1995）

氏らによって、その変遷や分布等が検討され、それぞれの土器と集落の動態が明らかにされている。それによると、それぞれ8世紀の中葉頃成立し、10世紀の後半には、変質・消滅するようである。

また上野国南部から武蔵北部に広がるいわゆる北武蔵型坏は、赤熊浩一（赤熊1988）・富田和夫（富田

1985)・鈴木徳雄(鈴木1983)・桜岡正信(桜岡1991)・中沢悟(中沢1988)・木津博明(木津1990)氏らによって分析され、形態や技法の変化と年代観、およその分布域は、すでにとらえられている。

ここで明らかにすることは、この北武蔵型坏の型式学的な系譜上にある、中堀遺跡の土師器坏A・Bについて、段階を追った空間的な広がりをとらえておくことである。併せて同段階の食膳具の組成や、集落の動態をとらえることで、土師器の生産と供給の変化を見ていきたい。

そこで第865図から第868図に示した土師器の食膳具の分布を検討する。同図は、上野国南部から武蔵北部にかけての地域で、土師器食膳具が出土した全ての調査遺跡について、報告点数を各時期ごとに累積し示した。

図中では、小さな記号が1点、大きな記号が5点で表した。高台付坏(▲)・坏A(■)・坏B(●)を示したが、皿や耳皿などは含めなかった。ここに扱った時期は、中堀遺跡の編年に対応し、その年代観は、別述と同様である。以下、時期を追ってその様相を述べることにする。

第Ⅱ期

土師器坏Aの出現段階である。出現期の土師器坏Aは、体部が内弯し、下端にユビオサエが残る扁平で、底径の大きな坏である。口縁部は内側に紐状にまとめられ、緩いS字状となる。

この段階は、食膳具はおろか、坏Aが土師器の主体となることはなく、客体的な存在である。主体は、8世紀以来、その伝統を引き継ぐ坏Cである。

ここでその発生にかかるプロセスを考えるとすれば、桜岡氏がすでに指摘している(桜岡1989)が、群馬県の平野部に広く分布する暗文土器とのかかわりである。この暗文土器は、群馬県内にあっても集落内の食膳具として、決して主体となるような製品ではないが、およそ8世紀中葉以降から9世紀にかけて認めることができる。

この土器は、2～3mmおきに底部内面の腰から口縁部に向かって、跳ね上げたような放射状の暗文と、底部内面に十字の刻みを施文することを特徴としている。

土師器坏Aとこの暗文土器は、形態的に近似する点もあるが、体部外面を横・斜め方向に削り、器面の調整を行ったり、比較的硬質に焼き上げていることなど、坏Aと直接的な技術的母胎とはならないようである。

しかしこの暗文土器が、比較的多く消費された前橋市鳥羽遺跡・藤岡市寺前遺跡・児玉町古井戸・将監塚遺跡などで、出現期の坏Aの出土量が多いことは、両者の有機的なつながりを予測させる。

一方、この萌芽的な坏Aは、分散的にしかも固有の遺跡へ比較的多量に供給されていた。その供給の枠(地域)は、その後多少は伸縮するが、一定していたと考えられる。

第Ⅲ期

坏Aは第Ⅲ期になると、体部にユビオサエを施し、緩いS字状とし、口縁部を内弯させる典型的な坏Aへと変化した。また体部の外傾化は、底径をやや縮小させた。

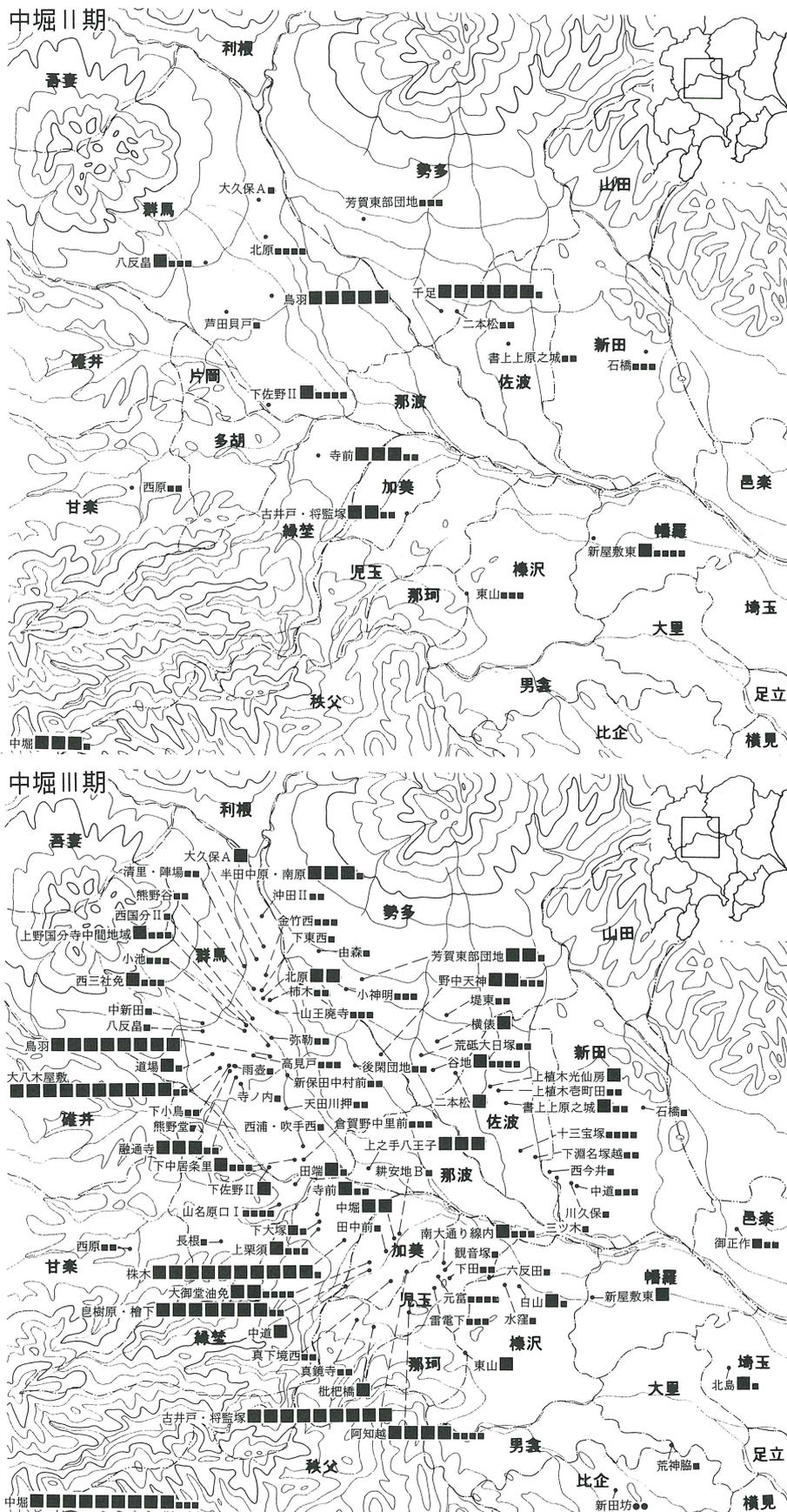
底部のヘラケズリは、全面、周辺のみ、施さないなど様々存在した。体部下半に斜めヘラケズリを施す製品がまま見られる。前の暗文土器とも形態が類似する。

そして坏Aは、上野国南部や武蔵国北部の各集落に急速に浸透し、土師器の食膳具の8割程度を占めるようになる。

とくに関東山地よりの丘陵地帯に展開した、末野・児玉・藤岡・吉井・乗附・秋間などの大規模窯跡群を西の背とする平野部の遺跡で、大量の坏Aが消費されたのである。

ことにこれらの窯跡群に近い前橋市鳥羽・高崎市大八木屋敷・融通寺・藤岡市株木・玉村町上之手八王子・神川町皂樹原・檜下・児玉町古井戸・将監塚・阿知越遺跡や中堀遺跡では、窯跡群に近接するにもかかわらず、須恵器の消費量を凌ぐ土師器の消費量がみら

第865図 土師器坏Aの出土遺跡（1）



れる。

これらの遺跡は、白川→烏川→利根川と続く流域にまとまり、令制下の上野国群馬・緑埜・那波・武蔵国加美・児玉の各郡に所在していた。ただしこの地域で高崎市雨壺や熊野堂・下佐野Ⅰ・Ⅱ・田端遺跡などは、それほど多くの坏Aの消費はみられず、逆に須恵器が食膳具の主体を占める。

このことは、雨壺以下の遺跡の性格（寺院・川津・駅など交通の要所や開発の拠点）と、消費される食膳具の指向が異なるためであろうか。

一方、古利根川（広瀬川）より東側の赤城山南麓地域（勢多・佐波・新田郡）でも、前述の遺跡などに比較すれば少ないが、各遺跡で坏Aが、等質に消費されていた。

武蔵国側の児玉・榛沢・幡羅郡などに分布する各遺跡も、似たような消費量である。両地域は、第III期には、土師器を主体としつつ、食膳具に占める須恵器の消費量が、相対的に高いという特色がある。

第Ⅳ期

坏Aの形態は、底径の縮小化に伴い、さらに開き気味となるが、一様ではない。底部のヘラケズリも第Ⅲ期と同様多様である。体部にヘラケズリを施す製品は、ほとんど姿を消す。

その一方で、やや深めの碗形に近い坏Aも出現し、その体部下端には、ヘラケズリが施される。坏Bの萌芽的な製品かもしれない。

集落内の食膳具に占める須恵器と坏Aの割合は、第Ⅲ期とそれほど差はない。

依然、白川→烏川→利根川と続く流域の遺跡で坏Aは、大量に消費された。とくに第Ⅲ期に須恵器を食膳具の主体としていた下佐野Ⅱ遺跡でも、比較的消費量が増加している。

藤岡市寺前・株木遺跡や上里町の中堀遺跡をはじめとする耕安地・大御堂油免・皂樹原・檜下・古井戸・将監塚遺跡など、神流川を挟んだ兩岸の遺跡で、大量に消費されていたようである。

また榛名山東麓の大久保A遺跡や半田中原遺跡、赤城山南麓の芳賀東部団地遺跡なども、比較的多く坏Aがみられる。

さらに武蔵国では、利根川へ注ぎ込む南岸の児玉・那珂・榛沢・幡羅郡など、河川によって形成された自然堤防上の遺跡に一定量の供給がみられ、大宮台地まで徐々に出土量を減らしながら続いていく。

注目すべきは、上植木光仙房遺跡や書上上原之城遺跡など、佐波郡内の遺跡で急速に消費量が、増加したことである。このことは、この地域の古代的な開発が、絶頂に達したことで、決して無関係ではあるまい。

第Ⅴ期

坏Aは、さらに底径が縮小化し、体部の傾きがきつくなる。底部のヘラケズリは、周辺部のみや削らない製品の割合が高くなる。皿型の土師器はみられない。

器肉が厚く、「ハ」の字状に開く坏Bが、各遺跡にみられるようになる。体部下端や底部を丁寧にヘラケズリし、やや深めの碗形に近い器形を創出する。坏B

の出現期といてよい。

分布の傾向は、第Ⅳ期にみられた遺跡で、第Ⅴ期の製品が確認できる。しかし坏Aの消費量は激減し、第Ⅳ期のおよそ半数となってしまふ。ただし坏Bが、この消費の低下を補完したのではなかった。食膳具全体の消費比率からすると、むしろ須恵器が緩やかに各集落へ浸透したのである。

その中で、神流川の兩岸の上野国緑埜郡・武蔵国加美郡の遺跡だけが、独り大量の坏Aを消費していたのである。それは、中堀遺跡をはじめとする皂樹原・檜下遺跡・古井戸・将監塚遺跡・株木遺跡である。

とくに中堀遺跡では、坏A全体の半数が、この段階に集中して消費されていた。大量の土師器が、集中して出土したことから、土器が保管されていたと推定した第4号掘立柱建物跡は、まさにこの段階にあたる。また皂樹原・檜下遺跡・古井戸・将監塚遺跡が、この段階階をもって、集落が消滅したのも象徴的である。

一方、高崎市舞台B遺跡や融通寺遺跡、前橋市上野国分寺中間地域遺跡・鳥羽遺跡、藤岡市株木遺跡・太田市小町田遺跡、そして中堀遺跡などで、出現期の坏Bが消費されていた。坏Bの出現も坏Aの出現と同様、散在的でその後の分布域を示唆する。

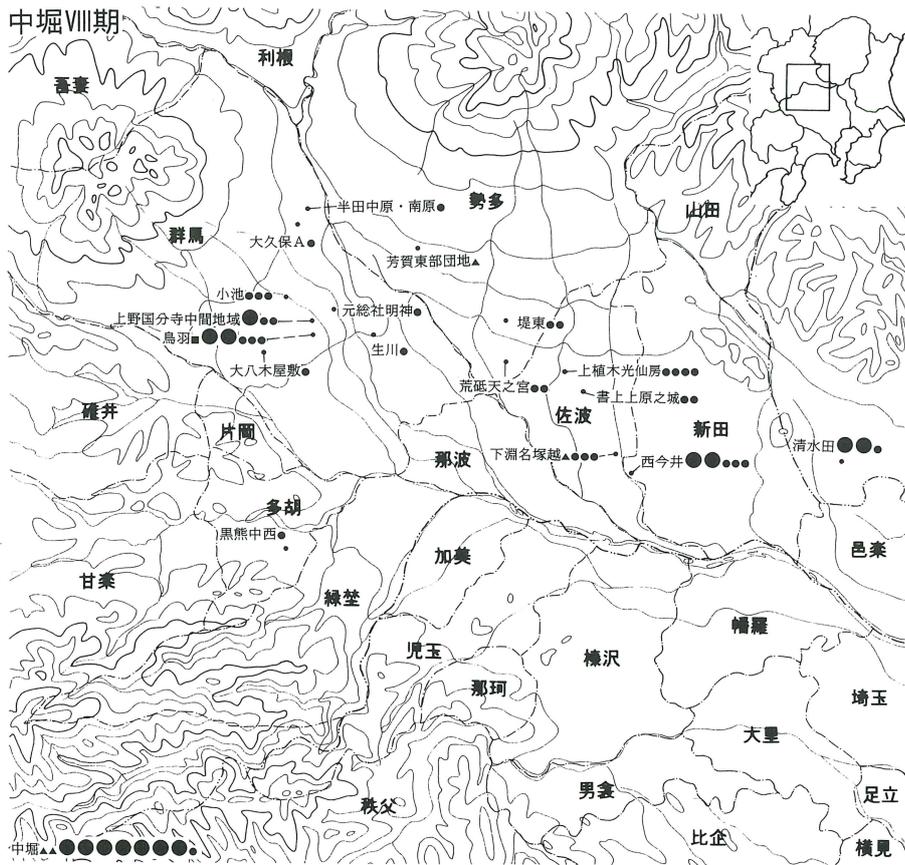
岡部町六反田遺跡や太田市清水田遺跡など、坏Aの分布域では東側の地域で、坏Bが積極的に消費され、第Ⅵ期に急速に消費が伸びることと一致しよう。

坏Bは、形態的に須恵器の無台の碗を意識したらしい。ただしその成形上の技法や器肉の厚みは、個体差が激しく、個々の法量や形態も個体差が激しい。これは製品に対して、坏Aほど等質化が望まれなかったことと、坏Aほど需要が高くなかったためであろう。

第Ⅵ期

坏Aは小形化し、ヘラケズリも緩慢となる。なによりも器肉が厚くなり、個体差が激しくなる。一方、坏Bは、急速に作りが粗雑化し、粘土ひもを二から三段巻き上げた痕跡や、底部の成形台から底部を離脱させるために置かれた離れ砂を残した製品もある。器肉の

第868図 土師器坏Aの出土遺跡（4）



外面のヘラケズリも、それほどみられなくなる。黒色処理もまみられる。

消費量は、さらに激減する。中堀遺跡を除いては、全て上野国の遺跡であるが、前段階の西今井遺跡や清水田遺跡、あるいは、国府周辺の鳥羽・上野国分寺中間地域遺跡などにやや豊富であるが、鳥川→利根川以北のわずかな遺跡で消費されただけである。

坏Bを消費する遺跡であっても、やはり須恵器生産の解体、「里の須恵器」の消費の拡大は、この段階をもって土師器の

跡・境町西今井遺跡・太田市清水田遺跡・熊谷市北島遺跡・藤岡市株木遺跡、そして中堀遺跡などは、周辺の遺跡が、急速に収束していく中において、この後も成長を遂げる遺跡であった。

また上野国府に近い鳥羽・上野国分寺中間地域・群馬町北原遺跡などでも、坏Bの豊富な消費がみられる。国府やその周辺地域で9・10世紀に土師器が豊富に使用されていたことは、上野・下野・武蔵・相模・甲斐・伊豆などで確認できる。

土師器の生産は、須恵器と異なり、消費地に直結した場で生産されていたことも推定でき、これらの国は、国内に土師器を主体とした地域を含み、そこから雑徭として上番した土師器生産者が、国府近隣で土師器の生産にあたった可能性は、十分予測できる。

第Ⅷ期

坏Bは、さらに底径を減少させ、また小形化する。

食膳具を完全に駆逐した。

以上、坏Aと坏Bについて、変化の方向性と分布の特色について概観した。まとめると9・10世紀の土師器の食膳具は、供給される遺跡の特色によって、消費量が大きく異なっていたことがわかった。

平安時代前期にあって、少なくとも土師器の生産は、製作者が独自で、消費量を見込み生産し、受注に応じて発給し、市などで個々に売買される段階にまでは、到達していなかったと考えられる。

食膳具の大半を土師器で賄う、前に挙げた地域の土師器の食膳具は、このように7世紀以来の伝統を9・10世紀まで引くということは、土師器の生産と供給のシステムに、大きな相違のなかったことを暗示してくれる。

それは、律令国家の負担体系が、確立化していく8世紀にあって、様々な手工業製品も調庸の形で税とし

て位置づけられた。しかし尾張・美濃・播磨国等を除いて窯業製品が、国家の収奪の対象外に置かれたこと。また国府等が、器杖等を整えておく令の規定はあるが、国府などで雑徭や正税を使用して窯業生産にあたった例などではなかった。

むしろ須恵器の生産を含め、土器の生産が、古墳時代に見られるように在地の首長への奉仕であって、より古代的な生産体制を脱却し得なかったところに、いわゆる土師器の終焉が訪れた意義を見出したい。

(4) 煮炊具

中堀遺跡は8世紀後葉～10世紀末までの200年間にわたって営まれた遺跡である。

この200年間に中堀遺跡で使用されていた煮炊具は大きく分けて二つある。

一つは土師器甕A・B(武蔵型甕)で、これはI期から10世紀前半(VII期)まで主に使用されていた煮炊具である。

もう一つは須恵器技法により生産された羽釜(吉井型羽釜)で、10世紀初頭に出現し、VII期(10世紀前半)には普及して、集落の終焉(IX期)まで煮炊具の主体となるものである。

この両者については、土師器と須恵器ということや、後に詳述するように分布範囲も異なることから、合わせて論じられることはあまりなかった。

特に埼玉県内では、武蔵型甕以降の煮炊具について分かる遺跡が少なく、両者の関係については不明な点が多かった。

今回、中堀遺跡から当該時期の大規模な集落が検出され、良好な資料が得られた。そこで、ここでは9世紀～10世紀代の武蔵型甕と羽釜を中心に、その分布傾向から、生産・流通など基本的な事柄について考察を加えてみたい。

1 土師器甕

中堀遺跡から出土した土師器甕は、そのほとんどがいわゆる『武蔵型甕』である。武蔵型甕については、その分布範囲から武蔵という地域限定が適当ではないという指摘もある。しかし、混乱を避けるためここでは武蔵型甕という呼称を使用する。

1980年代以降、関東地方の古代の土器については研究が盛んに行われており、武蔵型甕についても、その特徴が様々な方々により指摘されている。その特徴を要約してみると、

- ①胴部上位には斜め方向の、中位以下は縦方向のヘラケズリを施し、胴部を究極にまで薄くつくる。
- ②胴部内面に明瞭な接合痕跡がみられる。

③耐火度の高い粘土を使用している。

④北武蔵・上野南部を中心に、広範囲に分布する。などで、安定的で画一的な製作技法が存在していたことがうかがえるのである。

しかし、これらの特徴は完成された武蔵型甕のもので、その初現形態と時期については不明な部分も残っている。

武蔵型甕に直接的に結び付く甕については、8世紀中葉に求める長谷川厚(1996)の意見と、7世紀中葉遅くとも、7世紀末～8世紀初頭とする茂木由行(1984)の論がある。

中堀遺跡は時期的に、武蔵型甕の出現段階に該当する資料がなく、具体的な検証はできないが、北武蔵では、胴部上位に斜め方向、中位以下に縦方向のヘラケズリを施す長胴甕が7世紀後葉には出現している。

このことと、8世紀中葉以降の武蔵型甕の分布密度とを合わせて考えると、北武蔵から上野南部にかけての地域では、この時期に武蔵型甕の出現を想定できるのではないであろうか。

長谷川氏も武蔵型甕の出現は北武蔵の方が、南武蔵よりも若干古くなる可能性を指摘している。

いずれにしても、8世紀中葉～後葉以降には、先述のような特徴をもった武蔵型甕が安定的に生産され、流通していたのである。その分布範囲は広大で、近年の研究によれば、関東地方全域、長野、新潟まで及ぶとされる(桜岡1997)。

中堀遺跡は、武蔵型甕が急速に普及して行く時期に集落が造営され始め、中堀II期以降急激に集落が膨張する。

そこで、関東甲信地方における、中堀II期以降の武蔵型甕の分布と出土量を検討し、生産と流通の問題について考えてみたい。

また、武蔵型甕消滅後の土師器煮炊具についても合わせて検討する。

なお、本報告書では武蔵型甕を口縁部形状からAとBに分類している(第V章-1-(2)参照)。分布

図では、この土師器甕Aを●で、土師器甕Bを★で表している。

また、▲としたものは、胴部整形ヘラケズリの方向が、土師器甕A・B（武蔵型甕）と変わらないが、器肉の厚いことを特徴とする甕である。

▲の甕は、口縁部の形状からは土師器甕AまたはBに分類できるのであるが、器形や口縁部形状に統一性がみられない。

同時期の土師器甕A・Bも厚くなる傾向はあるが、▲の甕はそれよりも厚い。また色調も白っぽく、胎土も異なるようである。

武蔵型甕の最大の特徴が、熱効率を高めるために、究極まで胴部を薄く仕上げることであることを考えると、武蔵型甕の系譜に繋がるこの甕が、この特徴を放

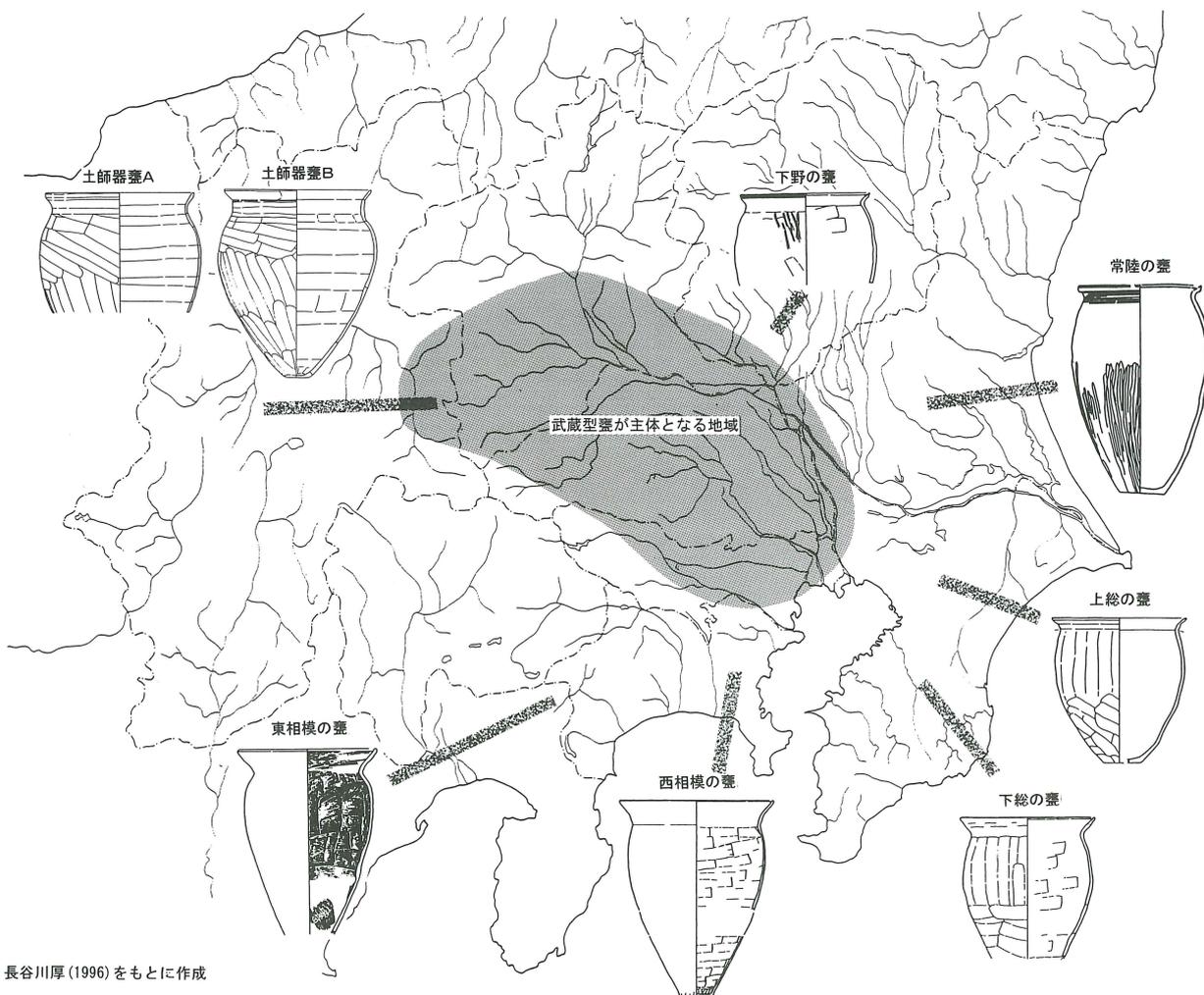
棄して行くことには意味があると考え、分布図を作成した。

そのほか◎で表した系列外の甕は、土師器甕A・Bとの系譜関係が追えない土師器甕や、相模型甕や常総型甕などのように、各地域を代表する煮炊具の系譜上に乗らない甕である。

武蔵型甕をはじめとして、相模型・常総型・下野型などの地域名を冠する甕は（第869図）、国府や国分寺が整った、8世紀中葉以降に普及する。そして、律令体制の崩壊とともに、10世紀前葉には、時期を同じくして姿を消していくのである（相模型甕は、もう少し遅くまで残る可能性がある）。

これらの甕は、律令体制というある一定の規範の中で生産されていたと思われる。従って、これらの甕が

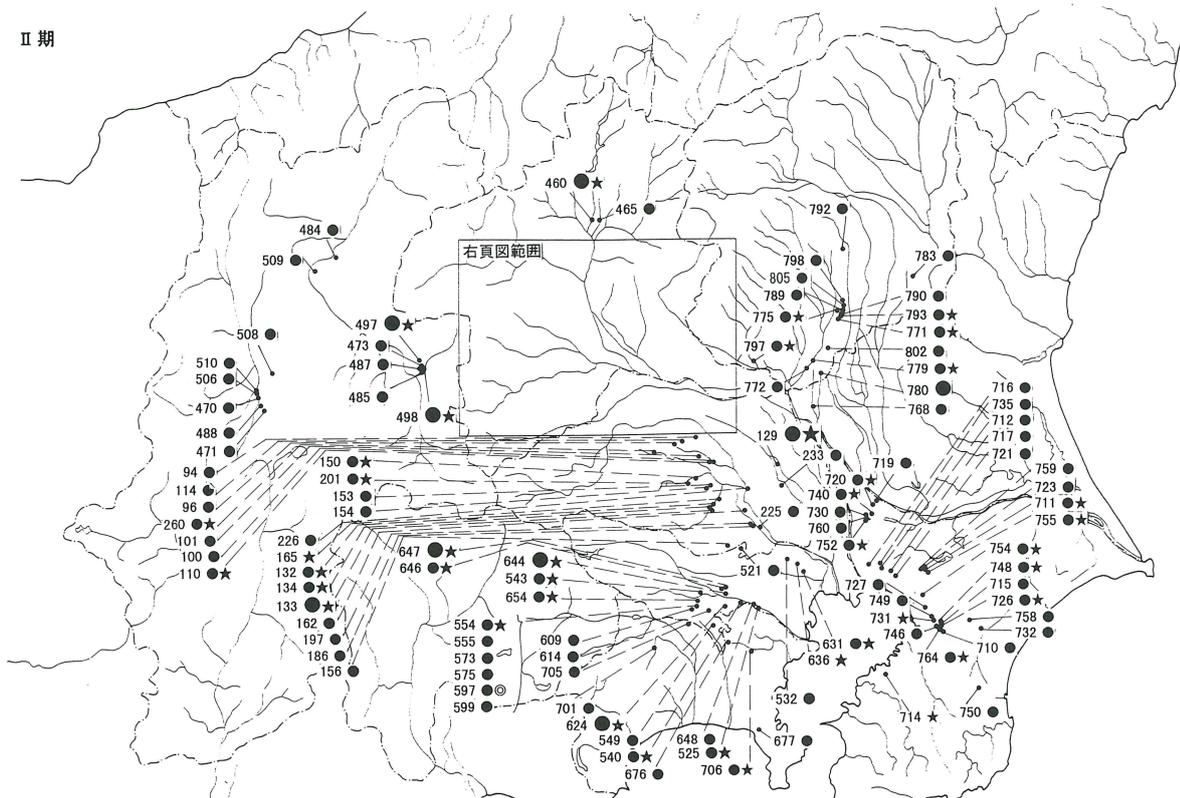
第869図 武蔵型甕周辺の土師器甕



長谷川厚(1996)をもとに作成

第870図 関東甲信地方土師器甕分布図(1)

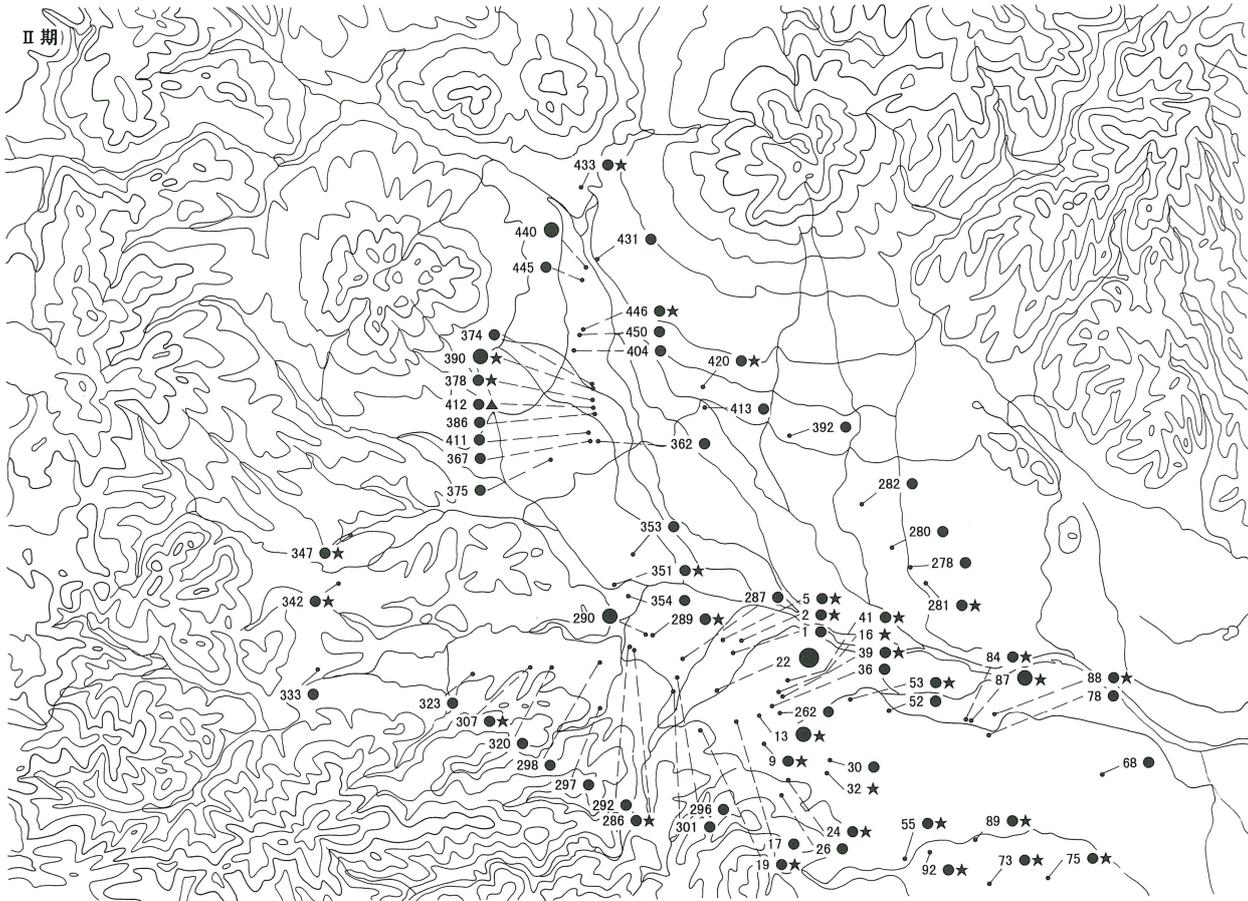
II期



土師器甕A 1~10個 ●	土師器甕B 1~10個 ★	厚い土師器甕 1~10個 ▲	系列外の甕 1~10個 ◎
11~30 ●	11~30 ★	11~30 ▲	11~30 ◎
31~50 ●	31~50 ★	31~50 ▲	31~50 ◎
51~ ●	51~ ★	51~ ▲	51~ ◎

- | | | | | |
|--------------|---------------|-------------------------|-------------------------|-------------|
| 1 中堀 | 150 塚の越 | 374 下東西 | 549 川島谷 | 740 西深井一ノ割 |
| 2 耕安地 | 153 若葉台B地点 | 375 熊野堂 | 554 多摩ニュータウン No.107~109 | 746 大道 |
| 5 若宮台 | 154 仲道柴山 | 378 国分境 | 555 多摩ニュータウン No.125 | 748 谷津 |
| 9 阿知越 | 156 東の上 | 386 鳥羽 | 573 多摩ニュータウン No.271・452 | 749 地藏山 |
| 13 将監塚・古井戸 I | 162 滝 | 390 北原 | 575 多摩ニュータウン No.3 | 750 中原 |
| 16 雷電下 | 165 五畑東 | 392 荒子小学校校庭 | 597 多摩ニュータウン No.512 | 752 町畑 |
| 17 真下境西 | 186 栗谷ツ | 404 清里・陣場 | 599 多摩ニュータウン No.519 | 755 白幡前 |
| 19 中道 | 197 本目 | 411 大八木屋敷 | 614 多摩ニュータウン No.769 | 758 芳賀輪 |
| 22 巨樹原・檜下 | 201 伴六 | 412 上野国分寺尼寺中間地域 | 624 登台 | 759 北海道 |
| 24 原 | 225 田子山 | 413 中鶴谷 | 631 田端不動坂 | 760 北谷津第II |
| 26 広木上宿 | 226 稲荷台 | 420 芳賀東部団地 | 636 南橋 | 764 有吉 |
| 32 北坂 | 233 A-137号 | 431 分郷八崎 | 644 武蔵国府周辺 | 768 北新田A |
| 36 今井遺跡群 | 260 大都 | 433 白井二位屋 | 646 武蔵国分尼寺 | 771 猿山 |
| 39 大久保山 | 262 東牧西分 | 440 中村 | 647 武蔵台 | 772 乙女不動原 |
| 41 南大通り線内 | 278 三ツ木 | 445 有馬条里 | 648 弁財天池 | 775 郭内 |
| 52 白山 | 280 十三宝塚 | 446 金竹西 | 654 落川 | 779 宮内東 |
| 53 六反田 | 281 西今井 | 450 大久保A | 676 愛地だいやま | 780 金山IV区 |
| 55 台耕地 | 282 書上上原之城 | 460 戸神諏訪 | 677 沼間三丁目 | 783 向北原南 |
| 68 天神 | 286 下大塚 | 465 奈良原 | 701 馬場 | 789 上三川高校地内 |
| 73 岩比田 | 287 株木 | 470 下神 | 705 矢掛・久保 | 790 上芝 |
| 75 荒神脇 | 289 上栗須 | 471 吉田川西 | 706 藪根 | 792 前田 |
| 78 宮ヶ谷戸 | 290 上栗須寺前 | 473 栗毛坂(B) | 710 ムコアラク | 793 谷館野東 |
| 84 森下 | 296 藤岡東部地区遺跡群 | 484 松原 | 712 印内台 | 797 馬門南 |
| 87 矢島南 | 297 藤岡平地区遺跡群 | 485 上久保田向 I・II・V・VI・VII | 714 永吉台 | 798 薄市 |
| 88 柳町 | 298 白石根岸 | 487 上聖端 | 715 榎作 | 802 溜ノ台 |
| 89 鹿島平方裏 | 301 本郷山根 | 488 神戸 | 716 下総国分寺 | 805 多功南原 |
| 92 竹之花 | 307 神保富士塚 | 497 前田 | 717 夏見台 | |
| 94 大沼 | 320 矢田 | 498 曾根新城 I・II・III・IV・VI | 719 花前 | |
| 96 越祢 | 323 西原 | 506 南栗 | 720 館林 | |
| 100 西浦 | 333 南蛇井増光寺 | 508 二反田・岡田 | 721 宮本台 | |
| 101 下寺前 | 342 松井田工業団地 | 509 馬口II | 723 権現後 | |
| 110 中原 | 347 嶺・下原 | 510 北栗 | 726 高沢 | |
| 114 芳沼入 | 351 下佐野 | 521 下宿内山 | 727 高品第2 | |
| 129 荒川附 | 353 下大類蟹沢 | 525 喜多見陣屋 | 730 三輪野山第III | |
| 132 宮ノ越 | 354 山名原口 I | 532 四葉 | 731 山ノ神 | |
| 133 小山ノ上 | 362 中尾 | 540 上布田 | 732 山田水呑 | |
| 134 城ノ越 | 367 八幡 | 543 神明上 | 735 小金線 | |

第871図 土師器甕分布拡大図(1)



消滅していくということは、煮炊具の生産体制が大きく変容したことの表れであると考えられる。

そこで、このような各地域名を冠する甕からの系譜が追えない系列外の甕を抽出することにより、その様相を捉えようとしたものである。

◆で表したのは、土釜と呼ばれる煮炊具である。近年の研究により、上野を中心に分布するもので、11世紀代に煮炊具の一翼を担う土器であることが分かっている。中堀遺跡では出土していないが、武蔵型甕・羽釜に次ぐ煮炊具として取り上げた。

中堀Ⅱ期(第870・871図)

この時期にすでに、土師器甕A・Bは広範囲な分布を見せ、東は房総半島中部、西は長野県松本平まで広がっている。

土師器甕Aが主体で、わずかにBがみられる。両者の分布範囲に大きな違いはみられない。

分布図を一見すると、関東甲信地方に、まんべんなく分布しているようだが、相模にはほとんど分布がみられない。

また、武蔵では大宮台地には極めて分布が薄く、南武蔵でも御殿前遺跡周辺と多摩川中流域に分布が偏る傾向がみられる。

下野では、国府周辺に分布のまとまりがみられ、房総半島でも上総・下総とも東京湾沿岸に分布が集中する。

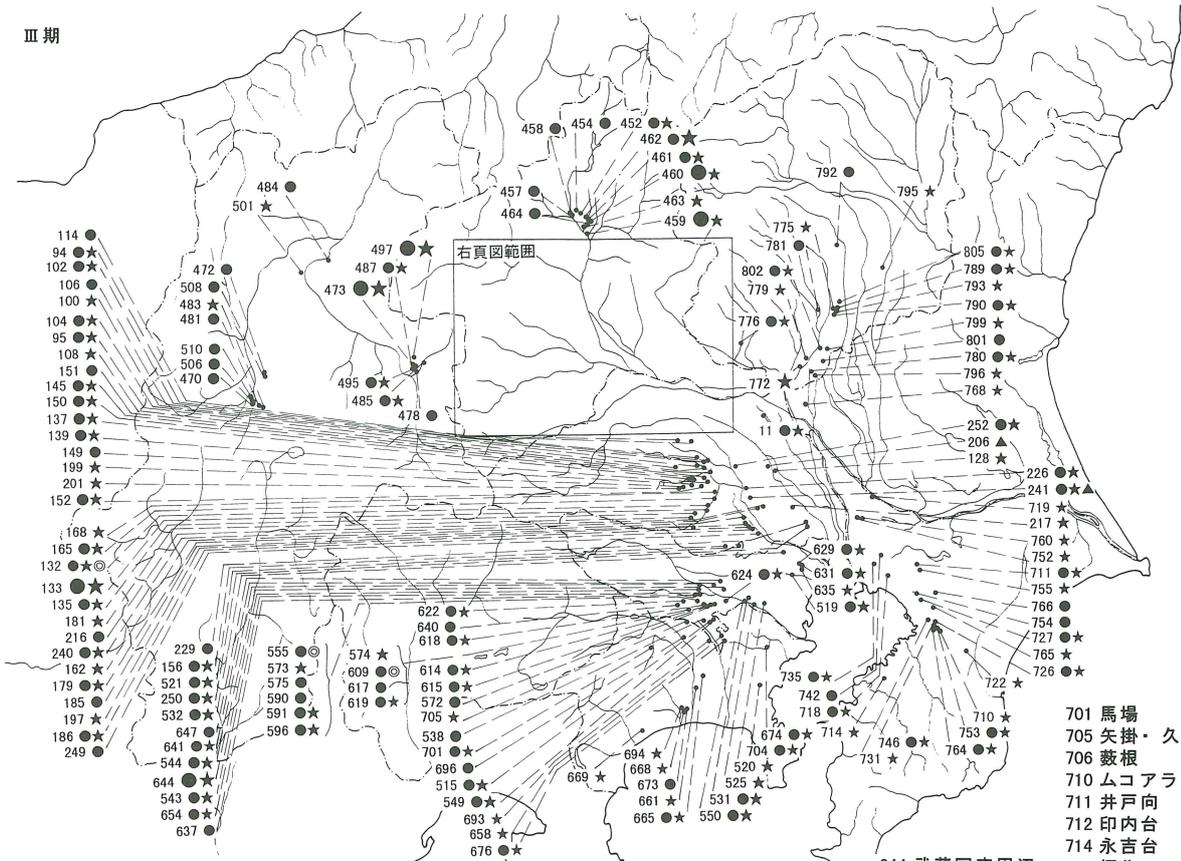
8世紀の様相が不明であるため一概に言えないが、上野での分布が意外と少ないようで、国府周辺、藤岡市周辺にややまとまりがみられるが、高崎市南部などには空白域がみられる。

中堀Ⅲ期(第872・873図)

分布する範囲にはⅡ期から大きな変化はみられないが、出土遺跡・出土量は急激に増加する。

第872図 関東甲信地方土師器甕分布図(2)

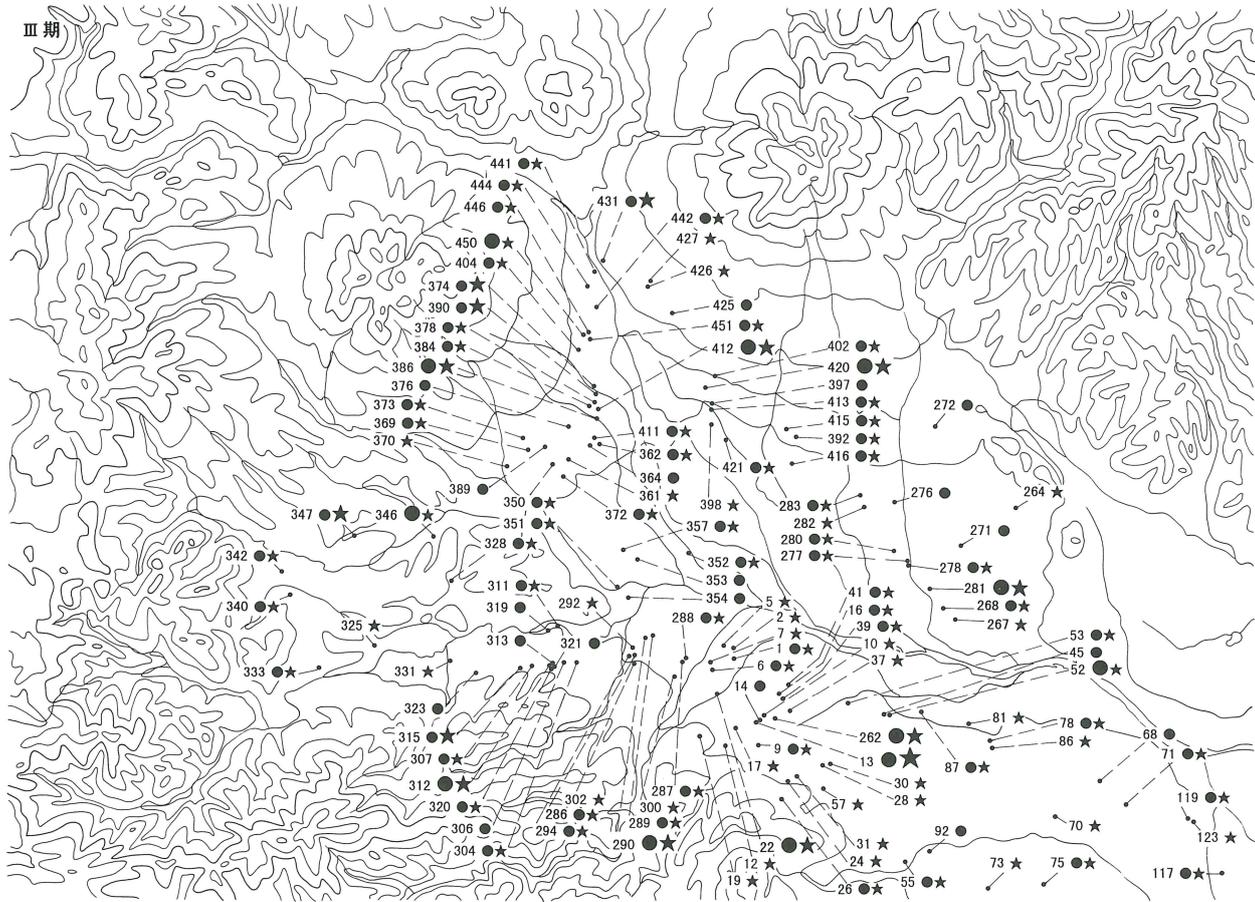
Ⅲ期



土師器甕A 1~10個	●	土師器甕B 1~10個	●	厚い土師器甕 1~10個	★	系列外の甕 1~10個	▲	◎	644 武蔵国府周辺
11~30	●	11~30	●	11~30	★	11~30	▲	◎	646 武蔵国分尼寺
31~50	●	31~50	●	31~50	★	31~50	▲	◎	647 武蔵台
51~	●	51~	●	51~	★	51~	▲	◎	648 弁財天池
								◎	654 落川
								◎	676 受地だいやま
								◎	677 沼間三丁目

- | | | | | |
|--------------|---------------|-----------------|-------------------------|-------------|
| 1 中堀 | 110 中原 | 297 藤岡平地区遺跡群 | 470 下神 | 701 馬場 |
| 2 耕安地 | 114 芳沼入 | 298 白石根岸 | 471 吉田川西 | 705 矢掛・久保 |
| 5 若宮台 | 129 荒川附 | 301 本郷山根 | 473 栗毛坂(B) | 706 藪根 |
| 9 阿知越 | 132 宮ノ越 | 307 神保富士塚 | 484 松原 | 710 ムコアラク |
| 13 将監塚・古井戸 I | 133 小山ノ上 | 320 矢田 | 485 上久保田向 I・II・V・VI・VII | 711 井戸向 |
| 16 雷電下 | 134 城ノ越 | 323 西原 | 487 上聖端 | 712 印内台 |
| 17 真下境西 | 150 塚の越 | 333 南蛇井増光寺 | 488 神戸 | 714 永吉台 |
| 19 中道 | 153 若葉台 B 地点 | 342 松井田工業団地 | 497 前田 | 715 覆作 |
| 22 白樹原・檜下 | 154 仲道柴山 | 347 嶺・下原 | 498 曾根新城 I・II・III・IV・VI | 716 下総国分寺 |
| 24 原 | 156 東の上 | 351 下佐野 | 506 南栗 | 717 夏見台 |
| 26 広木上宿 | 162 滝 | 353 下大類蟹沢 | 508 二反田・岡田 | 719 花前 |
| 30 東山B | 165 五畑東 | 354 山名原口 I | 509 馬口 II | 720 館林 |
| 32 北坂 | 170 天王第5 | 362 中尾 | 510 北栗 | 721 宮本台 |
| 36 今井遺跡群 | 186 栗谷ツ | 367 八幡 | 521 下宿内山 | 723 権現後 |
| 39 大久保山 | 197 本目 | 374 下東西 | 525 喜多見陣屋 | 726 高沢 |
| 41 南大通り線内 | 201 伴六 | 375 熊野堂 | 532 四葉 | 727 高品第2 |
| 42 北廓 | 225 田子山 | 378 国分境 | 540 上布田 | 730 三輪野山第Ⅲ |
| 52 白山 | 226 稲荷台 | 386 鳥羽 | 543 神明上 | 731 山ノ神 |
| 53 六反田 | 233 A-137号 | 390 北原 | 549 川島谷 | 732 山田水呑 |
| 55 台耕地 | 260 大都 | 392 荒子小学校校庭 | 554 多摩ニュータウン No.107~109 | 735 小金線 |
| 68 天神 | 262 東牧西分 | 404 清里・陣場 | 555 多摩ニュータウン No.125 | 740 西深井一ノ割 |
| 73 岩比田 | 268 小角田前 | 411 大八木屋敷 | 573 多摩ニュータウン No.271-452 | 746 大道 |
| 75 荒神脇 | 277 下淵名塚越 | 412 上野国分寺尼寺中間地域 | 575 多摩ニュータウン No.3 | 748 谷津 |
| 78 宮ヶ谷戸 | 278 三ツ木 | 413 中鶴谷 | 597 多摩ニュータウン No.512 | 749 地藏山 |
| 84 森下 | 280 十三宝塚 | 420 芳賀東部団地 | 599 多摩ニュータウン No.519 | 750 中原 |
| 87 矢島南 | 281 西今井 | 431 分郷八崎 | 609 多摩ニュータウン No.72-795 | 752 町畑 |
| 88 柳町 | 282 書上上原之城 | 433 白井二位屋 | 614 多摩ニュータウン No.769 | 754 定原 |
| 89 鹿島平方裏 | 286 下大塚 | 440 中村 | 618 多摩ニュータウン No.855 | 755 白幡前 |
| 92 竹之花 | 287 株木 | 445 有馬条里 | 622 打越中谷戸 | 758 芳賀輪 |
| 94 大沼 | 289 上栗須 | 446 金竹西 | 624 堅台 | 759 北海道 |
| 96 越祢 | 290 上栗須寺前 | 450 大久保A | 631 田端不動坂 | 760 北谷津第Ⅱ |
| 100 西浦 | 292 滝前 | 460 戸神諏訪 | 636 南橋 | 764 有吉 |
| 101 下寺前 | 296 藤岡東部地区遺跡群 | 465 奈良原 | 640 南八王子地区遺跡群 | 768 北新田A |
| | | | | 771 猿山 |
| | | | | 772 乙女不動原 |
| | | | | 775 郭内 |
| | | | | 779 宮内東 |
| | | | | 780 金山Ⅳ区 |
| | | | | 783 向北原南 |
| | | | | 789 上三川高校地内 |
| | | | | 790 上芝 |
| | | | | 792 前田 |
| | | | | 793 谷館野東 |
| | | | | 797 馬門南 |
| | | | | 798 薄市 |
| | | | | 802 溜ノ台 |
| | | | | 805 多功南原 |

第873図 土師器甕分布拡大図(2)



全体的な特徴として、武蔵・上野の両国の出土量が他地域のそれを大きく上回り、分布の中心である様子が明瞭となる。

北武蔵・上野では、II期に出土の少なかった、大宮台地・東毛地域・鐮川流域・高崎市南部にもまとまった出土状況がみられるようになり、煮炊具すべてが土師器甕A・Bといえる状態である。

多摩川流域を中心とする南武蔵では、在地色の強い系列外の甕○が少量分布する。

信濃での分布範囲はII期とあまり変化はみられないが、松本平では、他の地域と比較して土師器甕Aの比率が高い。

佐久地方は出土量も多く、上野同様に、煮炊具の主体となっている。

相模でもこの時期から国府周辺で出土がみられるようになるが、出土量は少なく煮炊具の主体とはなっ

ていない。

房総半島・下野では、II期と大きな変化はみられない。

土師器甕の形態でみると、II期に比べて、Bの出土量が増加し、A・Bがほぼ半々となる。

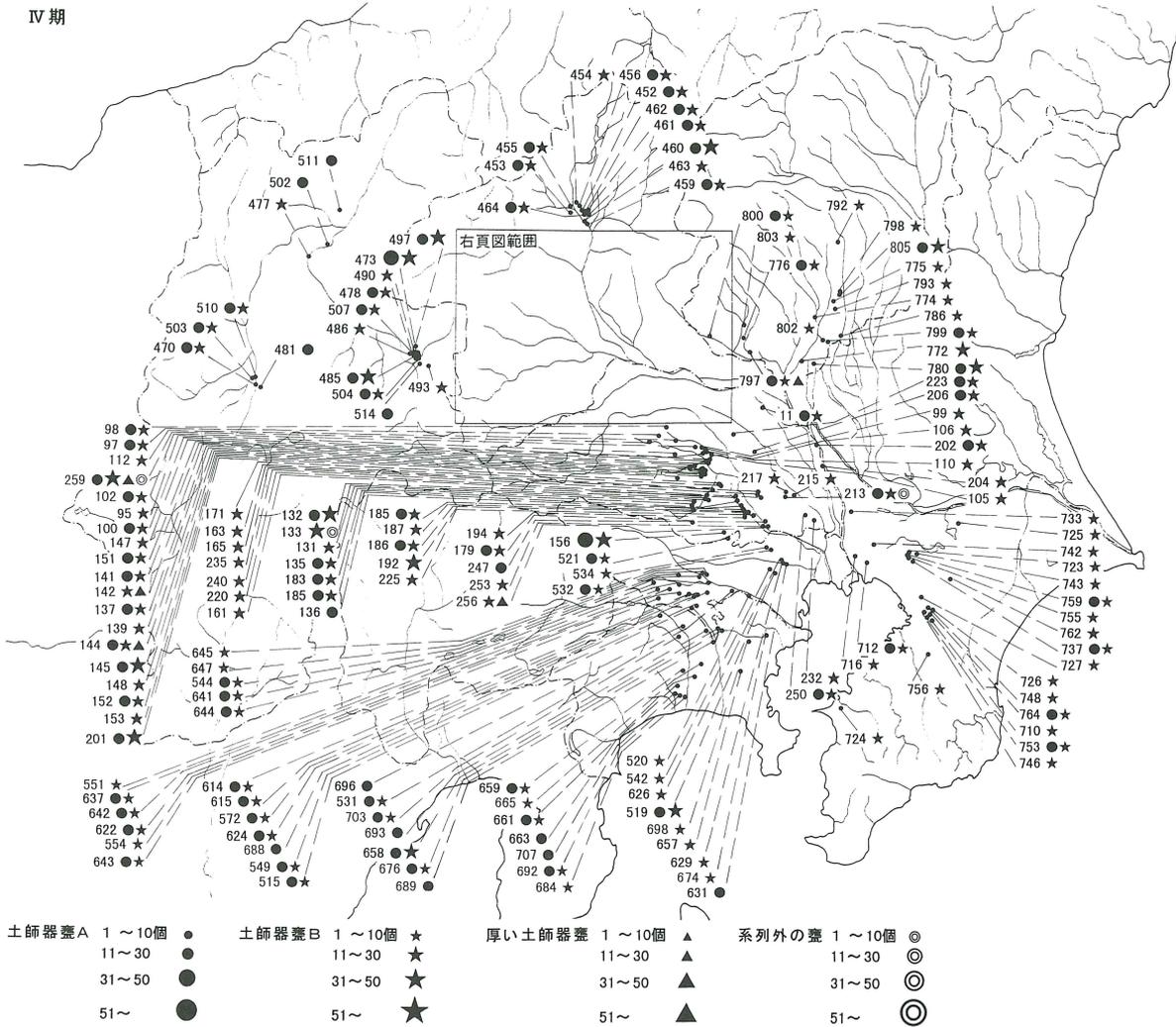
また、両者の分布範囲は大きく異なることはなく、ほぼ同じ分布域を形成している。

武蔵型甕(土師器甕A・B)は、製作技法が画一化されており、出土量の多い北武蔵・上野を中心とする地域から、供給されていたような印象を受けるが、その分布範囲は広大であり、一元的な供給関係は考えにくい。

実際に各地の資料を実見しても、胎土は一様ではなく、意外と小さな範囲ごとに生産されていたと考えられる(たとえば武蔵ならば、北武蔵・中武蔵・南武蔵)。このように様々な地域で生産されていたにもかかわらず

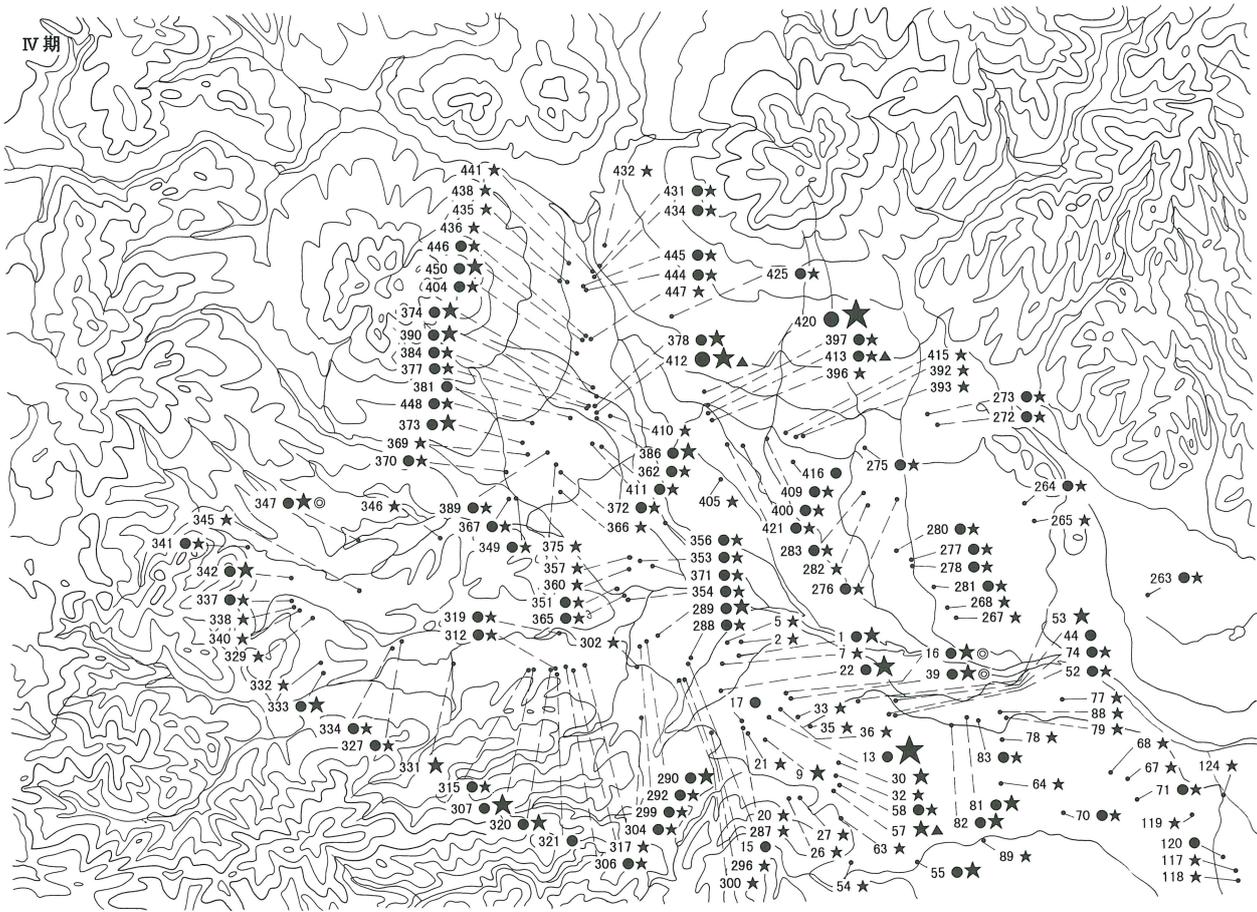
第874図 関東甲信地方土師器甕分布図（3）

IV期



- | | | | | | |
|-------------|----------|-------------|-------------|---------------|-------------|
| 1 中堀 | 67 中島 | 133 小山ノ上 | 206 大山 | 287 株木 | 346 西殿 |
| 2 耕安地 | 68 天神 | 135 西久保 | 213 松木北 | 288 株木B | 347 嶺・下原 |
| 5 若宮台 | 70 樋の上 | 136 八木北 | 217 大間木内谷 | 289 上栗須 | 349 引間 |
| 7 大御堂油免 | 71 北島 | 137 稲荷前(A区) | 215 大古里 | 290 上栗須寺前 | 351 下佐野 |
| 9 阿知越 | 74 熊野 | 139 宮町I | 220 白鍬宮腰 | 292 滝前 | 353 下大類蟹沢 |
| 11 水深 | 77 弥藤吾新田 | 141 駒方 | 223 新屋敷(A区) | 296 藤岡東部地区遺跡群 | 354 山名原口I |
| 13 将監塚・古井戸I | 78 宮ヶ谷戸 | 142 桑原 | 225 田子山 | 299 平塚台 | 356 新保田中村前 |
| 15 枇杷橋 | 79 居立 | 144 御門 | 232 蜻蛉 | 300 堀ノ内遺跡群 | 357 西浦・吹手西 |
| 16 雷電下 | 81 上敷免 | 145 山田 | 235 水判土堀の内 | 302 緑埜地区遺跡群 | 360 村西 |
| 17 真下境西 | 82 城西 | 147 勝呂麁寺 | 240 根切 | 304 黒熊栗崎 | 362 中尾 |
| 20 八荒神南 | 83 新屋敷東 | 148 千代田 | 247 榎戸 | 306 黒熊中西 | 365 田端 |
| 21 反り町 | 88 柳町 | 151 附島 | 250 三ツ和 | 307 神保富士塚 | 366 道場遺跡群 |
| 22 色樹原・檜下 | 89 鹿島平方裏 | 152 一天狗N地点 | 253 花ノ木 | 312 多胡蛇黒 | 367 八幡 |
| 26 広木上宿 | 95 篩新田 | 153 若葉台B地点 | 256 峯・峯前 | 315 長根羽田倉 | 369 浜川北 |
| 27 坂ノ谷 | 97 広見西 | 156 東の上 | 259 大久保 | 317 東沢 | 370 舞台 |
| 30 東山B | 98 六所 | 161 川崎 | 263 小町田 | 319 富岡 | 371 綿貫 |
| 32 北坂 | 99 上川入 | 162 滝 | 264 成塚石橋 | 320 矢田 | 372 融通寺 |
| 33 下田 | 100 西浦 | 163 河越館 | 265 八幡 | 321 柳田 | 373 海行A・B |
| 35 古川端 | 102 岩の上 | 165 五畑東 | 267 歌舞伎 | 327 七日市観音前 | 374 下東西 |
| 36 今井遺跡群 | 105 古吉海道 | 171 龍光第3 | 268 小角田前 | 329 千足 | 375 熊野堂 |
| 39 大久保山 | 106 山王裏 | 179 霞川 | 272 宮久保 | 331 田篠上平 | 377 後疋間 |
| 44 砂田前 | 110 中原 | 183 張摩久保 | 273 坊外戸II | 332 内出I | 378 園分境 |
| 52 白山 | 112 金平 | 185 宮脇 | 275 堀下八幡 | 333 南蛇井増光寺 | 381 小池 |
| 53 六反田 | 117 愛宕通 | 186 栗谷ツ | 276 八寸大道上 | 334 本宿・郷土 | 384 西国分II |
| 54 上南原 | 118 下埼玉通 | 187 御庵 | 277 下淵名塚越 | 337 古立東山 | 386 鳥羽 |
| 55 台耕地 | 119 原 | 189 東台 | 280 三ツ木 | 338 高鳥井 | 389 保渡田東 |
| 57 甘粕山 | 120 小針 | 194 別所 | 278 十三宝塚 | 340 八木連狸沢 | 390 北原 |
| 58 沼下 | 124 白鳥田 | 201 伴六 | 281 西今井 | 341 五料西小竹 | 392 荒子小学校校庭 |
| 63 用土北沢 | 131 稲荷上 | 202 陣屋 | 282 書上上原之城 | 342 松井田工業団地 | 393 荒砥宮西 |
| 64 上辻 | 132 宮ノ越 | 204 本郷 | 283 上植木光仙房 | 345 新寺地区遺跡群 | 396 荒砥洗橋 |

第875図 土師器甕分布拡大図(3)



- | | | | | |
|-----------------|--------------------|-------------------------|------------|--------------|
| 397 荒砥大日塚 | 452 後田 | 514 薊沢 | 647 武蔵台 | 737 上の台 |
| 400 今井白山 | 453 村主 | 515 すぐじ山下 | 657 そとごう | 742 双賀辺田No.1 |
| 404 清里・陣場 | 454 大竹 | 519 下戸塚 | 658 なすな原 | 743 村上 |
| 405 西善鍛冶屋 | 455 洞Ⅲ | 520 下山 | 659 愛甲宮前 | 746 大道 |
| 409 前山Ⅱ | 456 門前A | 521 下宿内山 | 661 海老名本郷 | 748 谷津 |
| 410 大屋敷 | 459 下川田平井 | 531 三長西 | 663 久保田 | 753 椎名崎 |
| 411 大八木屋敷 | 460 戸神諏訪 | 532 四葉 | 665 宮久保 | 755 白幡前 |
| 412 上野園分寺尼寺中間地域 | 461 石墨 | 534 志村城山 | 674 師岡打越 | 756 文作 |
| 413 中鶴谷 | 462 大釜 | 542 上落合二丁目 | 676 受地だいやま | 759 北海道 |
| 415 堤東 | 463 町田十二原 | 544 神明上北 | 684 神明久保 | 762 明代台 |
| 416 二之宮千足 | 464 町田小沢 | 549 川島谷 | 688 太井己 | 764 有吉 |
| 420 芳賀東部団地 | 470 下神 | 551 船田 | 689 台山 | 772 乙女不動原 |
| 421 野中天神 | 473 栗毛坂(B) | 554 多摩ニュータウン No.107~109 | 692 中原上宿 | 774 下野園分寺 |
| 425 岩之下 | 477 篠ノ井遺跡群 | 572 多摩ニュータウン No.27 | 693 中村 | 775 郭内 |
| 431 分郷八崎 | 478 芝間 | 614 多摩ニュータウン No.769 | 696 田名稻荷山 | 776 館之前 |
| 432 房谷戸 | 481 小原 | 615 多摩ニュータウン No.774-775 | 698 東耕地 | 780 金山Ⅳ区 |
| 434 沖田Ⅱ | 485 上久保田向Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ | 622 打越中谷戸 | 703 峯ヶ谷戸 | 786 寺野東 |
| 435 行幸田寺後 | 486 上芝宮Ⅴ | 624 塙台 | 707 林B | 792 前田 |
| 436 西浦 | 490 聖原Ⅶ | 626 中里峡上 | 710 ムコアラク | 793 谷館野東 |
| 438 石原東 | 493 西瀬ぶた | 629 田端西台通 | 712 印内台 | 797 馬門南 |
| 441 八木原沖田Ⅳ | 497 前田 | 631 田端不動坂 | 716 下総園分寺 | 798 薄市 |
| 444 有馬 | 502 田中沖 | 637 南広間地 | 723 権現後 | 799 八幡根東 |
| 445 有馬条里 | 503 島立条里 | 641 南養寺 | 724 狐塚 | 800 反過 |
| 446 金竹西 | 504 東ノ割 | 642 日南田 | 725 向台 | 802 溜ノ台 |
| 447 熊野 | 507 南上中原・南下中原 | 643 武蔵岡 | 726 高沢 | 803 蓮沼 |
| 448 八反島 | 510 北栗 | 644 武蔵国府周辺 | 727 高品第2 | 805 多功南原 |
| 450 大久保A | 511 牟礼バイパス | 645 武蔵園分寺 | 733 若宮第1 | |

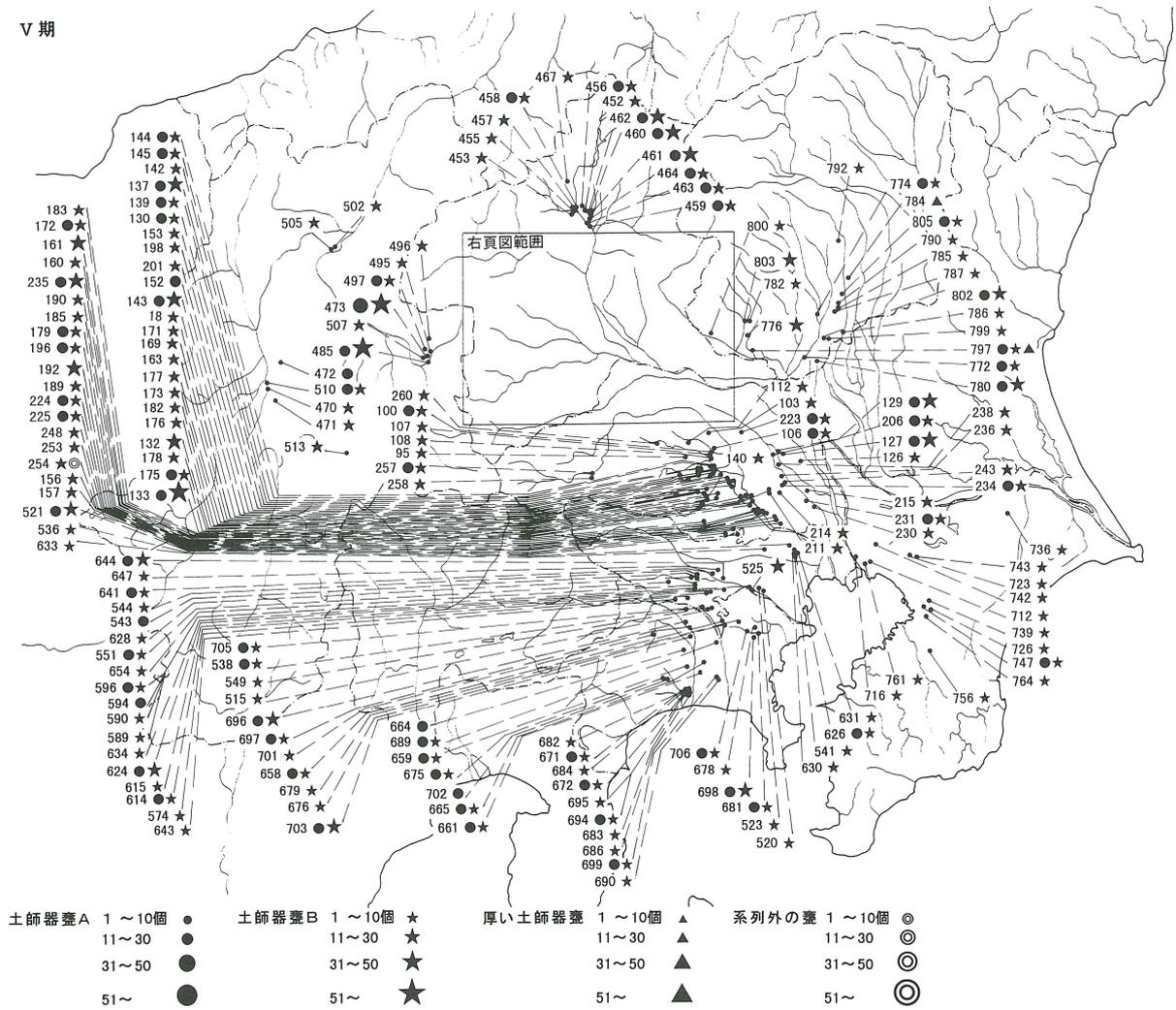
らず、なぜ土師器甕AとBという形態変化まで各地で一斉に起きるのであろうか、工人の移動という一言で単純にかたづけられない問題であろう。そこには、広

範囲な流通と、大量生産を把握する人物の存在がうかがえるのである。

武蔵型甕をはじめとする各地の土師器生産は、古墳

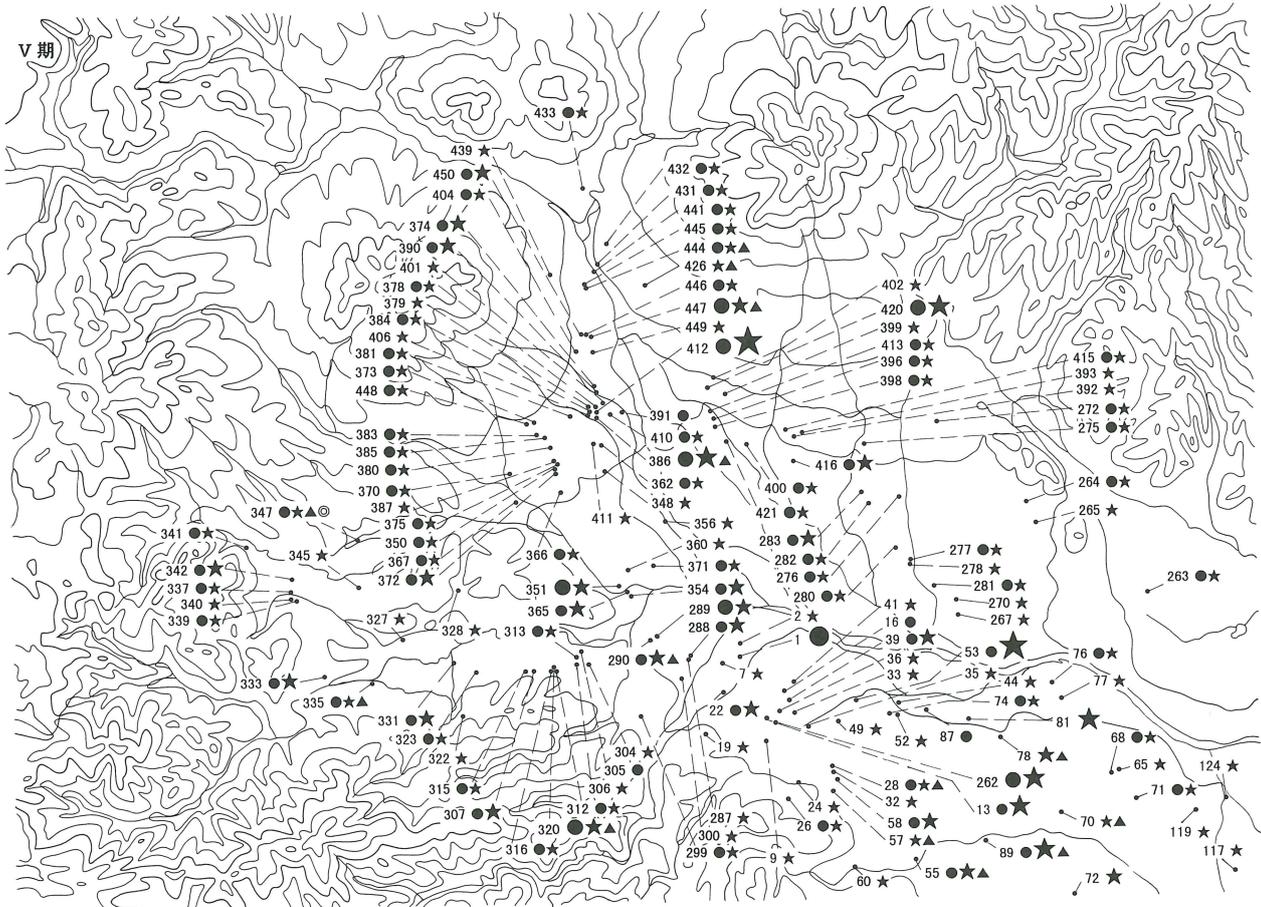
第876図 関東甲信地方土師器甕分布図(4)

V期



- | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1 中堀 | 74 熊野 | 153 若葉台B地点 | 230 東本郷台 | 290 上栗須寺前 | 360 村西 |
| 2 耕安地 | 76 飯塚南 | 156 東の上 | 231 八本木 | 299 平塚台 | 362 中尾 |
| 7 大御堂油免 | 77 弥藤吾新田 | 157 群の前 | 234 A-64号 | 300 堀ノ内遺跡群 | 365 田端 |
| 9 阿知越 | 78 宮ヶ谷戸 | 160 松山 | 235 水判土堀の内 | 304 黒熊栗崎 | 366 道場遺跡群 |
| 13 将監塚・古井戸I | 81 上敷免 | 161 川崎 | 236 海老沼南 | 305 黒熊第2 | 367 八幡 |
| 16 雷電下 | 87 矢島南 | 163 河越館 | 238 高台山 | 306 黒熊中西 | 370 舞台 |
| 18 第3浅間下 | 89 鹿島平方裏 | 169 天王 | 243 南中野諏訪 | 307 神保富士塚 | 371 綿貫 |
| 19 中道 | 95 篩新田 | 171 龍光第3 | 248 宮台・宮原 | 312 多胡蛇黒 | 372 融通寺 |
| 22 巨樹原・檜下 | 100 西浦 | 172 東台 | 253 花ノ木 | 313 多比良 | 373 海行A・B |
| 24 原 | 103 玉太岡 | 173 稲荷 | 254 市場上 | 315 長根羽田倉 | 374 下東西 |
| 26 広木上宿 | 106 山王裏 | 175 宮久保 | 257 姥原 | 316 椿谷戸 | 375 熊野堂 |
| 28 清水谷 | 107 代正寺 | 176 若宮 | 258 下段 | 320 矢田 | 378 国分境 |
| 32 北坂 | 108 大西 | 177 新宿 | 260 大都 | 322 佐久間 | 379 国分境Ⅲ |
| 33 下田 | 112 金平 | 178 二反田 | 262 東牧西分 | 323 西原 | 380 ツツ寺Ⅱ |
| 35 古川端 | 117 愛宕通 | 179 霞川 | 263 小町田 | 327 七日市観音前 | 381 小池 |
| 36 今井遺跡群 | 119 原 | 182 西小川 | 264 成塚石橋 | 328 小野広畑 | 383 諏訪西 |
| 39 大久保山 | 124 白鳥田 | 183 張摩久保 | 265 八幡 | 331 田篠上平 | 384 西国分Ⅱ |
| 41 南大通り線内 | 126 花積台耕地 | 185 宮脇 | 267 歌舞伎 | 333 南蛇井増光寺 | 385 西芝 |
| 44 砂田前 | 127 椿山 | 189 正網 | 270 下田中中道 | 335 野上塩之入 | 386 鳥羽 |
| 49 東光寺裏 | 129 荒川附 | 190 谷津 | 272 宮久保 | 337 古立東山 | 387 堤上 |
| 52 白山 | 130 越生五領 | 192 東台 | 275 堀下八幡 | 339 八木連荒畑 | 390 北原 |
| 53 六反田 | 132 宮ノ越 | 196 北別所 | 276 八寸大道上 | 340 八木連理沢 | 391 堰越 |
| 55 台耕地 | 133 小山ノ上 | 198 まま上 | 277 下淵名塚越 | 341 五料西小竹 | 392 荒子小学校校庭 |
| 57 甘粕山 | 137 稲荷前(A区) | 201 伴六 | 278 三ツ木 | 342 松井田工業団地 | 393 荒砥宮西 |
| 58 沼下 | 139 宮町I | 206 大山 | 280 十三宝塚 | 345 新寺地区遺跡群 | 396 荒砥洗橋 |
| 60 樋ノ下 | 140 金井 | 211 宿宮前 | 281 西今井 | 347 嶺・下原 | 398 荒砥島原 |
| 65 常光院東 | 142 桑原 | 214 上木崎東 | 282 書上上原之城 | 348 井野高縄 | 399 荒砥東原 |
| 68 天神 | 143 原 | 215 大間木内谷 | 283 上植木光仙房 | 350 雨壺 | 400 今井白山 |
| 70 樋の上 | 144 御門 | 223 新屋敷(A区) | 287 株木 | 351 下佐野 | 401 山王廃寺 |
| 71 北島 | 145 山田 | 224 城山 | 288 株木B | 354 山名原口I | 402 沼西I |
| 72 丸山 | 152 一天狗N地点 | 225 子山 | 289 上栗須 | 356 新保田中村前 | 404 清里・陣場 |

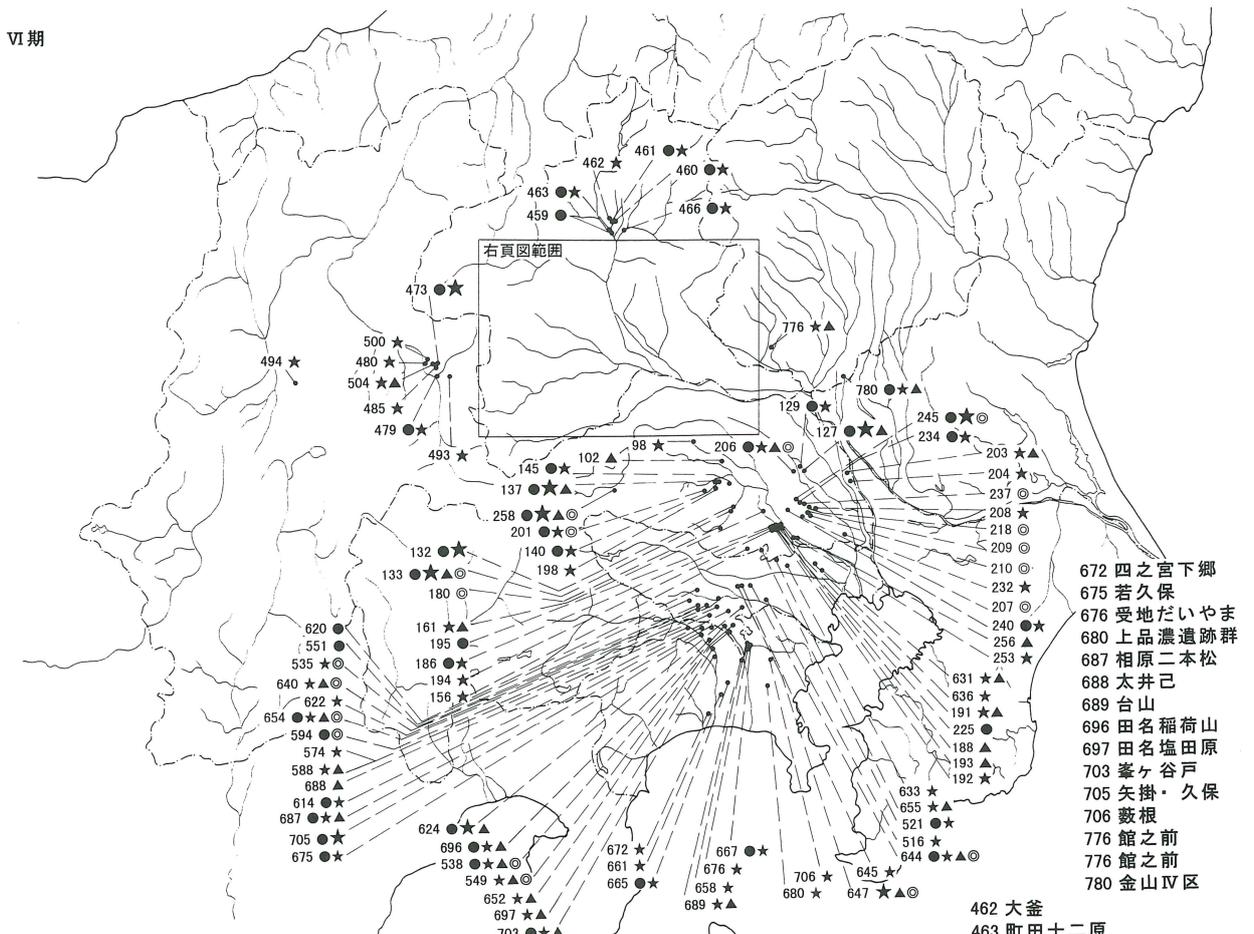
第877図 土師器甕分布拡大図(4)



- | | | | | |
|-----------------|--------------------|-------------------------|----------------|---------------|
| 406 青梨子金古境 | 459 下川田平井 | 543 神明上 | 672 四之宮下郷 | 739 西屋敷 |
| 410 大屋敷 | 460 戸神諏訪 | 544 神明上北 | 675 若久保 | 742 双賀辺田 No.1 |
| 411 大八木屋敷 | 461 石曇 | 549 川島谷 | 676 受地だいやま | 743 村上 |
| 412 上野国分寺尼寺中間地域 | 462 大釜 | 551 船田 | 678 上の山 | 747 大北 |
| 413 中鶴谷 | 463 町田十二原 | 574 多摩ニュータウン No.287 | 679 上谷本第二 | 756 文作 |
| 415 堤東 | 464 町田小沢 | 589 多摩ニュータウン No.423-719 | 681 新羽大竹 | 761 本郷台 |
| 416 二之宮千足 | 467 北貝戸 | 590 多摩ニュータウン No.424 | 682 新町 | 764 有吉 |
| 420 芳賀東部団地 | 470 下神 | 594 多摩ニュータウン No.450 | 683 真土六ノ域 | 772 乙女不動原 |
| 421 野中天神 | 471 吉田川西 | 596 多摩ニュータウン No.5 | 684 神明久保 | 774 下野国分寺 |
| 426 窪谷戸 | 472 宮の上Ⅱ | 614 多摩ニュータウン No.769 | 686 諏訪前B | 776 館之前 |
| 431 分郷八崎 | 473 栗毛坂(B) | 615 多摩ニュータウン No.774-775 | 689 台山 | 780 金山Ⅳ区 |
| 432 房谷戸 | 485 上久保田向Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ | 624 壺台 | 690 池の辺 | 782 向原 |
| 433 白井二位屋 | 495 赤産垣外 | 626 中里映上 | 694 天神前 | 784 砂田A |
| 439 中筋 | 496 川原田 | 628 塚場 | 695 天神前・桜畑 | 785 三ノ谷 |
| 441 八木原沖田Ⅳ | 497 前田 | 630 田端町 | 696 田名稲荷山 | 786 寺野東 |
| 444 有馬 | 502 田中沖 | 631 田端不動坂 | 697 田名塩田原 | 787 柴工業団地内 |
| 445 有馬条里 | 505 南宮 | 633 東早淵 | 698 東耕地 | 790 上芝 |
| 446 金竹西 | 507 南上中原・南下中原 | 634 東和泉 | 699 藤沢市 No.259 | 792 前田 |
| 447 熊野 | 510 北栗 | 641 南養寺 | 701 馬場 | 797 馬門南 |
| 448 八反畠 | 513 立石 | 643 武蔵岡 | 702 比々多 | 799 八幡根東 |
| 449 清里長久保 | 515 すぐじ山下 | 644 武蔵国府周辺 | 703 峯ヶ谷戸 | 800 反過 |
| 450 大久保A | 520 下山 | 647 武蔵台 | 705 矢掛・久保 | 802 溜ノ台 |
| 452 後田 | 521 下宿内山 | 658 なすな原 | 706 藪根 | 803 蓮沼 |
| 453 村主 | 523 下神明 | 649 愛甲宮前 | 712 印内台 | 805 多功南原 |
| 455 洞Ⅲ | 525 喜多見陣屋 | 661 海老名本郷 | 716 下総国分寺 | |
| 456 門前A | 536 宿 | 664 及川十二天 | 723 権現後 | |
| 457 藪田 | 538 小山田遺跡群 | 665 宮久保 | 726 高沢 | |
| 458 藪田東 | 541 上野忍岡 | 671 山王A | 736 松木下 | |

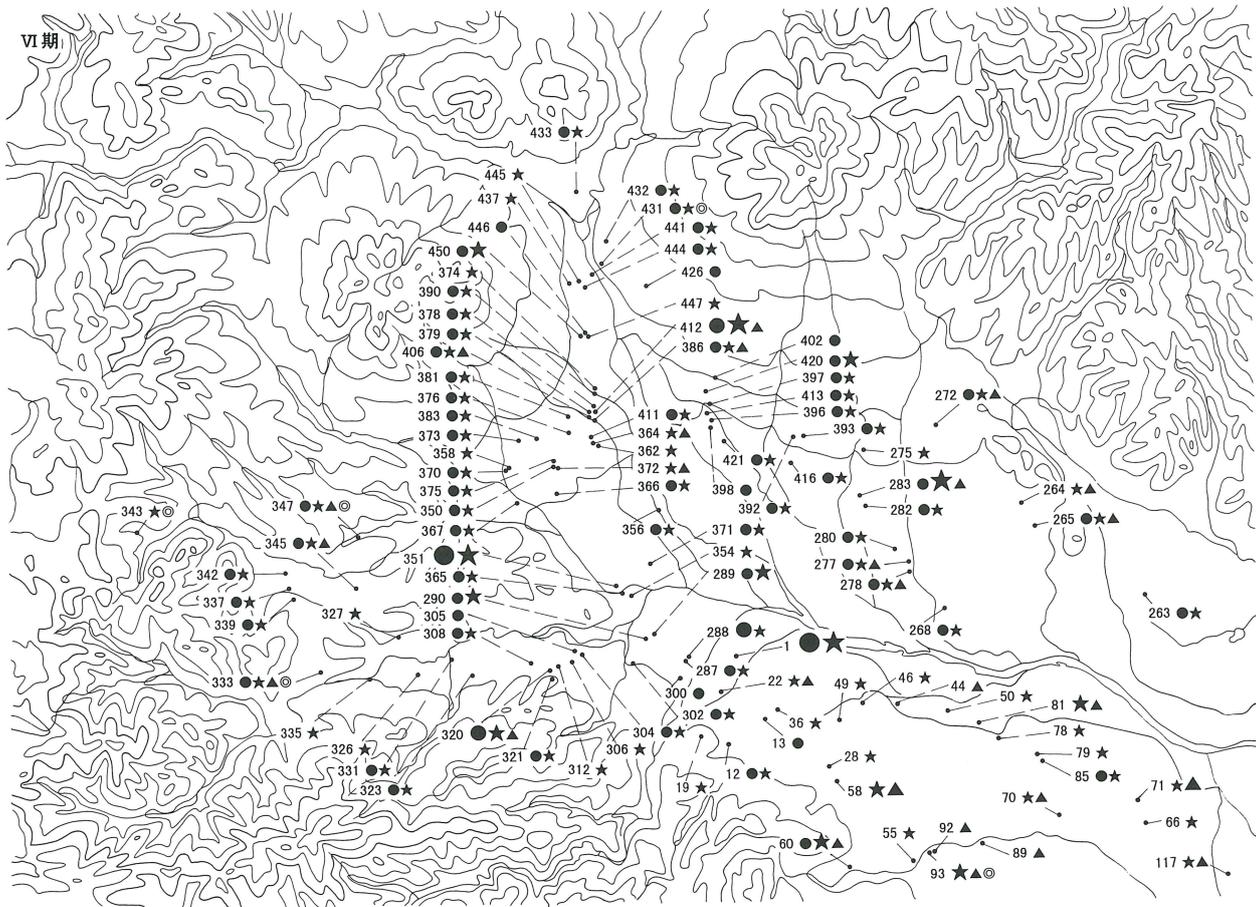
第878図 関東甲信地方土師器甕分布図(5)

VI期



- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|---------------|
| 土師器甕A 1~10個 ● | 土師器甕B 1~10個 ★ | 厚い土師器甕 1~10個 ▲ | 系列外の甕 1~10個 ◎ |
| 11~30 ● | 11~30 ★ | 11~30 ▲ | 11~30 ◎ |
| 31~50 ● | 31~50 ★ | 31~50 ▲ | 31~50 ◎ |
| 51~ ● | 51~ ★ | 51~ ▲ | 51~ ◎ |
-
- | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1 中堀 | 133 小山ノ上 | 253 花ノ木 | 331 日篠上平 | 386 鳥羽 | 672 四之宮下郷 |
| 12 十二天 | 137 稲荷前(A区) | 256 峯ノ峯前 | 333 南蛇井増光寺 | 390 北原 | 675 若久保 |
| 13 将監塚・古井戸I | 140 金井 | 258 下段 | 335 野上塩之入 | 392 荒子小学校校庭 | 676 受地だいやま |
| 19 中道 | 145 山田 | 263 小町田 | 337 古立東山 | 393 荒砥宮西 | 680 上品濃遺跡群 |
| 22 白樹原・檜下 | 156 若宮 | 264 成塚石橋 | 339 八木連荒畑 | 396 荒砥洗橋 | 687 相原二本松 |
| 28 清水谷 | 161 川崎 | 265 八幡 | 342 松井田工業団地 | 397 荒砥大日塚 | 688 太井己 |
| 36 今井遺跡群 | 180 森坂北 | 268 小角田前 | 343 仁田 | 398 荒砥島原 | 689 台山 |
| 44 砂田前 | 186 栗谷ツ | 272 宮久保 | 345 新寺地区遺跡群 | 402 沼西I | 696 田名稲荷山 |
| 46 水窪 | 188 松山 | 275 堀下八幡 | 347 嶺ノ下原 | 406 青梨子金古境 | 697 田名塩田原 |
| 49 東光寺裏 | 191 東前 | 277 下淵名塚越 | 350 雨壺 | 411 大八木屋敷 | 703 峯ヶ谷戸 |
| 50 東本郷 | 192 東台 | 278 三ツ木 | 351 下佐野 | 412 上野国分寺尼寺 | 705 矢掛・久保 |
| 55 台耕地 | 193 南通 | 280 十三宝塚 | 354 山名原口I | 中間地域 | 706 藪根 |
| 58 沼下 | 194 別所 | 282 書上上原之城 | 356 新保田中村前 | 413 中鶴谷 | 776 館之前 |
| 60 樋ノ下 | 195 北通 | 283 上植木光仙房 | 358 石神・五反田 | 416 二之宮千足 | 776 館之前 |
| 66 池上 | 198 まま上 | 287 株木 | 362 中尾 | 420 芳賀東部団地 | 780 金山IV区 |
| 70 樋の上 | 201 伴六 | 288 株木B | 364 天田 | 421 野中天神 | |
| 71 北島 | 203 馬場 | 289 上栗須 | 365 田端 | 426 窪谷戸 | |
| 78 宮ヶ谷戸 | 204 本郷 | 290 上栗須寺前 | 366 道場遺跡群 | 431 分郷八崎 | |
| 79 居立 | 206 大山 | 300 堀ノ内遺跡群 | 367 八幡 | 432 房谷戸 | |
| 81 上敷免 | 207 一ツ木 | 302 緑埜地区遺跡群 | 370 舞台 | 433 白井二位屋 | |
| 85 前 | 208 宮本 | 304 黒熊栗崎 | 371 綿貫 | 437 石原久保貝道A | |
| 89 鹿島平方裏 | 209 駒前 | 305 黒熊第2 | 372 融通寺 | 441 八木原沖田IV | |
| 92 竹之花 | 210 駒前南 | 306 黒熊中西 | 373 海行A・B | 444 有馬 | |
| 93 白草 | 218 中原後 | 308 西場脇 | 374 下東西 | 445 有馬条里 | |
| 98 六所 | 225 田子山 | 312 多胡蛇黒 | 375 熊野堂 | 446 金竹西 | |
| 102 岩の上 | 232 蜻蛉 | 320 矢田 | 376 権現原 | 447 熊野 | |
| 117 愛宕通 | 234 A-64号 | 321 柳田 | 378 国分境 | 450 大久保A | |
| 127 椿山 | 237 御蔵山中 | 323 西原 | 379 国分境III | 459 下川田平井 | |
| 129 荒川附 | 240 根切 | 326 下高瀬上ノ原 | 381 小池 | 460 戸神諏訪 | |
| 132 宮ノ越 | 245 水川神社 | 327 七日市観音前 | 383 諏訪西 | 461 石墨 | |

第879図 土師器甕分布拡大図(5)



時代からの系譜が追えるものが多い。

古墳時代の土器生産は、在地首長層と強く結びついていることが指摘され(東国土器研究会1995)、この在地首長層が律令体制下の郡司層へと変容していったといわれている。

律令制の施行に伴い、土器生産にも大きな画期がみられるが、これはまさに在地に根差した郡司層を中心とする有力者の協力によりはじめて成し遂げられたことなのである。

これらのことを考えあわせると、武蔵型甕の画一的な製作技法や、土師器甕Bが広範囲でほぼ同時にみられるという背景には、在地間の強力なネットワークの存在が想定できる。

古墳時代以降連続として続いてきた、首長間のネットワークを利用し、律令体制という大きな時代の流れに対応していったのであろう。

中堀Ⅳ期(第874・875図)

Ⅲ期からの増加傾向は継続する。土師器甕AとBの比率は、本時期で逆転し、一気に土師器甕Bが主体となる。

分布傾向に大きな変化はみられず、北武蔵から上野にかけてが中心である。

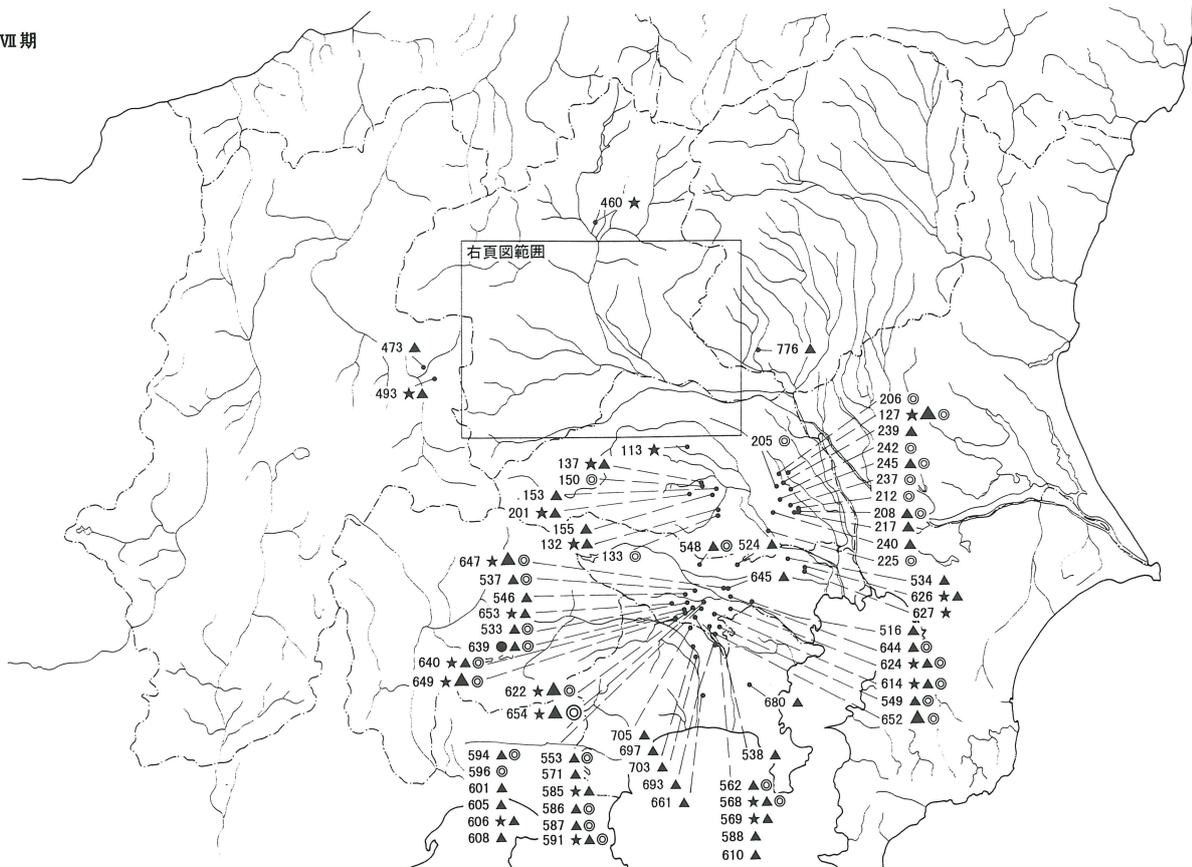
武蔵では、器肉の厚い土師器甕▲が、坂戸市桑原遺跡(142)・御門遺跡(144)、和光市峯・峯前遺跡(256)、東秩父村大久保遺跡(259)など荒川以南の中武蔵で、ごく少量出土するようになる。

また、大宮市松木北遺跡(213)では系列外の甕が出土しているが、単発的なものであろう。

南武蔵は状況が若干異なる。第890図は群馬・埼玉・東京の煮炊具の出土量について比較したものだが、群馬・埼玉に比べて、東京の出土量の低さが指摘できる。また、群馬・埼玉・東京ともに、8世紀初頭以降出土

第880図 関東甲信地方土師器甕分布図(6)

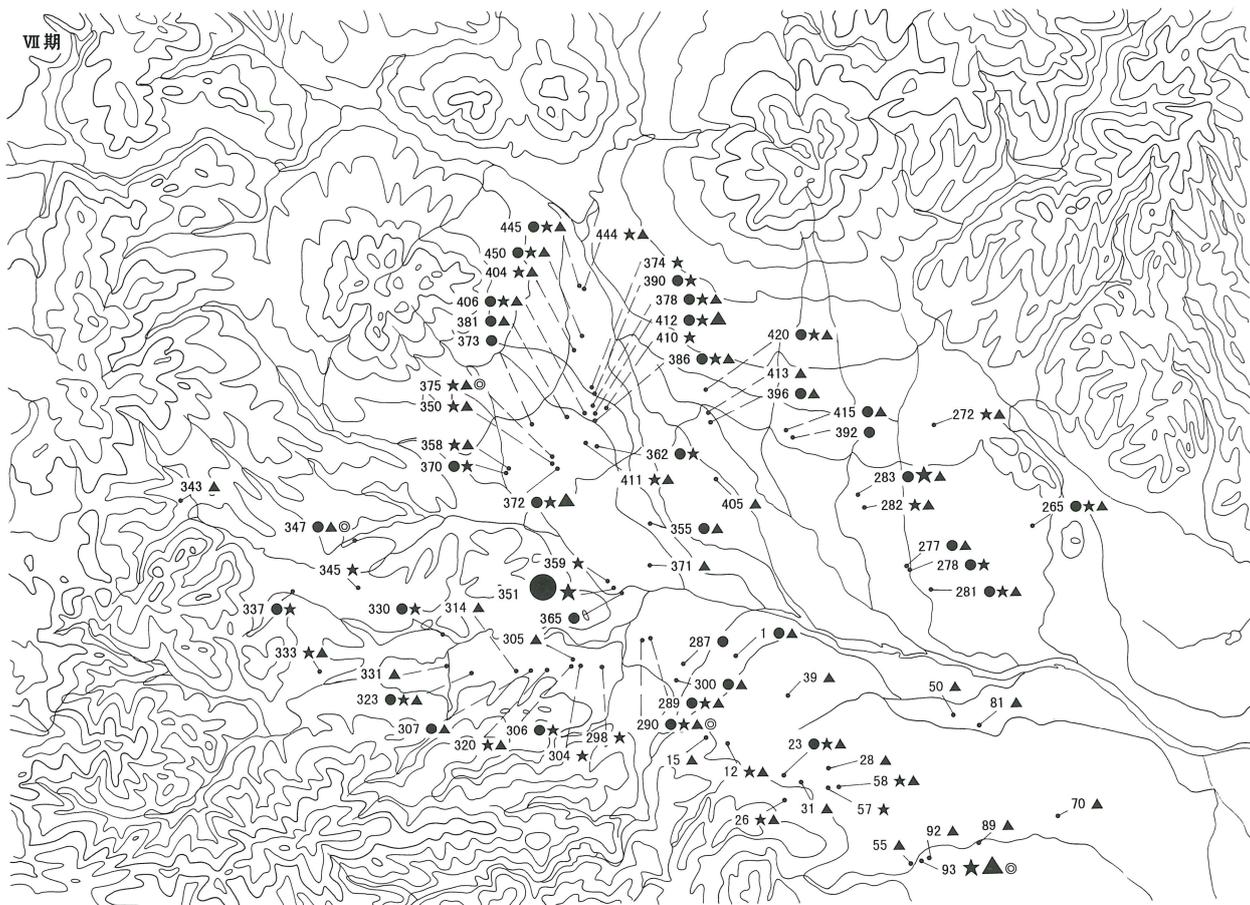
Ⅶ期



土師器甕A 1~10個	●	土師器甕B 1~10個	★	厚い土師器甕 1~10個	▲	系列外の甕 1~10個	◎
11~30	●	11~30	★	11~30	▲	11~30	◎
31~50	●	31~50	★	31~50	▲	31~50	◎
51~	●	51~	★	51~	▲	51~	◎

- | | | | | |
|-------------|-------------|-----------------|----------------------------|--------------|
| 1 中堀 | 239 今羽丸山 | 358 石神・五反田 | 533 子安3丁目 | 647 武蔵台 |
| 12 十二天 | 240 根切 | 359 船橋 | 534 志村城山 | 649 法政大学多摩校地 |
| 15 枇杷橋 | 242 東北原 | 362 中尾 | 537 小宮町 | 652 木曾中学校 |
| 23 ミカ神社前 | 245 氷川神社 | 365 田端 | 538 小山田遺跡群 | 653 落越 |
| 26 広木上宿 | 265 八幡 | 370 舞台 | 546 石川天野 | 654 落川 |
| 28 清水谷 | 272 宮久保 | 371 綿貫 | 548 赤堀 | 661 海老名本郷 |
| 31 畑中 | 277 下瀬名塚越 | 372 融通寺 | 549 川島谷 | 680 上品濃遺跡群 |
| 39 大久保山 | 278 ミツ木 | 373 海行A・B | 553 多摩ニュータウンNo.106・904・905 | 693 中村 |
| 50 東本郷 | 281 西今井 | 374 下東西 | 562 多摩ニュータウンNo.219 | 697 田名塩田原 |
| 55 台耕地 | 282 書上上原之城 | 375 熊野堂 | 568 多摩ニュータウンNo.233・838 | 703 峯ヶ谷戸 |
| 57 甘粕山 | 283 上植木光仙房 | 378 国分境 | 569 多摩ニュータウンNo.241 | 705 矢掛・久保 |
| 58 沼下 | 287 株木 | 381 小池 | 571 多摩ニュータウンNo.245・341 | |
| 70 樋の上 | 289 上栗須 | 386 鳥羽 | 585 多摩ニュータウンNo.388・389・431 | |
| 81 上敷免 | 290 上栗須寺前 | 390 北原 | 586 多摩ニュータウンNo.419 | |
| 89 鹿島平方裏 | 298 白石根岸 | 392 荒子小学校校庭 | 587 多摩ニュータウンNo.419・420 | |
| 92 竹之花 | 300 堀ノ内遺跡群 | 396 荒砥洗橋 | 588 多摩ニュータウンNo.421 | |
| 93 白草 | 304 黒熊栗崎 | 404 清里・陣場 | 591 多摩ニュータウンNo.426 | |
| 113 新田坊 | 305 黒熊第2 | 405 西善鍛冶屋 | 594 多摩ニュータウンNo.450 | |
| 127 樽山 | 306 黒熊中西 | 406 青梨子金古境 | 596 多摩ニュータウンNo.5 | |
| 132 宮ノ越 | 307 神保富士塚 | 410 大屋敷 | 601 多摩ニュータウンNo.540 | |
| 133 小山ノ上 | 314 長根 | 411 大八木屋敷 | 605 多摩ニュータウンNo.588 | |
| 137 福荷前(A区) | 320 矢田 | 412 上野国分寺尼寺中間地域 | 606 多摩ニュータウンNo.620 | |
| 150 塚の越 | 323 西原 | 413 中鶴谷 | 608 多摩ニュータウンNo.677A・677B | |
| 153 若葉台B地点 | 330 曾木森裏 | 415 堤東 | 610 多摩ニュータウンNo.721 | |
| 155 雷電池東B地点 | 331 田篠上平 | 420 芳賀東部団地 | 614 多摩ニュータウンNo.769 | |
| 201 伴六 | 333 南蛇井増光寺 | 444 有馬 | 622 打越中谷戸 | |
| 205 伊奈氏屋敷跡 | 337 古立東山 | 445 有馬条里 | 624 堅台 | |
| 206 大山 | 343 仁田 | 450 大久保A | 626 中里峡上 | |
| 208 宮本 | 345 新寺地区遺跡群 | 460 戸神諏訪 | 627 中里峡上滝野川教会 | |
| 212 松木 | 347 嶺・下原 | 473 栗毛坂(B) | 639 南八王子地区 | |
| 217 大古里 | 350 雨壺 | 493 西福ぶた | 640 南八王子地区遺跡 | |
| 225 田子山 | 351 下佐野 | 516 はらやま | 644 武蔵国府周辺 | |
| 237 御蔵山中 | 355 新保 | 524 下里本邑 | 645 武蔵国分寺 | |

第881図 土師器甕分布拡大図(6)



量が増加していたが、東京だけがⅣ期に土師器甕A・Bの出土量が減少している。

他の地域において急激に増加しつつある土師器甕A・Bが減少していることから、南武蔵が武蔵型甕の生産においては、中心地であったとは考えにくいといえるであろう。

上野・武蔵以外の地域では、分布に大きな変化みられないが、相模においては、やや広がり、国府周辺だけでなく、東相模で分布が増加する。

また信濃では、Ⅲ期に土師器甕Bの出土があまりみられなかったが、この時期には他の地域動揺に土師器甕Bが土師器甕Aを越える出土量となる。

Ⅳ期に特徴的なのは、佐久平・上野・武蔵など、土師器甕A・Bが煮炊具の主体となる地域では、周辺の遺跡に比べて、土師器甕A・Bが多量に出土する遺跡がみられるようになる。

これらの遺跡を列挙すると、佐久市栗毛坂遺跡(473)、沼田市戸神諏訪遺跡(460)、前橋市芳賀東部団地地区(420)、前橋市上野国分寺尼寺中間地域、神川町皂樹原・檜下遺跡(22)、児玉町古井戸・将監塚遺跡(13)などがそれである。これらの遺跡は、大型の掘立柱建物跡を含む、大規模なものが多く、在地の有力な拠点であったと考えられる。

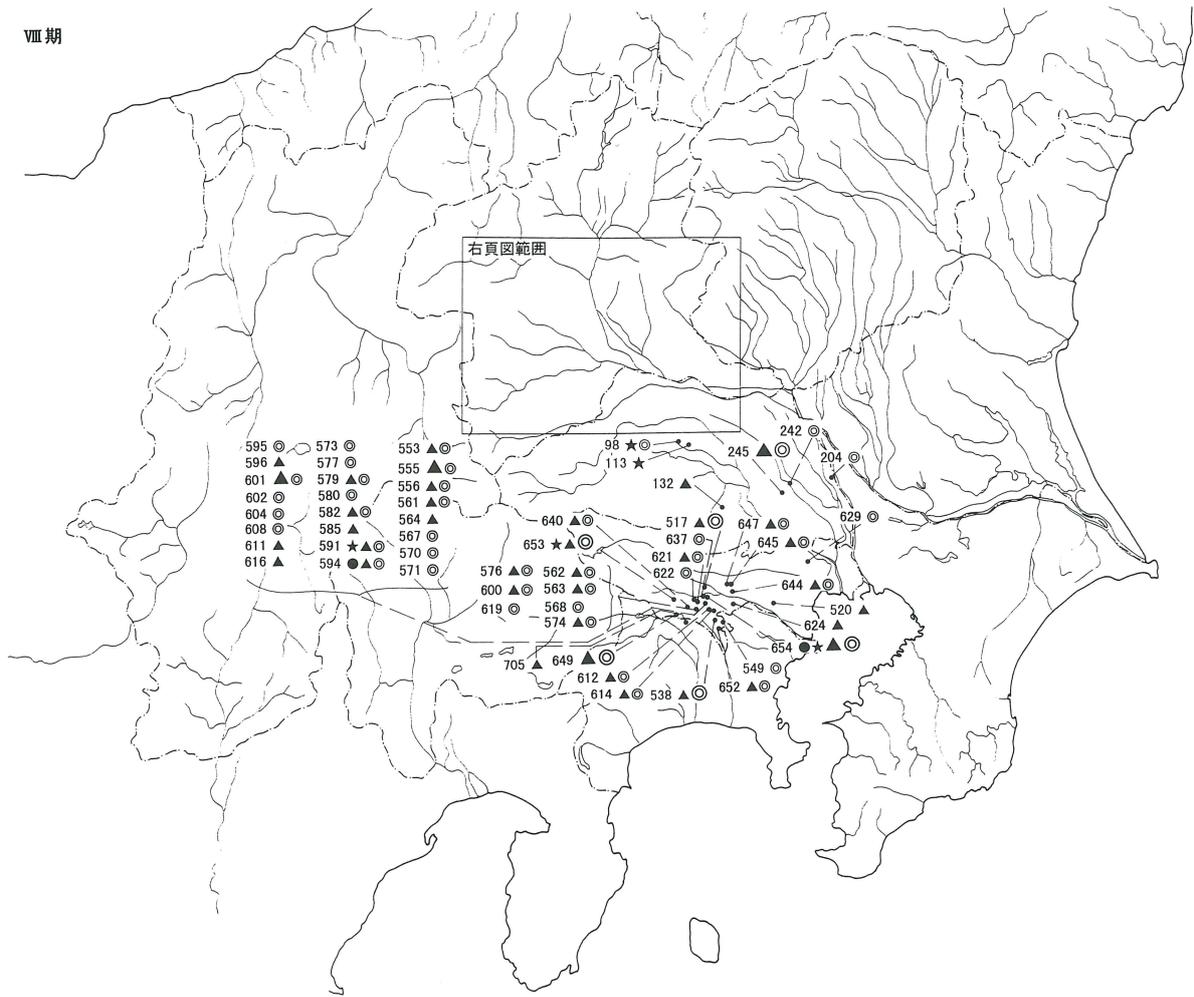
これらの遺跡は、8世紀代から継続するものが多く、坏類など供膳具の出土量は、集落出現当初から周辺の遺跡よりも多い。

しかし、煮炊具については、中堀Ⅲ期までは突出するほど多くはなく、Ⅳ期になって急激に増加するのである。

煮炊具の増加が日常生活を営む住居跡の増加を意味しているとすれば、これらの遺跡の性格が時代とともに変化していくことの現れと理解できるのではないで

第882図 関東甲信地方土師器甕分布図(7)

Ⅷ期



土師器甕A 1~10個 ●	土師器甕B 1~10個 ★	厚い土師器甕 1~10個 ▲	系列外の甕 1~10個 ◎	土 釜 1~10個 ◆
11~30 ●	11~30 ★	11~30 ▲	11~30 ◎	11~30 ◆
31~50 ●	31~50 ★	31~50 ▲	31~50 ◎	31~50 ◆
51~ ●	51~ ★	51~ ▲	51~ ◎	51~ ◆

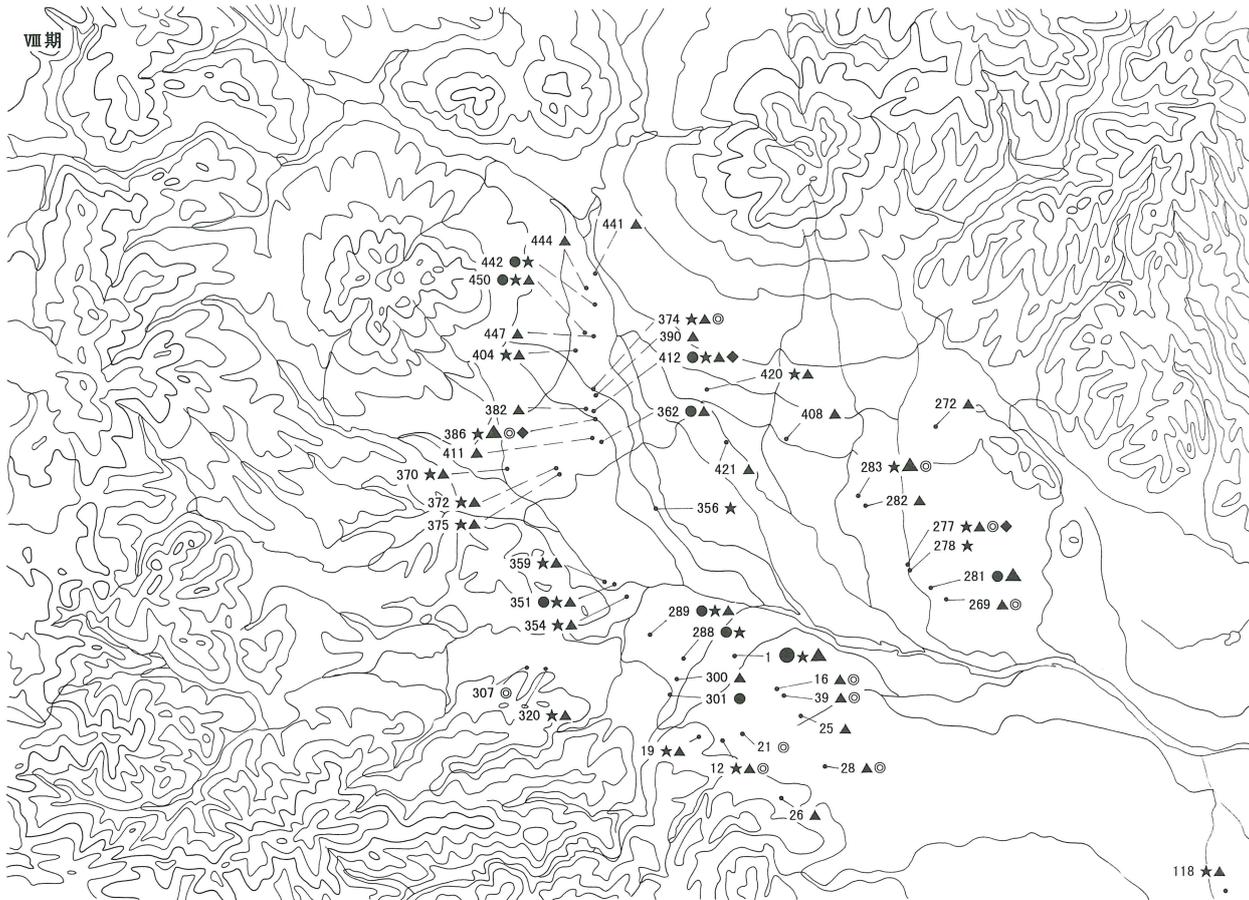
- 1 中堀
- 12 十二天
- 16 雷電下
- 19 中道
- 21 反り町
- 25 向田
- 26 広木上宿
- 28 清水谷
- 39 大久保山
- 98 六所
- 113 新田坊
- 118 下埼玉通
- 132 宮ノ越
- 204 本郷
- 242 東北原
- 245 氷川神社
- 269 下田中川久保
- 272 宮久保
- 277 下淵名塚越
- 278 三ッ木
- 281 西今井
- 282 書上上原之城
- 283 上植木光仙房
- 288 株木B
- 289 上栗須
- 300 堀ノ内遺跡群

- 301 本郷山根
- 307 神保富士塚
- 320 矢田
- 351 下佐野
- 354 山名原口I
- 356 新保田中村前
- 359 船橋
- 362 中尾
- 370 舞台
- 372 融通寺
- 374 下東西
- 375 熊野堂
- 382 上野国分寺
- 386 鳥羽
- 390 北原
- 404 清里・陣場
- 408 川箆皆戸
- 411 大八木屋敷
- 412 上野国分寺尼寺中間地域
- 420 芳賀東部団地
- 421 野中天神
- 441 八木原沖田IV
- 442 半田薬師
- 444 有馬
- 447 熊野
- 450 大久保A

- 517 栄町
- 520 下山
- 538 小山田遺跡群
- 549 川島谷
- 553 多摩ニュータウン No.106・904・905
- 555 多摩ニュータウン No.125
- 556 多摩ニュータウン No.145
- 561 多摩ニュータウン No.206
- 562 多摩ニュータウン No.219
- 563 多摩ニュータウン No.224・225
- 564 多摩ニュータウン No.225・305
- 567 多摩ニュータウン No.227
- 568 多摩ニュータウン No.233・838
- 570 多摩ニュータウン No.245・341
- 571 多摩ニュータウン No.245・341
- 573 多摩ニュータウン No.271・452
- 574 多摩ニュータウン No.287
- 576 多摩ニュータウン No.304
- 577 多摩ニュータウン No.306
- 579 多摩ニュータウン No.325
- 580 多摩ニュータウン No.342
- 582 多摩ニュータウン No.359・563
- 585 多摩ニュータウン No.388・389・431
- 591 多摩ニュータウン No.426
- 594 多摩ニュータウン No.450
- 595 多摩ニュータウン No.451A・452

- 596 多摩ニュータウン No.5
- 600 多摩ニュータウン No.533・534
- 601 多摩ニュータウン No.540
- 602 多摩ニュータウン No.559
- 604 多摩ニュータウン No.583
- 608 多摩ニュータウン No.677A・677B
- 611 多摩ニュータウン No.722
- 612 多摩ニュータウン No.725
- 614 多摩ニュータウン No.769
- 616 多摩ニュータウン No.800
- 619 多摩ニュータウン No.880
- 621 打越大畑
- 622 打越中谷戸
- 624 竪台
- 629 田端西台通
- 637 南広間地
- 640 南八王子地区遺跡群
- 644 武蔵国府周辺
- 645 武蔵国分寺
- 647 武蔵台
- 649 法政大学多摩校地
- 652 木曾中学校
- 653 落越
- 654 落川
- 705 矢掛・久保

第883図(1) 土師器甕分布拡大図(7)



あろうか。

早急に結論を導き出すわけにはいかないが、9世紀末にみられる、集落の再編成の前兆現象のように思えるのである。

中堀V期(第876・877図)

土師器甕A・Bが最も多く出土する時期である。形態はIV期同様にBが主体となる。

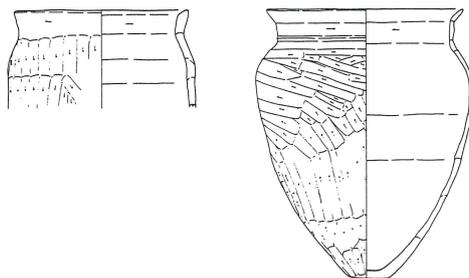
分布範囲に大きな変化はみられない。

北武蔵北部では、器肉の厚い甕(▲)が、一定量みられるようになる。

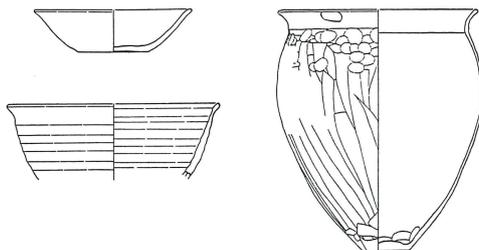
この甕は、上野南部でも少量みられるが、中心は北武蔵北部であろう。上野では引き続き、土師器甕A・Bの生産だけが行われていたと思われる。

北武蔵北部を中心として、武蔵型甕の新しい形態が生まれたわけだが、III期の土師器甕Bのように、武蔵型甕の分布範囲に一斉に普及するのではなく、この器

第883図(2) 10世紀前半の系列外の甕



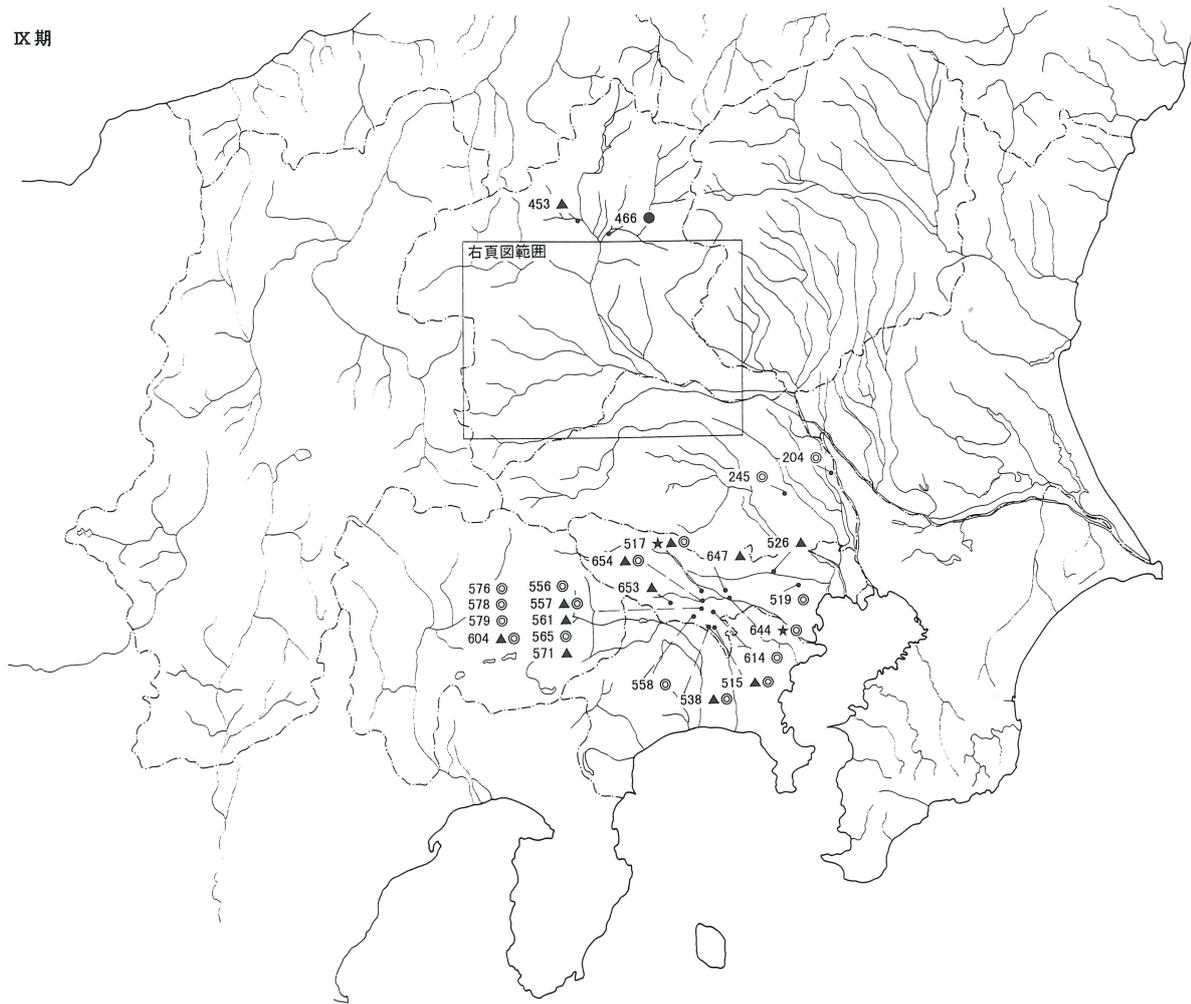
大宮市氷川神社東遺跡第11号住居



町田市川島谷遺跡第4地点3号住居

第884図 関東甲信地方土師器甕分布図(8)

Ⅸ期



土師器甕A 1~10個 ●	土師器甕B 1~10個 ★	厚い土師器甕 1~10個 ▲	系列外の甕 1~10個 ◎	土 釜 1~10個 ◆
11~30 ●	11~30 ★	11~30 ▲	11~30 ◎	11~30 ◆
31~50 ●	31~50 ★	31~50 ▲	31~50 ◎	31~50 ◆
51~ ●	51~ ★	51~ ▲	51~ ◎	51~ ◆

39 大久保山	283 上植木光仙房	371 綿貫	453 村主	565 多摩ニュータウン No.226
118 下埼玉通	303 黒熊遺跡群	372 融通寺	466 糸井宮前	571 多摩ニュータウン No.245・341
204 本郷	306 黒熊中西	386 鳥羽	515 すぐじ山下	576 多摩ニュータウン No.304
245 氷川神社	320 矢田	392 荒子小学校校庭	517 栄町	578 多摩ニュータウン No.306・308
268 小角田前	333 南蛇井増光寺	404 清里・陣場	519 下戸塚	579 多摩ニュータウン No.325
269 下田中川久保	340 八木連狸沢	411 大八木屋敷	526 栗山	604 多摩ニュータウン No.583
270 下田中中道	355 新保	412 上野国分寺尼寺中間地蔵	538 小山田遺跡群	614 多摩ニュータウン No.769
277 下淵名塚越	359 船橋	421 野中天神	556 多摩ニュータウン No.145	644 武蔵国府周辺
278 三ッ木	362 中尾	444 有馬	557 多摩ニュータウン No.146	647 武蔵台
281 西今井	364 天田	445 有馬糸里	558 多摩ニュータウン No.182	653 落越
282 書上上原之城	365 田端	450 大久保A	561 多摩ニュータウン No.206	654 落川

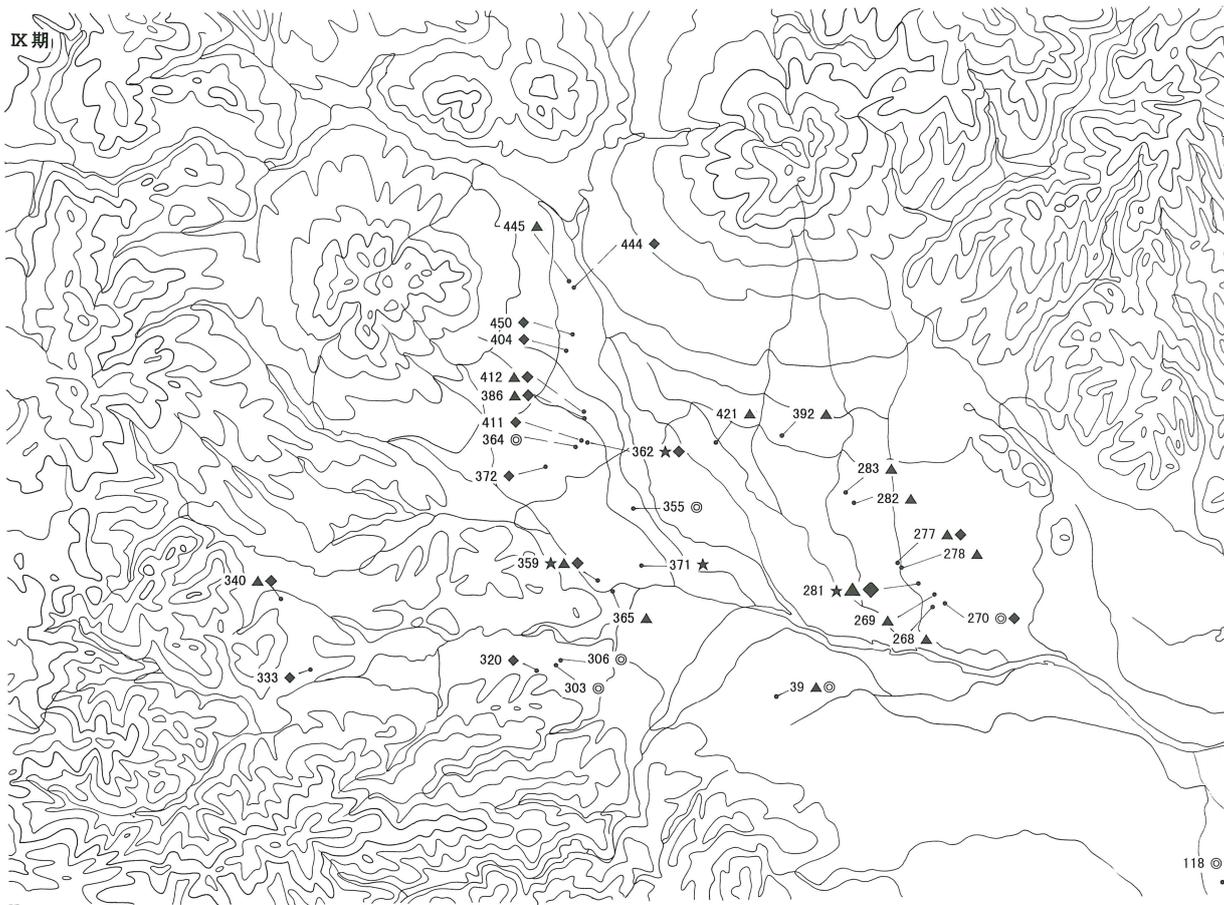
肉の厚い甕の場合には、関東甲信地方全体に普及することはない。

この甕は器肉が厚く、それまでの土師器甕A・Bに比べて熱効率が悪く、そのために広く流通しなかったという可能性もあるが、Ⅸ期にみられた在地社会の変

化が大きく影響したのであろう。

土師器甕生産に新たな流れがみられるものの、上野・北武蔵で、特定の遺跡で土師器甕の出土量が多いという状況は変わらない。その遺跡の一つが中堀遺跡である。

第885図 土師器甕分布拡大図(8)



中堀遺跡では、Ⅳ期まで煮炊具の出土量はあまり多くないが、この時期に急激に増加する。住居跡の軒数自身が増加することもさることながら、前段階まで圧倒的出土量を誇っていた、古井戸・将監塚遺跡(13)、皂樹原・檜下遺跡(22)が衰退していくことと無関係とは思われない。

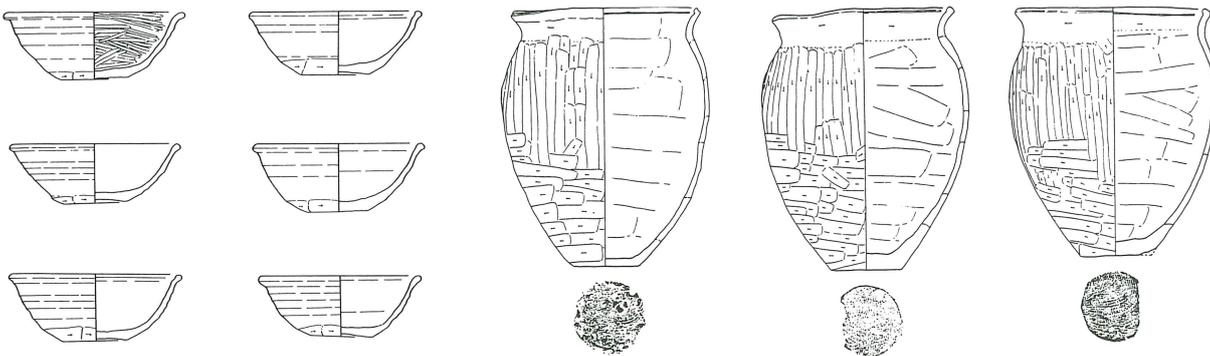
北武蔵北部にみられた集落の大きな変動は、在地に

根差した土師器生産に影響を与え、今までとは異なる生産体制を生み出して、結果として新しい形態のものが生産されるようになったのであろう。

そして、土師器甕A・Bの生産拠点でのこのような変化は、次の段階に土師器甕生産の衰退化となって表れる。

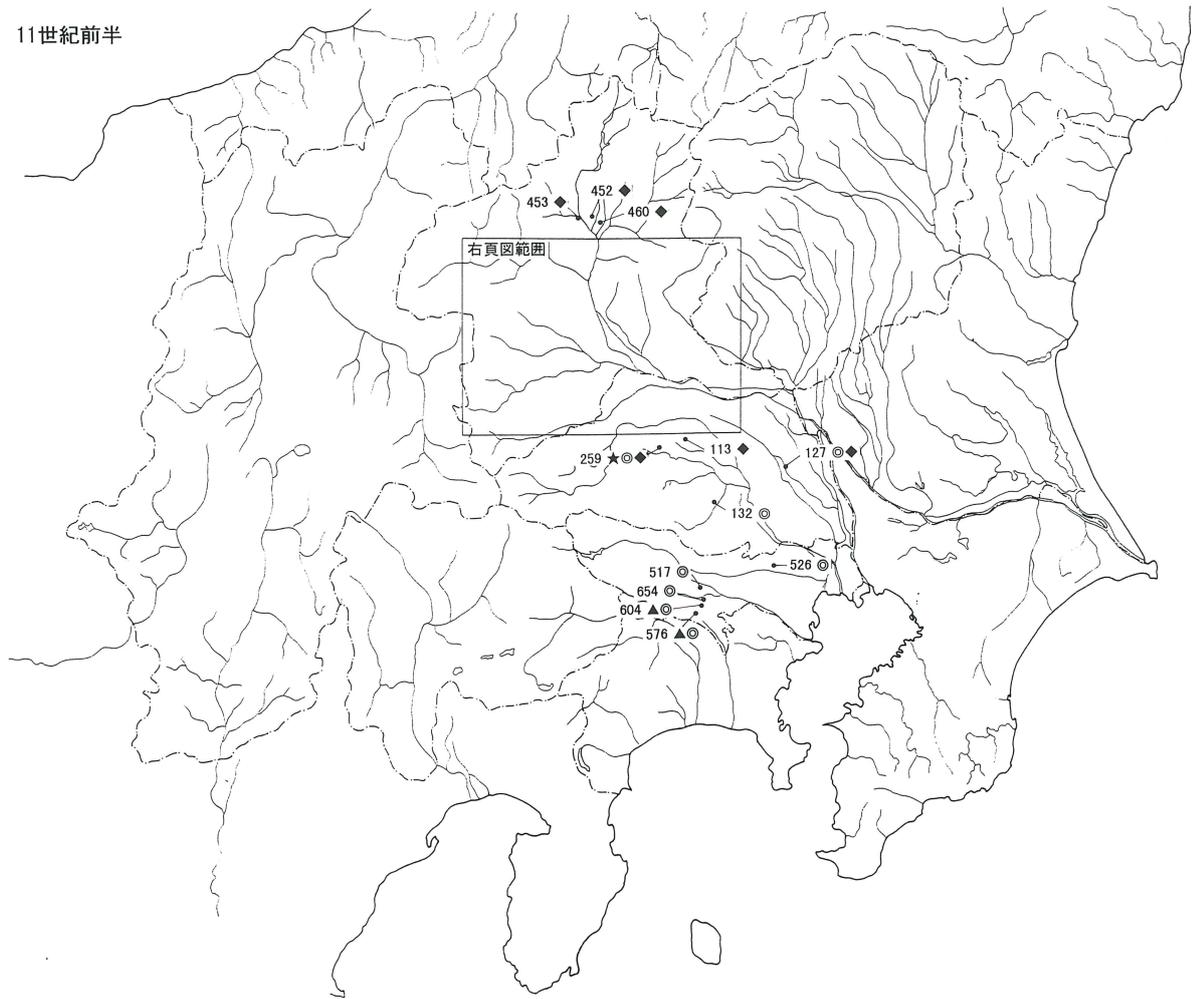
中堀Ⅵ期(第878・879図)

第886図 大宮市御蔵山中遺跡第13号土壌出土遺物



第887図 関東甲信地方土師器甕分布図（9）

11世紀前半



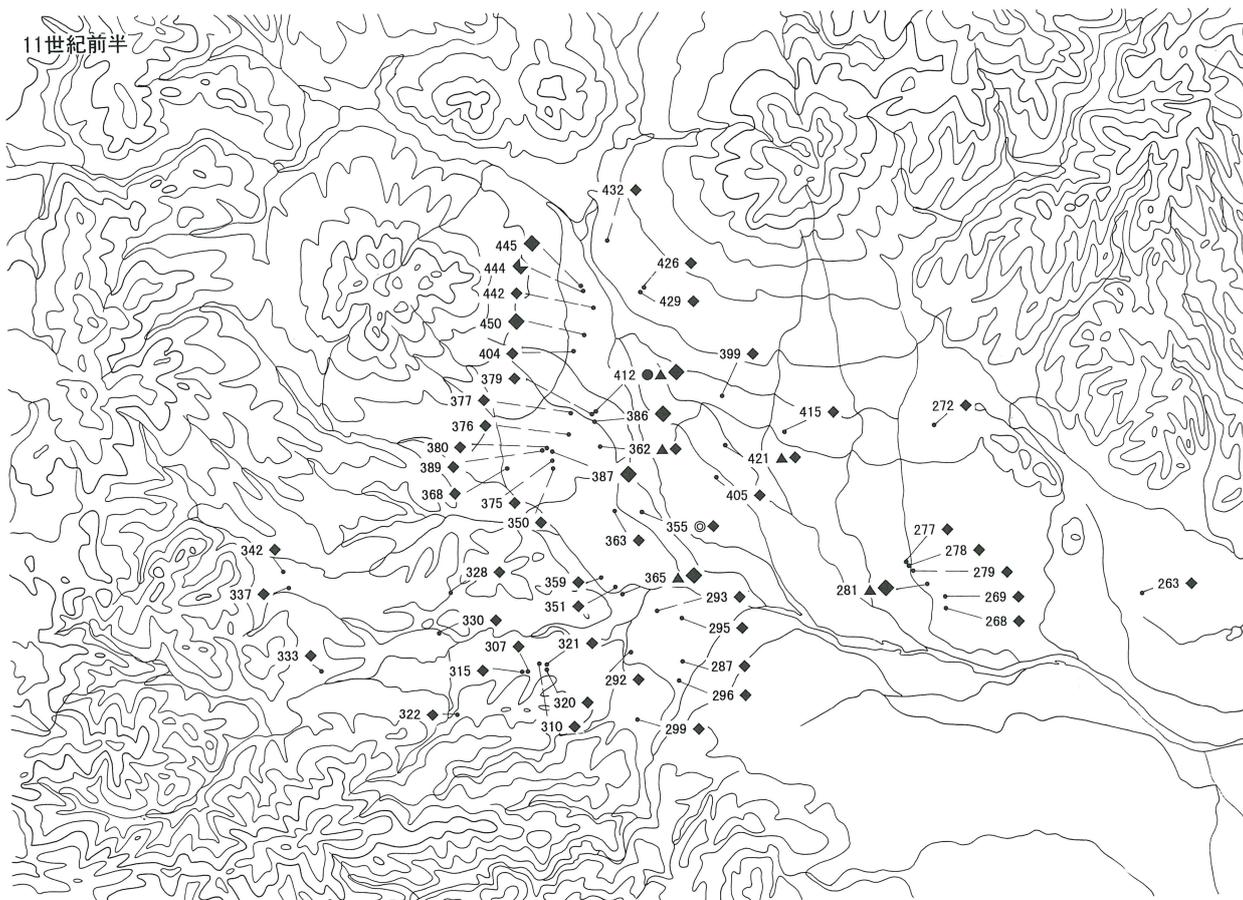
土師器甕A 1～10個 ●	土師器甕B 1～10個 ★	厚い土師器甕 1～10個 ▲	系列外の甕 1～10個 ◎	土 釜 1～10個 ◆
11～30 ●	11～30 ★	11～30 ▲	11～30 ◎	11～30 ◆
31～50 ●	31～50 ★	31～50 ▲	31～50 ◎	31～50 ◆
51～ ●	51～ ★	51～ ▲	51～ ◎	51～ ◆

113 新田坊	281 西今井	321 柳田	362 中尾	389 保渡田東	444 有馬
127 榑山	287 株木	322 佐久間	363 天神久保	399 荒砥東原	445 有馬条里
132 宮ノ越	292 滝前	328 小野広畑	365 田端	404 清里・陣場	450 大久保A
259 大久保	293 中I	330 曾木森藁	368 北新波	405 西善鍛冶屋	452 後田
263 小町田	295 中道	333 南蛇井増光寺	375 熊野堂	412 上野国分寺尼寺中間地域	453 村主
268 小角田前	296 藤岡東部地区遺跡群	337 古立東山	376 権現原	415 堤東	460 戸神諏訪
269 下田中川久保	299 平塚台	342 松井田工業団地	377 後疋間	421 野中天神	517 柴町
272 宮久保	307 神保富士塚	350 雨壺	379 国分境Ⅲ	426 窪谷戸	526 栗山
277 下淵名塚越	310 折茂東	351 下佐野	380 ミツ寺Ⅱ	429 小墓東新地	576 多摩ニュータウン No.304
278 ミツ木	315 長根羽田倉	355 新保	386 鳥羽	432 房谷戸	604 多摩ニュータウン No.583
279 ミツ木越戸	320 矢田	359 船橋	387 堤上	442 半田薬師	654 落川

V期まで増加の一途を辿っていた土師器甕A・Bの生産は減少し始める。

分布範囲は、西関東および信濃では大きな変化はみられないが、下野と房総半島ではほとんど出土しなく

第888図 土師器甕分布拡大図(9)



なる。

特に土師器甕Bの生産量が減少し、それが出土量減少の最大の原因となっている。ただし、AとBの比率では、相変わらずBの方が多い(第890図)。

北武蔵北部ではV期に引き続き、器肉の厚い甕が一定量生産され続けるようで、その量は増加している。

この甕は、上野・南武蔵でも少量出土するようになるが、地域により口縁部形状は異なり、在地性が強いものである。

在地性が強くなることは、新しい煮炊具である、系列外の甕(◎)の出土が顕著にみられることから、わかる。

上野では、須恵器の製作技法を取り入れた、羽釜の生産が開始される。なお、羽釜については後で、別に項目をもうけて説明する。

系列外の甕は、大宮台地および多摩丘陵周辺で出土

が急激に増加し、これらの地域では煮炊具の主体となる遺跡もみられるようになる(第883図(2))。

大宮台地の系列外の甕は、器肉が厚く胴部外面は縦方向にヘラケズリを施すものである。この甕は、大宮台地で生産れたもので、御倉中山遺跡(237)では、中堀Ⅶ期段階のものではあるが、坏・黒色土器を併焼する土器焼成遺構が多数検出されている(第886図)。

これをみると、底部は回転糸切りであり、ロクロを使用していることがわかる。また、胴部下位は横方向、胴部中位から上位にかけては縦方向にヘラケズリが施され、口縁端部は小さく揃むように作られる。

このような整形の特徴は、房総半島にみられる甕に類似し、坏類の体部下端にみられる手持ちヘラケズリも同様であり、その方面からの影響を受けていることは間違いない。

一方多摩丘陵周辺の甕は、様々形態のものがみられ

るが、最も多いのは第883図に示した比較的薄い胴部に縦方向のヘラケズリを施すものである。

このようにみても、上野・大宮台地・南武蔵では土師器甕A・Bの系譜が追えない甕や羽釜など、新たな煮炊具がみられる。このうち羽釜は後述するように、土師器の煮炊具とは異なった生産体制であったと考えられる。

また北武蔵では土師器甕A・Bの系譜上に乗る新たな形態(▲)がつくられていることがわかり、煮炊具生産にも確実に小地域化がみられる。

しかし、この小地域化はⅥ期になって煮炊具の生産が小地域ごとに拡散されたということではなく、Ⅲ期で述べたように土師器甕A・Bでもすでに小地域ごとに煮炊具はつくられていたのである。つまり煮炊具生産の小地域化がこの段階になって始まるというのではなく、それぞれの生産地で今までは土師器甕A・Bを作っていたのが、異なる甕をつくるようになったということである。

煮炊具の生産がさらに小規模に拡散していくのはⅦ期以降の南武蔵においてであり、上野の羽釜には当てはまらない。

中堀Ⅶ期(第880・881図)

土師器甕A・Bは一気に衰退する。

分布範囲も極端に狭くなり、上野北部でもほとんど出土がみられなくなる。

信濃では、佐久地方に若干の出土がみられるが、あとの地域では、在地産の甕が主流となる。

上野では羽釜が急激に出土量を増し、煮炊具全体のほぼ半分を占めるようになる(第890図、なお羽釜の分布については第893・894図参照)。

残った半分の煮炊具の中では、器肉の厚いもの(▲)と土師器甕A・Bがほぼ1/3ずつ出土しているようである。

北武蔵(埼玉)についても、在地色の強い土師器甕(▲)と、系列外の甕(◎)を合わせると全体の75%を超える出土率となる。特に、大宮台地については、Ⅶ期同様にロクロ使用の在地産の甕が主体となる。

器肉の厚い甕までを土師器甕A・Bの系譜と考えれば、上野・北武蔵北部では根強く武蔵型甕の生産が続けられたといえるであろう。

これに対して南武蔵の様相は大きく異なる。

系列外の甕がほぼすべての遺跡から出土するようになり、器肉の厚い甕(▲)も、北武蔵のものとは大きく異なる。

大宮台地を含めて、南武蔵は確実に武蔵型甕の生産が終息したといえるであろう。

なお、群馬・埼玉・東京の煮炊具全体の出土量をみると(第890図)、Ⅵ期に減少している点は共通するが、群馬・東京がⅦ期に再び増加に転じているのに対して、埼玉では減少化傾向が続いている。

煮炊具の出土量がただちに集落数に結びつくか難しいが、そうだとすれば興味深いことである。

中堀Ⅷ期(第882・883図(1))

土師器甕A・Bに代表される武蔵型甕の消滅時期である。

北武蔵北部・上野でも煮炊具の主体は羽釜に取って代わる。土師器甕も系列外の甕や、器肉の非常に厚い甕がほとんどとなる。

土師器甕A・Bとして分布図上にみられるものも、器肉が厚く口縁部の形態も各個体ごとに異なり、統一された生産体制があったとは考えられない。様々な土師器甕がごく限られた地域で小規模に生産されていたと思われる。

しかし、上野では集落自身が衰退したのではなく、煮炊具全体の出土量は、この時期が過去最多となる(第890図)。

これは羽釜の生産がこの時期に爆発的に増加するためで、その状況は羽釜の分布図(第897・898図)を参照していただきたい。

上野では11世紀代に煮炊具の一翼を担う、土釜に繋がるとされる器種が登場する。第889図下段に示したものは、次段階のⅨ期に相当する境町西今井遺跡の例だが、これに類似するものが、本時期から西今井遺跡に隣接する下淵名塚越(277)で出土している。

確証のないまま言えば、土釜の生産はこれらの遺跡を含む東毛地域で開始されたと想定できる。

多摩丘陵周辺では、武蔵型甕の系譜とはまったく異なる土師器甕が多量に生産されるようになる。その数は膨大で、上野同様に煮炊具全体では、この時期がもっとも出土量が多い。

北武蔵の煮炊具の衰退は、上野・南武蔵と比較して一層顕著となり、大宮台地でみられたロクロ使用の甕の生産も衰退へと向かっている。

中堀区期 (第884・885図)

武蔵型甕はまったく姿を消し、新たな煮炊具が主体となる。

この段階の煮炊具の状況が把握できるのは、信濃・甲斐を除くと、上野・南武蔵だけである。

上野では前段階に引き続き、羽釜が主体となるが、Ⅷ期に東毛地域で出現した土釜は、この時期に国府周辺の遺跡でも出土がみられるようになる。

上野の煮炊具全体の出土量は、他の地域を圧倒している (第890図)。

今回は信濃の状況は示していないが、信濃でもこの時期以降の集落が連綿と確認されており、両国は関東甲信地方でも特異な存在といえる。

多摩丘陵を中心とする南武蔵では、煮炊具の出土量は減少するが、依然として土師器甕を生産し続けている。

南武蔵の土師器甕は、様々な形態がみられ、この地域の中でも、さらに小さなエリアに分けて考えることができると思われる。

11世紀前半 (第887・888図)

中堀遺跡に集落がみられなくなった後も、上野では羽釜を中心に煮炊具がかなりの量出土している。

土釜は上野を中心に煮炊具の30%弱を占める割合で出土する (第890図)。

土釜の分布は武蔵にもみられるが、武蔵での出土量は極めて少数である。

土釜は11世紀代にある程度普及するようであるが、主体となることはなく、依然として羽釜が煮炊具の中

心である。

南武蔵でも、多摩丘陵を中心に相変わらず独自の甕を生産している。しかし、前段階から次第に衰退の傾向にあり、12世紀以降に継続するか疑問である。

なお、第890図は群馬・埼玉・東京の煮炊具の出土量をグラフに表したものであるが、Ⅷ・Ⅸ期の羽釜については、時期を分けることが困難であったため、2時期の合計を単純に半分に分けてグラフ化している。煮炊具の大まかな流れを把握できればと考えて作成した。

以上、土師器甕A・Bを中心に200年間にわたって検討を加えてきたが、ここで、簡単にまとめてみたい。

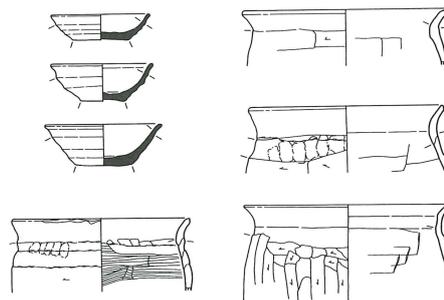
まず中堀遺跡が出現する時期にはすでに土師器甕A・Bはその分布範囲を確立しているといえる。

そして、Ⅱ期以降に次第増加する土師器甕Bの分布は、その出現当初から、武蔵型甕の広大な分布範囲に広がっていて、新たな形態の生産・流通には在地に根差した勢力が関与した可能性を考えた。

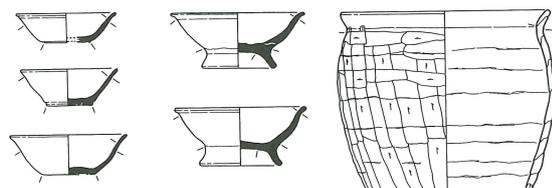
この広域な分布と出土量の増加は、Ⅴ期にピークを迎える。ただし、南武蔵では急激な増加傾向はみられず、武蔵型甕生産の中心であったか疑問である。

そして、Ⅴ期には北武蔵北部の児玉地域を中心に、

第889図 10世紀後半の土師器甕と土釜



境町西今井遺跡SB186



境町西今井遺跡SB197

器肉の厚い甕が少量生産されるようになる。

この甕は、土師器甕Bのように、広範囲に分布することなく在地性の強い甕として認識できるものである。

V期を境に土師器甕A・Bは減少し、VI期には大宮台地・多摩丘陵などで、系列外の甕が出現するようになる。この段階で上野では羽釜が出現することや、器肉の厚い甕の形態が小地域ごとに異なることなどを考えると、煮炊具における小地域性が認められるようになる時期といえる。

そして、VII期にはこの小地域性が強くなり、土師器甕A・Bの生産は急速に衰えていき、生産の拠点であった上野・北武蔵だけに少量分布するだけとなる。

これに呼応するように、北武蔵では器肉の厚い甕が、南武蔵では系列外の甕が、そして上野では羽釜が煮炊具の中心となってくる。

この上野の羽釜は、小地域化という表現には該当しない、大量生産・広域流通である。これに対して南武蔵ではVIII期になると、まさに小地域化といえる状態となり、様々な形態の煮炊具が確認できる。

VIII・IX期になると、土師器甕A・Bは生産されなくなり、羽釜・土釜・系列外の甕が上野・武蔵の煮炊具となり、上野・武蔵の煮炊具生産と流通は、この段階で再び安定する。

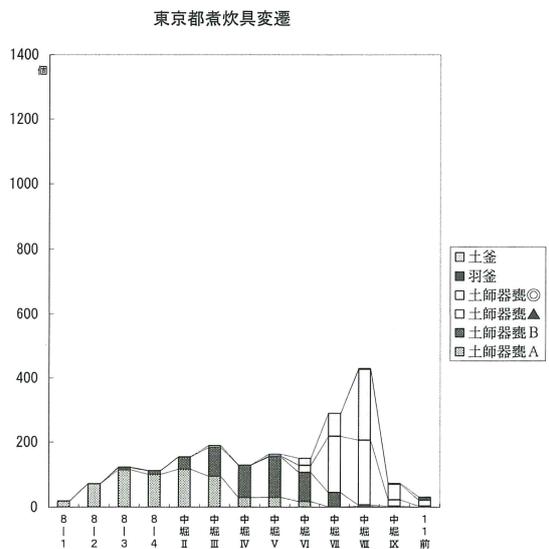
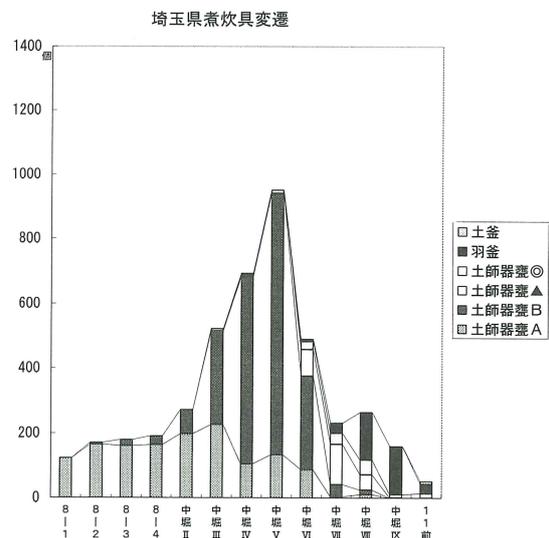
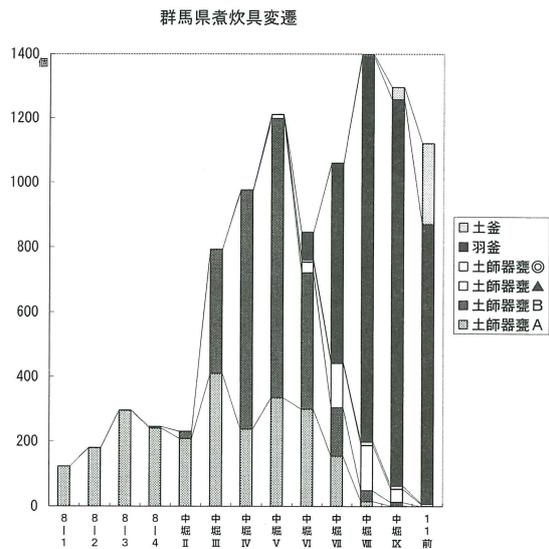
このように、土師器甕A・Bは8世紀以降、10世紀前半まで煮炊具の主体となっているが、それ以降は様々な煮炊具が登場してくる。中堀遺跡では羽釜の出現がそれであり、10世紀代の煮炊具を考える上で避けて通れないものであるそこで、次に羽釜について、土師器甕と同様な視点から考察を加えてみたい。

2 羽釜

中堀遺跡からは、総数143点の羽釜が出土した(実測個体数)。この数は現在までに、埼玉県内で報告された215点に迫る数であり、県内最多の出土量である。

これらの羽釜のほとんどは、ロクロ整形され、胴部下半に雑なヘラケズリを施す。胎土には角閃石や輝石

第890図 地域別煮炊具変遷



砂粒を多量に含み、焼成はやや甘く、還元焰、半還元焰、酸化焰での焼成がみられる。

プロポーションは、卵型（須恵器羽釜A）、樽型（須恵器羽釜B）を基本としている。鏝はとても短く、なかには鏝径が胴部最大径を下回るものもある。

このような特徴をもつ羽釜は、『吉井型羽釜』と呼ばれ、その名前の通り、群馬県の吉井町～藤岡市にかけての地域で生産されてものであると考えられている（木津・桜岡1990）。

『吉井型羽釜』については、出土量の多い群馬県で研究が盛んで、10世紀前半には出現し、ロクロ整形が雑になっていく傾向はみられるものの、ほとんど形態変化せずに11世紀代まで生産されることが分かっている。

この『吉井型羽釜』以外にも、群馬県北部の月夜野窯跡群で生産された『月夜野型羽釜』の存在も知られるところであり、『吉井型羽釜』よりも若干古い段階から生産が開始されていると考えられている（中沢1986）。

また近年、前橋市東部の荒砥地域を中心に、非ロクロ整形の羽釜が一定量存在することが確認され『東毛型羽釜』（桜岡1997）と呼ばれているが、まだ実態は不明な点が多い。

ここでは羽釜を中心に、上野、武蔵の10世紀代の煮炊具について述べてみたい。

なお、関東甲信地方における、Ⅵ期以降の10世紀代の土器編年は、未確定なところが多く、ここでⅥ期としたものは、中堀遺跡の編年観をもとに、さらに管見で分かる範囲で、より確実な遺跡だけを取り上げた。そのため、甲斐や相模などで、Ⅶ期としたものの中には、Ⅵ期に遡るものが多分に含まれる可能性があることを述べておく。

分布図では、吉井型羽釜を●で、月夜野型羽釜を★で表している。また、ロクロ整形かどうか不明瞭なものを▲で示し、明らかに非ロクロ整形のものと、甲斐・信濃・相模などにみられる、在地の甕と同じ整形で作られるものを◎で表した。

中堀Ⅵ期（第891・892図）

Ⅵ期は関東甲信地方で、古代の羽釜が出現する段階である。

Ⅵ期の羽釜がみられる地域は、月夜野型羽釜の分布する、群馬県北部の山間地域および、吉井型羽釜の分布する、群馬県南西部の利根川西岸に集中する。

このほか、下総・常陸に極少量の羽釜が検出される。ちなみに、この下総・常陸でみられる羽釜は、上野の羽釜と大きく異なり、口縁部がくの字に屈曲するもので、このような形態の羽釜は、Ⅶ期以降に相模でも主体となることから、太平洋岸沿いに広く分布するものと思われる。

月夜野型羽釜は、利根・水上・吾妻地域を中心に、渋川市北部まで分布している。この範囲はⅦ期以降も大きく変化することはなく、出現段階で一定の供給エリアがあったと考えられる。

吉井型羽釜は、鐮川流域および利根川西岸に分布が集中する。上野東部ではごく少数しか確認されていない。主に生産地と国府を中心とする地域に分布していることがわかる。

月夜野型・吉井型とも出土量はそれほど多くなく、この段階では、土師器甕が煮炊具の主体である（第890図参照）。

また両者の分布範囲は、その南端と北端でほぼ接するかもしくは、一部重なると思われる。

両者のどちらがより古いのかという疑問が湧くが、石墨遺跡（258）と下川田平井遺跡（253）の月夜野型羽釜の中に、吉井型羽釜とプロポーションが類似するものがみられる（第896図）。

小さな底部と卵形の胴部、さらに鏝部から上が強く内湾するもので、プロポーションだけでは、どちらか判別できない。しかし、鏝部より下位には縦方向のヘラケズリが施され、月夜野型羽釜であることが分かる。

この羽釜と伴出する土師器甕は、胴部の器肉がまだ薄く、古い様相をみせることから、9世紀第4四半期～10世紀初頭の年代観が与えられる。

これに対して、吉井型羽釜で、確実にこの段階まで